

溝口雄三の中国学研究方法に関する研究：後期の活動を中心に

王， 晶

<https://doi.org/10.15017/1440996>

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



博士論文

溝口雄三の中国学研究方法に関する研究
—後期の活動を中心に—

九州大学大学院
比較社会文化学府

王 晶

平成 26 年 3 月

【凡例】

- 1、訳文について、特別な説明がない場合、すべて拙訳になる。
- 2、引用文の下線は、特に断らないかぎり、引用者による。
- 3、本論文においてはすべて敬称略とした。

目次

序論 溝口雄三の方法論から読み解ける構図を乗り越える方法.....	1
1 溝口雄三について.....	2
2 日中両国における溝口雄三研究および問題点.....	5
3 本論文の視点.....	11
3-1 批判的視点の構築.....	12
3-2 構図を乗り越えようとする試み.....	15
4 本論文の目的と構成.....	16
第Ⅰ部 孤立の中で推進する「方法」.....	18
第1章 日本の中国学と溝口雄三の改革.....	21
1 日本の中国学学科について.....	21
2 外国学としての中国学を明確化する実践.....	24
2-1 制度上の改革としての学科建設.....	25
2-2 外国と外国語のあり方に関する思考—中国語教育をめぐって.....	26
第2章 対象の変化と批判的意識.....	35
1 「タダの中国」に対する注目.....	35
2 典型への反発およびその対立面の構築.....	39
2-1 尾上兼英『魯迅私論』に対する溝口の注目点.....	39
2-2 対立構図の確立.....	44
2-3 問題点.....	48
3 まとめ.....	50
第3章 相容れない批判意識.....	51

1	『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』について	51
1-1	『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の翻訳	51
1-2	日本語版の出版による反響	53
2	新たな研究方法論の呼びかけ	55
3	『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけ	60
3-1	キーワード翻訳における選択	60
3-2	『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけの変化	62
3-3	問題意識の違い	64
4	まとめ	67
第Ⅱ部	現在と向き合う思想的営為	75
第4章	戦争の感情記憶と溝口雄三	81
1	「日中・知の共同体」活動の開催	81
2	交流方式が確立する過程	85
3	孫歌と溝口が提示する構図	87
4	構図を乗り越えようとする試み	92
5	まとめ	94
第5章	戦争の感情記憶をめぐる議論について	96
1	戦争の感情と記憶に対する態度の分かれ	96
1-1	孫歌の問題提起の深化—溝口雄三の態度	96
1-2	批判の声	98
1-3	孫歌の感情記憶分析に対する読み方	101
2	批判を越えた地平へ	103

3	まとめ	105
第6章 皮膚感覚の問題化について		106
1	戦争の感情と記憶をめぐって	106
2	戦争の感情記憶によって開かれた共同空間	107
2-1	戦争の感情記憶に対する代田智明の反応	108
2-2	加害と被害の関係の多層化	110
3	「癒し」という視点	112
3-1	被害と加害をつなごうとする発想—「癒し」の視点	113
3-2	聞き手の確立と歴史学への批判	114
4	まとめ	118
おわりに		119
付録	溝口雄三年譜	124
参考文献		152

序論 溝口雄三の方法論から読み解ける構図を乗り越える方法

近年、中国の学界では「海外中国学」（もしくは「国外中国学」）といった名称が盛んに使われている。「海外中国学」とは、文字通り海外の研究者たちによって行なわれた中国研究とりわけ中国近現代史研究を指し、その研究成果は中国の学界から重視されている。学界ではその成果が最初の紹介、評価の段階から、系統的に整理され、最近では学術史まで形成されつつある。日本の中国学研究はその重要な一環として重視されている。この分野の研究も、速やかに発展しつつあり、最も注目に値する成果といえ、嚴紹璽の『日本中国学史稿』（学苑出版社 2009 年）を挙げなければならない。その中で中国思想史研究者溝口雄三が挙げられている。近年、中国における溝口の研究は非常に注目され、海外中国学分野において、既に避けては通れない重要な存在になったと言える。

溝口の研究分野は専門である明清思想研究だけにとどまらず広範である。1980 年代から、戦後日本の中国研究、特に中国近代史研究に異議を唱え、新たな視点からそれを見直そうと試みた。晩年に至って、日中関係や異文化間の理解や交流をも視野に入れた。本論文は溝口の広範な活動のある程度視野に収めるとしても、明清思想史研究および中国近代史研究の総合的な分析を行うものではない。溝口の業績を統一的に俯瞰するよりは、後期の活動の重要性に注目する。巨視的な視点によって従来の成果を統合的にまとめあげるよりは、これまであまり重視されてこなかった細部に拘りながら新たな解釈の可能性を見い出すことをめざしている。

溝口の活動は評価されているものの、親中国的というレッテルが安易に貼られる傾向が、日中の少なからぬ研究において見られる。中国で『方法としての中国』（東京大学出版会 1989 年）は処女作¹よりも早く紹介され、翻訳出版された。その中における中国自身の歴史の発展の道筋を重視するという溝口の主張は、西洋中心主義への批判として注目を集め、哲学および歴史学研究者たちに高く評価されている。一方、日本でも『方法としての中国』は広く注目されたが、中国自身の独自性を重んじるのは、一国の固有の伝統や文化を絶対化することにつながると批判を受けることとなった。溝口の研究の受容は、日中で異なる反応を見せているかの印象を与えながらも、その

¹『中国前近代思想の屈折と展開』東京大学出版会 1980 年。

どちらにおいても溝口が親中国的であるという視点は共有されているのである。その限定的とも言える解釈は、溝口の研究をその全体性においてとらえているとは言えない。またその活動についても、「日中・知の共同体」などの後期の活動は簡単に言及されるにとどまり、詳しい検討は受けていない。従って、これまで十分に扱われてこなかった多方面からの溝口研究が期待されている。本論文では、従来あまり研究の対象となつてこなかった後期の活動を考える。主に「日中・知の共同体」を中心に、溝口の日中戦争をめぐる歴史認識問題や戦争責任問題をめぐる原理的分析を通じて、現状において歴史認識を考えようとする態度に着目したい。そこから日中間の相互理解を深める新たな視点の可能性を追求する。そうした探求に乗り出す前に、溝口がどのような活動をしたかについて簡単にたどってみたい。

1 溝口雄三について

溝口雄三（1932 年－2010 年）は、満州事変の翌年に名古屋市に生まれる。幼少期は戦争中であり、中学生の時に敗戦を迎えた。東京大学時代は、魯迅や人民文学などを専攻し、「趙樹理の文学について」と題する卒論を提出した。その後家業を継ぎ、1965 年弟に社長の座を譲る。1967 年名古屋大学院人文科学研究科中国文学専攻に入つて、入矢義高²に師事する。修士論文「日本の近代と中国の近代」を提出して修士修了³。中国文学を研究するため、中国新文学の源流と目されていた明末の李卓吾を対象に選んだ。これがきっかけとなって、思想史研究の道へと進むことになった。

²1910 年－1998 年。中国の伝統詩文、禅語録などを専攻とする中国古典文学研究者。

『明代詩文』、『求道と悦楽 中国の禅と詩』などの著作を書いている。

³修了直後東京大学文学部中国文学研究室の助手となる。1969 年より埼玉大学教養学部助教授、1975 年同大学教授になる。1978 年より西順蔵の後任として一橋大学社会学部教授就任。1981 年より山井湧の後任として、東京大学文学部中国哲学科教授就任。1980 年論文集『中国前近代思想の屈折と展開』が公刊されると、荒木見悟が採り上げ、九州大学文学博士学位を授与された。1993 年より 2003 年まで大東文化大学文学部教授を務めた。

溝口の研究業績は数多くある⁴。編著書 30 数点、論文およそ 100 篇以外、雑著、辞典・事典、朱子語類翻訳の監修などたくさん挙げられる。中国で 2011 年 7 月『溝口雄三著作集』四冊⁵が既に三聯書店により出版されている。他に中国語に訳されて出版した著書は 5、6 冊あり、その中で『中国前近代思想の屈折と展開』と『方法としての中国』の翻訳バージョンは二つある。中国語で発表した論文は 40 本近くある。

1993 年に溝口の東京大学文学部の退官に際して、伊東貴之は『『挫折』論の克服と『近代』への問い―戦後日本の中国思想史研究と溝口雄三氏の位置―』（『中国哲学研究』5 1993 年）を書いている。その中で溝口の研究を簡潔にまとめている。

（溝口の一筆者による）学問の本領は、一言でこれを纏めるなら、従来の中国哲学研究の旧套を脱し、東洋史学、ことは社会経済史学の分野での達成を大幅に取り入れ、日本思想史や西欧の政治思想史との構造的な異質性の比較をも念頭に置きつつ、中国の前近代（近世）を主たるフィールドとして、この時期に一貫する思想史の大きな道筋とその内実とを掴みだしたことにあると言えよう。⁶

従来の中国哲学思想史研究の狭い領域を超えて、政治・経済思想などを含む広い意味での思想史研究を試みた革新性と、比較文明論の視座に基づく中国思想史の一貫性といった二つの特徴が強調された。

中国思想史における一貫性については、溝口の主要な研究対象である明清思想史の業績からも確認することができる。その例として処女作『中国前近代思想の屈折と展開』があげられる。この著書は、1970 年代の 10 年間に書かれた論文をもとにできたものである⁷。その中において、溝口は新しい理観を模索した李卓吾に焦点をしぼり、

⁴詳細は付録の年譜をご参照のこと。

⁵具体的には以下の 4 冊である。①『作為方法的中国』孫軍悦訳 ②『中国的衝擊』王瑞根訳 ③『中国的公与私・公私』鄭静訳 ④『中国前近代思想之曲折与展開』龔穎訳。

⁶伊東貴之『『挫折』論の克服と『近代』への問い―戦後日本の中国思想史研究と溝口雄三氏の位置―』（『中国哲学研究』5 1993 年 152 頁）。

⁷具体的には、以下の 5 篇の論文を下敷きに加筆や修正が行なわれ、上下に及ぶ 6 章の

遡っては王陽明、朱熹へ、降っては黄宗羲、顔元、戴震らを経て、清末の康有為、孫文らに至って、長いスパンで統治理念の継承をつかみ出した。氏によれば、明末清初に至って、理は人間の欲望と対立的であった理観から人々の生存欲、所有欲の肯定的な理観へと変化するが、公正とされていること、人間性にそっていることと見なされていること、普遍的にどこでも通用すると見なされてきたこと、の三点は内実を更新しながらも通時的に宋代から近代まで変わっていないとされる⁸。晩年に至って、溝口は池田知久・小島毅との共著『中国思想史』（東京大学出版会 2007 年）を書いて民間空間の発展、つまり、明末清初の県規模の郷里空間から清末期の省規模の郷里空間までの成熟といった一貫性を提示した。溝口は西洋の地方自治の概念と混乱を起こすことを避けようとして、それを「郷治」と名づけて、中国的地方自治を指す⁹。彼によれば、「郷治」とは、官・紳・民の共同による「善挙」から始まる¹⁰。中国では、『官治』と『民治』はさらに郷紳層の「紳治」を加えて錯綜し、あるいは互いに補完し合い、依存しあるいは相反発し合いながらも、官、紳、民合同で『自治』を形成していた、というのが実態であったとされる。¹¹

明末清初の黄宗羲らによる地方のことは地方の「公論」にゆだねるという社会原理が清代において、郷治活動、すなわち善会などの勧善的な地方公益活動、団練（民間自衛組織）や学会などの地方共同活動、宗族などの相互扶助組織、ギルドなどの互助的な私益活動などの展開といった形で継がれ、清末になって各省の独立にまで発展し、

著書として生まれる。

①『『孟子字義疏証』の歴史的考察』『東京大学東洋文化研究所紀要』48 1969 年

②「明末を生きた李卓吾」『東京大学東洋文化研究所紀要』55 1971 年

③「明末清初思想の屈折と展開」『思想』636 1977 年

④『『明夷待訪録』の歴史的位罫』『一橋論叢』『一橋論叢』83 (3) 1979 年

⑤「中国前近代における「理」の機能をめぐって」『一橋論叢』83 (4) 1980 年

⁸溝口雄三『<中国思想>再発見』左右社 2010 年 参照。

⁹溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』東京大学出版会 2007 年 209—210 頁。

¹⁰同注 9 209 頁。

¹¹溝口雄三「辛亥革命の歴史的個性」『思想』989 2006 年 95 頁。

地方勢力の増大化、地方の分権自治という方向で継承されてきたとされる。こうして政治的活動レベルでもその一貫性が明らかにされることになる。

これ以外にも、『中国の思想』（放送大学教育振興会 1991 年、再版は『<中国思想>再発見』左右社 2010 年）、『中国の公と私』（研文出版 1995 年）、伊東貴之・村田雄二郎との共著『中国という視座—これからの世界史』（平凡社 1995 年）、丸山松幸・池田知久と共編『中国思想文化事典』（東京大学出版会 2001 年）などがあげられる。

ただ重要なことは、こうした思想的・一貫性の探究がそれだけにとどまらず、溝口を方法論的な考察にも導いた点である。明清思想史研究に基づいて、1980 年代頃より、溝口は方法論の問題に目を向けはじめる。1989 年に出版される『方法としての中国』はその代表作である。その中において戦後日本の中国近代史研究に異議を唱え、中国近代史の見直しを試みる。本論文は、その「方法」が推進される経緯をたどって、溝口の志向した目的を考察する。

1990 年代後半より、アカデミズムの世界にとどまらず、研究範囲を拡げて「日中・知の共同」活動を開催し、日中間の歴史認識問題などの現実問題にも触れる。その成果として 2004 年に『中国の衝撃』（東京大学出版会 2004 年）が出版される。本論文においては、溝口の戦争責任問題をめぐる原理的な分析を通じて、問題となるさまざまな現状認識の態度を分析の対象とする。

2 日中両国における溝口雄三研究および問題点

本節では、これまで溝口がどのように理解されてきたかを、中国、日本を対象として見ていく。日中における評価が異なるといいながらも、実は双方には視点における共通点があることを示す。まずは中国側の評価について見てみたい。

1991 年から、中国哲学思想研究者李甦平の「溝口雄三(日)教授談研究中国」（『哲学動態』1991 第 3 期）と「構築儒学的新框架—読溝口雄三の『作為方法的中国』」（『国外社会科学』1991 年第 7 期）という二篇の論文により、溝口の学説が中国に紹介されはじめる。このほかに、『方法としての中国』は李甦平等によって中国語に訳され、1996 年に出版される。処女作『中国前近代思想の屈折と展開』は、1997 年に中国語に訳され出版されるが、それに先駆けて『方法としての中国』の中国語版が出版され

ることからも、この著書に対する注目度が高かったことが分かる。

李甦平の論文が発表された翌年の 1992 年に、歴史学研究者葉坦の「日本中国学家溝口雄三」(『国外社会科学』1992 年第 6 期)が発表されている。それらが溝口の中国に紹介される発端となる。その後、溝口に関する論文が続々と掲載され、注目されるようになる¹²。

¹²具体的に並べてみれば、以下の通りである。

- 李甦平「溝口雄三(日)教授談研究中国」『哲学動態』1991 年第 3 期
- 李甦平「構築儒学的新框架—読溝口雄三の『作為方法的中国』」『国外社会科学』1991 年第 7 期
- 葉坦「日本中国学家溝口雄三」『国外社会科学』1992 年第 6 期
- 汪暉與溝口對談錄「没有中国的中国学」『讀書』1994 年第 4 期
- 張萍「日本人認識中国文化的五個階段—溝口雄三教授訪談錄—」『中国文化』1995 年第 2 期
- 孫歌「在歷史中尋找什麼—再讀『在重洲思考』」『讀書』1996 年第 7 期
- 李長莉「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三的中国思想研究—」『国外社会科学』1998 年第 1 期
- 陳来「簡論東亞各国儒学的歷史文化特色」『北京大学學報(哲学社会科学版)』1999 年第 1 期
- 葛兆光「重評九〇年代日本中国学的新觀念—讀溝口雄三《方法としての中国》」『域外中国学』復旦大学出版社 2002 年
- 蔡慶「溝口雄三的中国学方法研究」『武漢大學學報(人文科学版)』56(2) 2003 年
- 方旭東「Modern 之後思想史研究範式的轉移」『哲学研究』2003 年第 4 期
- 楊芳燕「明清之際思想轉向的近代意涵—研究現狀与方法的省察」『開放時代』2004 年第 4 期
- 何培忠「日本中国学考察記(二)—訪著名日本中国学家溝口雄三—」『国外社会科学』2004 年第 3 期
- 韓東育「中国伝統“平衡論”的前提假設与反假設」『社会科学戰線』2004 年第 1 期

溝口の学説は、中国では主に哲学思想史研究者と歴史学研究者たちの関心を引く。その研究者たちの評価には共通性がある。つまり、従来の中国学研究における西洋中心主義の反省を促し、中国中心的視点を提供したという言説である。その言説の具体的な例としては、武漢大学の中国哲学研究者の蔡慶があげられ、蔡慶は「溝口雄三的中国学方法研究」の中で次のように述べている。

溝口雄三は当代日本中国研究における有名な学者である。彼は思想史、哲学史、社会史、経済史などの広い分野にわたって中国研究を行い、大きな成果をあげた。特に中国学研究方法において、溝口雄三は西洋的範疇、論理、価値判断基準をもって東方思想文化を計る従来のやり方に対して、文化の価値の多元性という観点を主張し、「アジア近代」における主体性という問題を提出して、中日学界で広く注目された。溝口雄三の中国学研究方法は時代的意義も学術的意義もそなえている。¹³

さらに中国社会科学院の葉坦は「日本中国学家溝口雄三」の中で次のように評価している。

-
- ・ 史艷玲、張如意「日本中国学研究的新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」『河北大学学报（哲学社会科学版）』2008年第5期
 - ・ 孫歌「在中国的歴史脈動中求真—溝口雄三の学術世界—」『開発時代』2010年第11期

¹³原文：〔溝口雄三是日本当代中国学研究久負盛名的学者，他广泛涉及中国学研究的諸多領域，包括思想史、哲学史、社会史、經濟史等，取得了相当的成就。尤其在中国学治学方法上，溝口雄三一反過去以西方的範疇、邏輯、価値判断標準来衡量東方思想文化，主張文化価値多元觀，提出了“亚洲近代”的主体性問題，引起了中日学界的广泛關注。溝口雄三治中国学的方法也具有時代意義和学術意義。〕（本論文における引用文の翻訳はすべて筆者による拙訳である。）

蔡慶「溝口雄三的中国学方法研究」『武漢大学学报（人文科学版）』56 2003年第2期 179頁。

このような主張は観念的に、理性的に「ヨーロッパ中心論」の限界を解明しただけでなく、具体的、客観的研究方法と成果で中国学研究に貴重な理論方法と判断基準を提供した点で、さらに重要である。溝口教授は「ヨーロッパ中心論」を否定すると同時に、各国と各民族独自の価値と歴史プロセスを評価することだけにとどまらず、各自の異なる文化類型および判断基準を超えて、もっと広い「グローバルな視野」を見いだそうとした。¹⁴

史艷玲、張如意は「日本中国学研究の新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」という論文の中で、多元化、内発的な近代、ヨーロッパ価値体系の相対化という三つの点から溝口の新たな研究視角を解釈している¹⁵。

中国社会科学院近代史所所属の李長莉も「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三的中国思想研究—」の中で次のような評価を述べている。

溝口雄三は西洋の近代化のパターンを唯一の普遍的認識方式とする見かたが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲したことを指摘し、従来から踏襲されてきた認識方式を徹底的に批判した。彼は世界の多元性と平等性の立場に立って、中国の歴史自身の中から中国思想の内在的流れを把握し、中国自身の価値観念の中から固有理念を発見すべきだと主張した。¹⁶

¹⁴原文：「這樣的主張不僅僅從觀念上、理性上明辨“歐洲中心論”的局限，更重要的在于以具体的、客觀的研究方式与成果，為中国学的研究提供了珍貴的理論方法与評判標準。在否定“歐洲中心論”的同時，溝口教授并未將視野駐足于各国各民族独有的價值標準与歷史進程，而是超越于各自有別的文化類型与評判標準之上，希圖將學問建立于博大的“全球視野”的着眼点。」

葉坦「日本中国学家溝口雄三」『国外社会科学』1992年第6期 60頁。

¹⁵史艷玲、張如意「日本中国学研究の新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」『河北大学学报（哲学社会科学版）』2008年第5期。

¹⁶原文：「溝口雄三對這種沿襲已久的認識方式給予了徹底批判，指出這種把西方的近代模式普遍化、唯一化的認識方式，扭曲了亞洲国家歷史的本来面目，他主張站在世界多元和平等的立場，力求從中国歷史本身來把握中国思想的內在流脈，從中国自己的價

溝口は自分の研究を通じて、世界近代化のプロセスは多元的であり、西洋原理を普遍的、唯一の近代的規則とした従来の見かたが、西洋中心主義と西洋優越意識によって生まれた偏見であることを明らかにした。この結論は、従来から踏襲されてきた近代認識への根本的な見直しであり、また「近代的」価値の中身への本質的な懐疑でもある。¹⁷

上述した引用において、「新たな視角」、「中国原理」、「西洋中心主義的な近代認識に対する根本的な見直し」といった言葉が繰り返して現れている。ここから中国における溝口の学説の読み方が垣間見えてくる。つまり、西洋に劣らない中国の独自性の発見として溝口の学説は肯定的に評価されている。

取り挙げた 20 数篇の論文を通してみれば、『方法としての中国』への注目度が最も高いことに気づく¹⁸。西洋と異なる近代化過程が対等に存在するという点が非常に

値観念内部發現其固有理念。]

李長莉「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三的中国思想研究—」『国外社会科学』1998 年第 1 期 50 頁。

¹⁷原文：[溝口通過自己的研究認為，世界近代化的過程是多元性的，而以往把西方原理視為世界普遍、唯一近代性準則的看法，是西方中心主義和西方優越意識而產生的偏見。這一結論，對於人們所一直沿襲的近代化認識，是一種根本性的改觀，對“近代性”的價值內涵也提出了本質的質疑。]

同注 16 51 頁。

¹⁸中国大陆だけではなく、台湾でも同じ傾向である。詳細に取り上げてみれば次の通りである。

- 吳震「十六世紀中國儒學思想的近代意涵—以日本學者島田虔次、溝口雄三の相關討論為中心」『東亞文明研究學刊』1 (2) 2004 年
- 張崑將「當代日本學者陽明學研究的回顧與展望」『臺灣東亞文明研究學刊』2 (2) 2005 年
- 陳光興「「亞洲」做為方法」『臺灣社會研究』57 2005 年
- 石之瑜・李圭之・曾倚萃「日本近代中国学：知識可否解放身份」『中国社会科学』

受け入れられやすい。溝口の研究は、基本的に新たな方法や視角と研究パラダイムを提供するものと位置づけられている。西洋的範疇、論理、価値判断基準を退けることによって、中国自身の価値観の中からは固有理念を再発見するといったような言説からは、中国の価値を絶対化するニュアンスが読み取れないわけではない。これによって溝口は親中国派の人であるように思われることがある。

一方、日本における溝口に関する言説を整理してみれば、中国と異なり、批判を浴びることが多い¹⁹。具体的にいえば、敢行する人であると溝口の革新性を認めるもの

学』2007年第1期

- ・ 曾倚萃『溝口雄三の中國方法—超克亞洲的知識脈絡』國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心 2008年
- ・ 陳光興・孫歌・劉雅芳篇『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台灣社会研究雜誌社 2010年
- ・ 石之瑜・徐耿胤「亞洲国家視野下的中国歴史基体—兼論日本、韓国和越南發展研究視角的可能性」『世界經濟与政治』2011年第5期
- ・ 張永堂「做為「方法」的溝口雄三教授」『臺灣社會研究』81 2011年

¹⁹詳細には主に次の10数篇である。

- ・ 奥崎祐司「書評—溝口雄三「中国前近代思想の屈折と展開」『歴史学研究』504 1982年
- ・ 三浦秀一「〈書評〉溝口雄三著『中国前近代思想の屈折と展開』『集刊東洋學』48 1982年
- ・ 久保田文次「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」『史潮』新16 1985年
- ・ 杉山文彦「近代中国像の『歪み』をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」『文明研究』6 1988年
- ・ 臼井佐知子「溝口雄三著『方法としての中国』」『史學雜誌』98(9) 1989年
- ・ 子安宣邦「思想の言葉：方法としての中国」『思想』783 1989年
- ・ 代田智明「「溝口方法論」をめぐって—続・近代論の構図(上)—」『野草』46 1990年
- ・ 本野英一「中国の現状を歴史学はどう説明するか—日米の近刊二書を中心に—」

もあれば、中国の独自性といった言い方に反感を持って不可解の念を表し、厳しく批判するものもある。むしろ後者のほうが多数を占める。それは日本においてアジア主義や日本主義を鼓吹して戦争を起こした歴史があるので、中国独自の歴史発展の道筋という言い方には非常に敏感であり、警戒心が高いことと無関係ではないと思われる。

日本においても、中国の独自性・内発性が注目点となっていることは中国と違わない。だが、中国では肯定的に受け入れられていることに対して、日本ではそこに批判が多く集まっている。評価する中国と批判的な日本という対照があるにもかかわらず、どちらも根底には、親中国派—溝口という共通の理解が存在している。

3 本論文の視点

『東方』107 1990 年

- ・ 並木頼寿「日本における中国近代史研究の動向」小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店 1993 年
- ・ 伊東貴之「『挫折』論の克服と『近代』への問い—戦後日本の中国思想史研究と溝口雄三氏の位置—」『中国哲学研究』5 1993 年
- ・ 岸本美緒「アジアからの諸視角—「交錯」と「対話」(批判と反省)」『歴史学研究』676 1995 年
- ・ 伊東貴之「「他者の来歴、「現象」としての中国—状況論的、文脈的、そして、原理的に—」『現代思想』29 (4) 2001 年
- ・ 代田智明「溝口雄三著『中国の衝撃』」『中国研究月報』59(3) 2005 年
- ・ 西野可奈「《書評》溝口雄三『中国の衝撃』」『北東アジア研究』8 2005 年
- ・ 穂山新「中国を語る作法と「近代」」『社会学ジャーナル』32 2007 年
- ・ 伊東貴之「解説—伝統中国の復権、そして中国的近代を尋ねて」『中国思想のエッセンスⅡ 東西往来』岩波書店 2011 年
- ・ 子安宣邦「現代中国の歴史的な弁証論(アポロジ)—溝口雄三『方法としての中国』『中国の衝撃』を読む」『現代思想』40 (14) 2012 年

3-1 批判的視点の構築

溝口は親中国派の研究者のように受け取られているが、実はそれが一面的な読解に基づいていることを本節で明らかにする。

親中国的というレッテルについては、溝口自身が陳光興・孫歌²⁰との対談「面對歴史的敬畏之念—溝口雄三教授東京訪談」において言及している。その中で、そうした決めつけを否定しようとしている。具体的に陳光興と溝口は以下のような問答をする。

陳光興（問）： 溝口先生は中国大陆で大いに尊敬されています。その中で、先生は中国に同情し中国を熱愛しているという見解があります。しかし、先生の中国研究は中国を理解することだけにとどまらず、実は中国を通して改めて自己認

²⁰彼らを自分自身の研究の理解者であることを溝口は示唆している。

「僕は自分のことを研究職という職人だと思っていて、理論家ではないと思っています。だから自分の仕事を自分で理論づけできないけれど、職人として発見できたものは本物であると思っています。運慶が仏像を彫るときに、なかから仏像が出てくるんだという表現がありますが、僕の場合も向こうから出てきたもので、人の手で作り上げたものではないのだという自負はありますね。陳光興さん（清華大学）や孫歌さんなど中国や台湾の知識人の一部は、そのあたりを分かってくれるのではないかな、と思っています。」（平野健一郎等編『インタビュー—戦後日本の中国研究』平凡社 2011年 110頁）

2012年8月7日に筆者は孫歌氏を訪ねインタビューした。その時、氏は今日の溝口に関する研究について、それらは枝葉末節にこだわっており未だ深い理解には至っていないと述べた。氏の書いた論文や著書からは、溝口の思想をより広く認識させようという傾向が読み取れる。今回のインタビューを通して、氏は溝口の単純な理解者ではなく、その不足も認識する上で溝口の思想の建設的な部分を掘り出そうとしていることが分かった。

溝口と孫歌と陳光興三人はともに雑誌『台湾社会研究』季刊（*A Radical Quarterly in Social Studies*）の責任者である。溝口雄三は名誉顧問であって、孫歌は編集委員を担当し、陳光興は顧問を担当している。

識をも行うという動きがあります。後者のほうがより重要であると思います。ところが、中国を理解することと自己認識を照らし合わせ、自己主体に反映してくる問題は、実は中国では本来必要であるべき関心が寄せられていません。つまり、中国大陸の知識界による先生に対する理解は、先生の日本に対する関心を意識しないために、先生の自己反省に向かう動きが切り捨てられています。(中略)大陸は自分の都合で先生の中国研究を理解します。これに対して先生はどう思いますか。²¹

溝口 (答)：私は今まで孤立してきましたので、それは気にしていません。中国大陸におけるその現象は二重の誤解です。私が行う中国研究は、日本の知の状況および思想状況に対する批判と再建とは関係がないと日本人は考えます。では、中国人はどうであるかという、おそらく私の研究は比較的に親中国的であると見なされているかもしれませんが、少なくとも日本の思想の再建とは関係がないと思われています。その背後には学問研究の制約という問題があります。私の考察ではその制約はとても深刻であると思います。²²

²¹ 原文：〔溝口先生在中國大陸其實受到很多的尊重，有一種心情是認為溝口先生同情中國、熱愛中國。可是溝口先生有一個重要的動力是在於：他不只在理解中國，其實也是在透過中國重新展開對自我的理解。但溝口先生對照、回饋到本身主體的問題，其實在中國沒有得到應有的關切。那也就是說，中國大陸知識界對於溝口先生的理解離開了溝口先生對於日本的關切，自省的動力於是被切斷了。(中略)大陸為自身需求理解溝口先生的中國研究。(中略)溝口先生怎麼看待這個問題。〕

「面對歷史的敬畏之念—溝口雄三教授東京訪談」陳光興・孫歌・劉雅芳篇『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台灣社会研究雜誌社 2010年 173—174頁。

²²原文：〔我一直是孤立的，所以我並不在乎。是因為這個現象是一種雙重的誤解。日本人認為我就是在做中國研究，我的研究跟對日本的知識狀況、思想狀況的批判或重建，是沒有關係的；那麼中國人也許認為，我的研究就是比較親中國的，至少中國人也不認為這個跟日本的思想建構有什麼關係。這後邊有一個學科的制約功能，我們已經可以觀察到，這個制約力非常強大。〕

同上注。

親中国的といった一般的理解が一種の誤解であることを溝口ははっきりと述べている。その上で、そうした誤解をもたらす原因として、学問研究の制約という問題を取り上げている。同対談において、溝口はもう一つの批判対象を取り上げて自らの研究を位置づける。

実は、私の研究方式は中国を臆し、中国のために弁護するものになるのではないかと多くの人が憂慮します。しかし実はそれは私の真の意図ではありません。日本人のそのような偏見（日本人によって作られた一種の図式—近代中国は後れて、後進的であり、日本は優れて先進的である—を指す—筆者による）を許せません。特にその偏見がまぼろしのうえに成立するからです。その偏見は日本社会にとって非常に不幸である。その偏見と真正面から向き合うのが私の仕事であり、決して中国人のためでも、ひいては中国を理想化することでもありません。²³

「学問研究の制約という問題」と「日本人の偏見」はまったく関連しないように見えるが、実はその根柢には共通点がある。それは、他者を考慮しない自己中心意識への批判である。その批判は、日本だけでなく、中国に対しても行なわれている。例えば、1993年に『西日本新聞』に連載した「東往西来」において、「多くの中国人が、漢字文化を自国の文化と思い、だから漢字文化圏内の日本に対し、自国文化の従属者のように無意識に優越感をもって対していることに気づいていない」²⁴と述べて、中

²³原文：「其實呢，關於我的這樣一種研究方式，很多人很憂慮，覺得我好像是在替中國說話，是在替中國辯護，但事實上我真正的用意不是這個，我是覺得日本人的這一種偏見（由日本人設計的一個中國的近代是落後的、是後進的，日本是比他們優越、要先進的圖式—筆者注），是我沒有辦法忍受的。尤其這種偏見是建立在假象之上，這樣一種偏見對日本社會來說，是非常不幸的。所以我真正要做的工作、真正面對的那個對象是日本人的偏見，而不是中國人，更不是中國的理想化。」

「面對歷史的敬畏之念—溝口雄三教授東京訪談」陳光興・孫歌・劉雅芳篇『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社 2010年 166頁。

²⁴溝口雄三「東往西来」伊東貴之編『溝口雄三 中国思想のエッセンスⅡ 東西往来』

国の中華意識を批判する。1997 年に書かれた「日中・知の共同体」活動の第 1 回目の活動を終えて『日中・知の共同体』のこれまでとこれから」の中では、中国人の研究者たちの接触で感じた中国知識人における中華文明圏の中心意識を批判する。

中国人は、ヨーロッパ文化とは余りに異質な伝統文化を、あまりに長い時間をかけて積層してきたため、ヨーロッパ文化を摂取するに際しては、非常に激しい摩擦を生じ、彼らは彼らの自己意識においては、その摂取のための運命をかけた。その結果、彼らがこの対抗を西方対東方の図式で描く時、東方文化とは自己がこだわる中国文化のことで、そこに日本や朝鮮の文化を含む余裕はない。²⁵

溝口は他者を意識しない自己中心意識を批判する。そうした彼の批判の力点は一般的には理解されず、独自性や内発性といった表面的言説にのみ注目が集まった。本論文では上述した溝口自身の述懐を念頭に入れながら、中国賛美者としての溝口といった皮相な読解とは距離を置きながら考察を進めていきたい。

3-2 構図を乗り越えようとする試み

本論文は、認識の枠組みを規定する既存の構図を乗り越えようとする溝口の試みを突破口にして、彼の方法を考察する。その構図とは二項対立を含むさまざまな図式を指す。溝口は西洋の近代を基準とした優劣価値観を批判するために、図式に関する分析を有力な手段とした。

氏によればその優劣価値観とは、以下の二つのことを指す。一つは、西洋近代化のスタートの時間的な早さを優劣判断の軸とした日本の対中国優越感、すなわち先進国日本対後進国中国といった構図である。もう一つは、両国の近代化過程の構造的な差異を優劣の差異とする見方、すなわち、近代化の構造的な差異を民族の優劣に置き換

岩波書店 2011 年 124 頁。初出：『西日本新聞』連載 1993 年 5 月 15 日—7 月 14 日。

²⁵溝口雄三『日中・知の共同体』のこれまでとこれから『東方』213 1998 年 3 頁。

えて中国の歴史を蔑視することである。この優越感と蔑視は、言葉遣いに現れる一目瞭然で表面的な現象より以上に、日本人の思惟方式や認識の中に深く浸透しているとされる。

構図を乗り越えようとする試みを主に二つの面から見ていきたい。一つは、中国をめぐるさまざまな図式的な認識に対する批判という面に着目する。もう一つは、戦争の感情と記憶を通して、溝口が「先進国日本—後進国中国」といった対立構造を如何に乗り越えようとしたのかという面から考察する。戦争の感情記憶をめぐる分析は、溝口のこれまで行なってきた探求の延長線上にあるということを示して、後期の活動を位置づける。そうした連続性は、先行研究においてまだ指摘されていないので、本論文はその不足を補うことができよう。そうした過程を通じて、歴史認識における新たな可能性を開こうとする溝口の試みを示す。日中両国における優劣価値観を伴う歴史認識に対する溝口の批判的な立場を軸として、「癒し」という視点を導入し、新たな可能性の探究に向けての分析を展開する。

4 本論文の目的と構成

上述した内容に基づき、本論文は新たな歴史認識を理論的に獲得していくプロセスを考察する第一部と、それを実際に適用しながら検証していく第二部との二部構成になっている。

第一部「孤立の中で推進する「方法」」では三章を設け、主体意識の欠如に関わる溝口の批判について検討する。第一章では、1970年代の日本の大学の外国語教育の問題点に関する溝口の思考を同時代の安藤彦太郎と六角恒廣の中国語教育に関する見解と比較して、前者の特徴を捉える。第二章では、尾上兼英の『魯迅私論』に対する評価から溝口の尖鋭的な批判態度を確認する。第三章では、P・A・コーエンの『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』と溝口の学説との影響関係を分析する。

第二部「現在と向き合う思想的営為—「日中・知の共同体」を通じて—」では三章を設け、第一部で強調される主体意識が「日中・知の共同体」活動において如何に適用されたかを考察する。また、「日中・知の共同体」の開催と深く関係する一環として、溝口の竹内好に対する態度の変化についても検討する。具体的には、第四章で、「日中・

知の共同体」の主催者である溝口と孫歌の発言、論説を手がかりに考察する。第五章では、感情記憶によって引き起こされた論争をめぐって検討する。また、溝口と孫歌の感情記憶分析がどのように受容されているのかにも触れる。第六章では、戦争の感情と記憶をめぐる孫歌と代田智明の分析を比較し、代田が提示する新たな展開を位置づける。

本論文の意義として、主に以下の二点が指摘できよう。

第一に、溝口の「方法」の積極的な機能を発掘し、その「方法」が呈示しようと試みたビジョンをより明確にすることで、従来の研究において看過されているところを補足できよう。溝口による主張、特に中国独自の近代化過程や中国の原理といった語句は、多くの人に親中国派の発言と単純化して理解されたり、アジア主義的な偏向があるという批判を浴びたりした。本論文はそうした位置づけを安易に受け入れることなく、考察を深めていきたい。それによって、親中国といったイメージが皮相な溝口像であるということを認識するのに貢献できよう。

第二に、「日中・知の共同体」における溝口の思想的営為は単なる中国思想史を研究するといったことに限るのではなく、より広い学問のあり方にまで及ぶものである。本論文はその経緯をたどり、後期の活動はこれまでの探求とは通底し、その延長線上にあるものであることを明らかにする。

第 I 部 孤立の中で推進する「方法」

1987年に溝口は「方法としての中国」(『UP』171 1987年 東京大学出版会)という題の短い論文を書いた。後に『方法としての中国』(東京大学出版会 1989年)に収録される。「方法としての中国」を書名にしたことから、それが溝口の最も重要視する部分であると推測できよう。

「方法としての中国」において、「自由な中国学」を確立する必要があると溝口は主張する。彼によれば、「自由な中国学」とは中国を方法とする中国学であり、「目的を中国や自己の内におかない、つまり目的が中国や自己の内に解消されない、逆に目的が中国を超えた中国学である」¹。また、「自由な中国学」と対立するものを取り上げる。それは「中国なき中国学」であり、「中国抜きでの中国読み」、日中間の「文化混淆現象」である。「自由な中国学」の確立こそが「中国なき中国学にとっての十二分の批判たりうると思われる」²と述べている。彼は戦後日本の中国学を批判し、その思想的再建を試みる。それについて以下のように述べ、再建の方向性を示唆する。

中国を方法とするということは、世界を目的とするということである。思えば、これまでの一中国なき中国学はもはや論外として一中国「目的」な中国学は、世界を方法として中国を見ようというものであった。世界に向けて復権するために、世界を目指し、世界を基準にしてその到達度(あるいは相違度)が斟酌される。つまり中国は世界を基準に計られ、このためその世界は基準として観念された「世界」、既定の方法としての「世界」でしかなかった。例えばそれは「世界」史的普遍法則などだが、このような「世界」はつまるところヨーロッパであり、だから中国革命の「世界」史的独自性も、結局マルクス型の「世界」に取り込まれることにしかなかった。世界が中国にとって方法であったのは、世界がヨーロッパでしかなかったということで、逆に言えば、だから世界は中国にとって方法たりえた。

¹溝口雄三「方法としての中国」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 136頁。

²同上。

中国を方法とする世界は、そのような世界であってはならない。

中国を方法とする世界とは、中国を構成要素の一つとする、言い換えればヨーロッパをもその構成要素の一つとした多元的な世界である。³

引用が少々長くなったが、「中国を方法として、世界を目的とする」というのは、「中国を目的とし、世界を方法とする」ことに対して言われるものである。「方法」とは、多元的な世界に向かうためのルートの意味で使用されていることが分かる。多元的な世界とは、ヨーロッパを相対化する一例えば欧米の近代化過程を唯一の近代化のパターンという考え方を相対化する一という意味である。溝口は欧米の近代化過程を唯一の基準とすることに反対するが、近代化そのものを拒否するわけでもないし、また、欧米にとって代わって中国の独自の近代化過程を絶対化しようとするということでもないとをまず断っておきたい。

明清思想史研究に基づき、その延長として行なわれる中国近代史の見直しは 1980 年から展開される。その時、溝口の革新的意識は非常に強かった。それゆえ、「方法」は過激な形で推進されたと考えられる。第 I 部では、三章を設けてそうした過程を確認したい。

第 1 章では、1970 年代の中国語教育に関する議論を通じて、溝口が提起した主体的意思の欠如といった問題を手がかりにして、その革新的意識の方向性を明らかにする。

第 2 章では、中国近代史の見直しを開始する段階における強い革新的意識によって、竹内好的な読解に対する溝口の批判が激しく且つ明快な形で行なわれたことを確認する。

1984 年にアメリカ中国研究者 P・A・コーエンの *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past* (Columbia University Press, 1984) が出版される。その著書が 4 年後の 1988 年に佐藤慎一によって日本語に翻訳された。中国自身に即して理解することの重要性を強調するコーエンと溝口の主張は、相似するアプローチとして考えられる。第 3 章では、コーエンと溝口を比較して、1980 年代における溝口の主張—中国自身の発展脈絡に即して歴史を理解—の位置づけを検討

³溝口雄三「方法としての中国」『方法としての中国』東京大学出版会 1989 年 137—138 頁。

する。

検討の結果分かるのは、溝口の主張が新たな中国近代史の見直しをはかるという文脈で研究者たちからとらえられるものの、その「方法」の独自性が認識されることはないということである。1978年に出版されたエドワード・サイードの *Orientalism* の影響も背景にあって、コーエンの“China-Centered”アプローチは西洋中心的な知に対する批判と位置づけられる。溝口の主張は、単純に西洋中心主義批判のほうに分けられ、コーエンと同じ性質のもののように捉えられた。中国の独自性の主張イコール西洋中心主義批判といった単純な図式によって、西洋中心主義批判とも微妙な差異がある溝口の批判意識は見落とされることとなった。コーエンの前提が西洋中心主義批判であるとすれば、溝口の前提は日本の中国にたいする優越感批判である。つまり、欧米近代化を開始した時間的な早さを優劣の軸とした日本の中国にたいする優越感であり、日中両国の近代化過程の構造的な差異を優劣の差異として解釈する見方との戦いである。そのような歴史認識に捕らえられて、主体意識が乗り越えられない状態に陥っている状況を改善しようとする溝口の試みが取り上げられることはなかった。この意味で溝口の「方法」は結局研究者たちから共有されることはなかったと言える。

第1章 日本の中国学と溝口雄三の改革

この章では、溝口の日本の中国学学科建設における改革および1970年代の批判意識について論じる。中国学学科建設については、まず日本の中国学の歴史に触れて、その問題点を示す。具体的には、東大中国学の学科建設において行なわれた改革をたどって考察する。批判意識については、溝口の早期の外国語教育のあり方に関する思考を安藤彦太郎と六角恒廣の見解と比較して考察する。

1 日本の中国学学科について

日中両国間の文化交流の歴史は長く、昔から関係が深いだけに、逆に他者としてとらえるだけの距離がとりにくいということがある。他者として認めるしっかりとした意識がなければ、自己を問い直す健全な主体性意識の形成は不可能となる。

中国学とは文字通り中国に関する学問の総称である。とくに中国以外に住む中国人以外の研究者による中国に関する学術研究をさす。日本では中国学のほかに漢学と支那学というものが存在し、また複雑な関連を持っている。それらの概念を混同しないようにまず日本の中国学について触れてみたい。

日本における中国哲学思想研究は、伝統的な漢学と深い関連を持っている。漢学は日本で長い伝統を持っているが、中国を研究する学問ではない。それは、中国語の知識なくして中国の古典的な作品を理解し、論じていくという、ある意味で転倒した学問である。言語の知識なくして文化を理解するという不思議な状況で成立した学問であり、その存在のために、外国語として中国語を学ぶ機会が遅れていった。

外国学としての中国研究の成立は、明治時代に入って近代学術体制の導入がきっかけとなる。近代アカデミズム体制の推進を経て、外国学としての中国研究は歴史学そして文学と多様な方向に分化していくが、哲学は最後に残る。ヨーロッパのシノロジーの影響を受けて、徐々に漢学的なものが薄れていくが、全く消えるわけではない。英語の Sinology は、中国語の「漢学」にあたるが、日本語の「漢学」の意味には相当しない。孫歌は「“漢学”的臨界点—日本漢学引発的思考」（『世界漢学』1998年第1期）において「西洋の Sinology は、中国語で“漢学”と訳すが、日本語では“漢

学”ではなく“支那学”と訳すしかない。言い換えれば日本における漢学は日本における中国学のことではない。多くの日本の大学では、前者は国文科あるいは漢文学科（学校によって異なる）に属し、後者は外国学の学科に属する」¹と述べて、漢学の特殊性を強調している。

1906年京都に「支那学会」が誕生し、漢学とは異なる外国学としての支那学が生まれる。その後14年を経て1920年9月に、青木正児（1887－1964）、内藤湖南（1866－1934）らによって雑誌『支那学』が発行されて、京都支那学派が形成される。狩野直喜（1868－1947）や桑原隲蔵（1871－1931）、そして中国の伝統思想に対して懐疑及び批判の態度をもつ批判主義学派の白鳥庫吉（1865－1942）や津田左右吉（1873－1961）などの学者の名も挙げられる。支那学派による中国研究は、時代の雰囲気に取り込まれ、中国を富国強兵の近代化に失敗した落伍者と軽視する姿勢を色濃くしていく。漢学に比べて、それらの中国研究は明確な研究対象及び問題意識、さらに系統的な科学的方法を持つようになる。ただ支那学といった新しい学科の第一世代の研究者たちは依然として漢学の伝統を継承していると指摘される。

洋学の教養と中国に関する知識を持ち、旧漢学と相違する近代科学的方法によって日本の“支那学”を創立した日本の最初の世代の支那学者、例えば狩野直喜、桑原隲蔵らは東京大学漢学科の早期の卒業生である。彼らはその頃既に漢学者ではないが、この特殊な教養により彼らとその弟子たちは後に続く若い世代の中国学研究者たちからは漢学の継承者であると見なされた。もちろんほとんどの日本の支那学者は漢学に対して改良する態度に終止し、徹底的に清算をしようとはしない。これは彼らが持つ漢学との血脈関係のためであり、中国学研究者とは異なる。²

¹原文：「西方的 Sinology 可以譯成中文的 “漢學” 一词，在日語裏卻只能譯成 “支那學”，不能譯成 “漢學”；換言之，日本的漢學不是日本的中國學，在日本許多大學裏，前者屬於國文科或國文漢文學科（這一點因學校而異），後者屬於外國學學科。」

孫歌「“漢学”的臨界点—日本漢学引發的思考」『世界漢学』1998年第1期 46頁。

²原文：「有著西學教養和中國知識、以區別於舊漢學的近代科學方法建立了日本“支那學”的第一代日本支那學家，如狩野直喜、桑原隲蔵等人，均是東京大學漢學科的早期

歴史的にみれば、日本における中国についてのアカデミックな研究というのは古典研究であった。歴史学も漢学的な要素を非常に強く持っていたが、日清戦争の前後にヨーロッパのシノロジーの影響を受けて、従来の漢学臭を薄くしていく³。だが、漢学の影響力は非常に大きく、新しく成立する学科が完全にその支配から脱却するのは容易ではない。

20 世紀 30 年代に入ると変化が起こる。1934 年に日本で最初に中国の現代文学を研究する「中国文学研究会」が竹内好や武田泰淳らにより東京に成立する。1935 年 3 月に機関誌『中国文学月報』が創刊される。1940 年 4 月の第 60 号より『中国文学』と誌名が変更される。1943 年に「中国文学研究会」が解散し、3 月に雑誌『中国文学』が廃刊する。「中国文学研究会」は 9 年間続き、雑誌は 8 年間刊行された。「中国文学研究会」は中国社会の現状に密着した新たな中国学の先駆けとなるといわれる。竹内好研究者の孫歌は「中国文学研究会」を、「日本の中国学は今世紀(20 世紀一筆者による)30 年代に生まれる。それは竹内好、武田泰淳等が中心となって組織した“中国文学研究会”の設立である。(中略)竹内好が中国学界に入る今世紀の 30 年代、日本の漢学はある程度日本の支那学に取って代われ、(中略)彼らは西洋のシノロジーと同じような近代学術を創造した」⁴と位置づけている。さらに、「中国文学研究会」の創立者の一人となる竹内好についてこのように捉えている。

畢業生。儘管他們已經算不上是漢學家了，但是這種特殊的教養途徑使他們及其弟子在後來年輕一代的中國學家眼里仍被視為漢學的傳人。當然，絕大多數日本支那學家對於漢學只取改良態度，從不進行徹底清算，這也是他們不同於中國學家的、與漢學的血脈聯繫。]

孫歌「“漢学”的臨界点—日本漢学引發的思考」『世界漢学』1998 年第 1 期 55 頁。

³安藤彦太郎「戦時期日本の中国研究について」『中国研究月報』52(9) 1998 年 34 頁。

⁴原文：[日本的中國學誕生於本世紀（20 世紀一筆者による）30 年代。它的標志是以竹内好、武田泰淳等人為中心所組織的“中國文學研究會”的出現。(中略)在竹内好進入中國學界的本世紀 30 年代，日本漢學已經在很大意義上為日本的支那學所取代，(中略)他們創造了與西方中國學同質的近代學術]。

彼(竹内好一筆者による)は日本の支那学のスコラ的で自閉性の傾向を指摘して批判し、(中略)新しい中国学の位置を日本文化の中で確定させた。それゆえ竹内好以後の日本の中国学、特に戦後の最初の世代の中国学は中国社会の現実に密接な関心を持つと同時に日本社会の現実的な問題にも介入することを特色としていた。⁵

日本における中国についてのアカデミックな研究は歴史が長いものの、中国社会の現実に目を向け、中国を客観的な研究対象として扱う中国学の成立は 20 世紀に入ってからのものであった。戦後になって、「中国研究所」(1946 年)や「アジア経済研究所」(1958 年)や「アジア政経学会」(1953 年)などの研究組織が続々と誕生し、研究の重点が古典文化としての中国から近現代中国に置かれ、政治や経済や外交等のさまざまな角度から行なわれるようになる。そして漢学は古典研究、中国学は近現代研究といった分断状況が生じる。溝口雄三は、前近代と近現代両方を視野に入れて、一貫した中国研究を試み、そうした分断を克服しようとする。そのために、自らの専門研究以外にさまざまな改革を行なう。

2 外国学としての中国学を明確化する実践

漢文の読解には必ずしも中国語の知識が必要とされるとは限らない。そうした事情が、日本において中国語は外国語であるという意識を稀薄にする原因の一つとなる。他者化のために必要な距離を取りにくい状況に対して、改革がなされていった。

孫歌「“漢学”的臨界点—日本漢学引發的思考」『世界漢学』1998 年第 1 期 56 頁。

⁵原文：「他(竹内好一筆者による)揭示和批判了日本支那學在經院的標牌下自我封閉的傾向，(中略)為新的中國學在日本文化結構中確定了位置。所以，竹內好以後的日本中國學，特別是戰後那一代人的中國學，一直以密切關心中國社會現實、同時介入日本社會現實問題為其特色。」

同注 4 60 頁。

2-1 制度上の改革としての学科建設

東大在職時代（1981年—1993年）、溝口は東大中国哲学文学会を改組し、東大中国学会—現在の呼称は中国社会文化学会—とした。機関誌は『中国—社会と文化』となる。東大中国哲学の沿革を見れば、哲学と文学両学科は統合したり分離したりして不断に再編されている。1877年、東京大学創立に際し設置された和漢文学科に始まり、和文学漢文学の分離、漢学科の独立、さらに漢学科のうちに史学専攻のコースを設け、次第に分化し専門化する。1904年に文科大学学科規程の改正により、漢学科は、支那哲学・支那史学・支那文学に三分される。中国哲学が中国文学などとともに一つの学科として成立したのは、ここに始まる。1932年におよんで一部の学科の統合をみた際、支那文学科と合併し、支那哲学支那文学と称する。戦後になると、また分離し、1948年に名称を「中国哲学」と改める。中国文学科と同一の研究室を構成していたが、1967年秋に至って分離し、各々別個の中国哲学、中国語学文学の研究室が成立する。⁶

溝口は中国哲学の狭い分野を拡げて、その他の様々な分野を含んだ総合研究を目指した。従来の哲学・文学系に加え、歴史学や社会科学、さらには自然科学の研究者にも広く入会を呼びかけた。その他に、中国哲学を大学院では東アジア思想文化専門分野、学部では中国思想文化学と改称することに力を注いだ。⁷これらの実践から溝口の革新的な姿勢が伺える。

漢学の伝統として、基本的に漢文訓読法で中国の古典典籍を読む。だが、それによって原文の意味と微妙な差異が生じることは免れない。こうしたことに溝口は満足できない。2007年に『朱子語類』⁸訳注刊行会は溝口が中心になって発足し、『朱子語類』の現代語訳に取り組みはじめた。彼が呼びかけた『朱子語類』訳注刊行委員会のメ

⁶東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 部局史 一』東京大学出版会 1986年 参照。

⁷小島毅「溝口雄三教授追悼文」『東方学』121巻 2011 東方学会、溝口雄三「中国思想における近代・前近代・近世」『中国哲学研究』第5号 1993年 参照。

⁸『朱子語類』は宋代、朱子とその門弟たちと交わした言葉をその没後に集成し門類に分類した書物である。全140巻。

ンバーにより、十数年単位で、『朱子語類』全 140 巻の現代語訳と注釈を目指して、『『朱子語類』訳注』が、汲古書院から続々と刊行中である⁹。

2-2 外国と外国語のあり方に関する思考—中国語教育をめぐって

溝口の外国研究には、その国の言語で研究が行われるべきだという意識が暗々裏に潜在していた。それは中国文学科に進学することからも伺える。

年譜によれば、溝口は 1956 年に東京大学文学部中国語文学科を卒業する。1950 年代の日本の中国語教育は非常に周辺的な位置にあるものであった。最初、溝口は外交官を目指して東京大学に入る。法学部進学コースであった。そのコースの大多数の学生がドイツ語クラスであった。法学部に入るためにドイツ語を勉強していた。当時法学部ではドイツ語とフランス語しかなかった。大学に入って、中国研究会と接触して、そこで中国問題に生にぶつかり、岩波書店から出ていた『日本資本主義講座』というシリーズで、アジア諸地域や中国での日本軍の残虐行為や抗日戦争の実態に触れ、自分がばらばらに解体されるような衝撃を受ける。そこで法学部をやめ、中国文学科に進学することにする。中国文学科の進学者は少なく、当時 13 人しかいなかった。溝口が中国文学科に進学したのは、特に中国文学研究を志したわけではなかった。文学より中国哲学あるいは歴史を希望していたが、当時は中国語を履修した学生というのは、中国語を生かそうとするかぎり中国文学科以外に進学できる学科はなかったのである。¹⁰

⁹現在、既刊分として、「卷一—三[理気・鬼神]（溝口雄三・小島毅監修/垣内景子・恩田裕正編、2007 年）、「卷十一—十三[学・読書法]（興膳宏・木津裕子・斉藤希史訳注、2009 年）、「卷七・十二—十三[小学・持守・力行]（溝口雄三・小島毅監修/垣内景子訳注、2010 年）第 1 期全 7 冊の 3 冊が上梓されている。全 50 冊出版する予定であるとされる。

¹⁰溝口雄三・陳光興・孫歌 專題訪問「面對歷史的敬畏之念—溝口雄三教授東京訪談」『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社 2010 年と、溝口雄三／聞き手：村田雄二郎・伊東貴之 インタビュー「主体への問い—「方法として

1970 年—1971 年にかけて、溝口は『中国の文化と社会』に「大学における中国語教育のあり方について一吾国の外国語教育の沿革と現況の中から一」という題で 4 篇の論文を連載¹¹し、その中で、大学における中国語の制度上の変化を通して、日本人の外国語意識および外国イメージを問いかけている。

1970 年という時点で溝口がこのような議論を展開する背景には「検定問題」があると考えられる。1968 年 7 月中国語の実力を試して、1 級から 4 級までを認定する検定試験が計画され、実施されようとしたとき、学生たちからの反対を招く。中国語検定協会が霞山会の後援を得て発足したということがその原因の一つである。霞山会の前身は東亜同文会である。東亜同文会は 1898 年—1946 年にかけて日本に存在した民間外交団体およびアジア主義の代表的な機関であることで知られている。東亜同文会の在外資産の権利を保持し、同会の精神を継承しようとする霞山会は厳しく批判され、「中国語検定問題連絡会議」という反対運動の組織ができ、いくつかの大学の学生からも反対声明がでる。試験当日、東京の会場付近に数十人の学生が集まり、受験生にビラを配り、検定の不当を訴える。その結果試験が中止される。大阪では試験を強行しようとしたため、会場で若干のもみ合いが起こり、けが人をだすまでに至る¹²という事件が起こった。また、試験日が 7 月 7 日、つまり盧溝橋事件の日であることも問題となったといわれる。最初は 4 月 4 日の日曜日に実施する予定であったが、3 ヶ月後の日曜日、7 月 7 日に延期することになったのは、意図的でなく偶然のことであったといわれる¹³。

安藤彦太郎（1917 年—2009 年）は『日本人の中国観』（勁草書房 1971 年）において、検定問題によって二つの問題—日本の帝国主義と漢文の影響—が提起されると指摘している。

の中国」をめぐって」平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜編『インタビュー—戦後日本の中国研究』平凡社 2011 年 参照。

¹¹⁴ 本目の最後に「続」と書いているが、その後は続篇が書かれることなく、連載は未完のままであった。

¹² 第 1 回の検定試験は、1968 年 7 月 7 日に東京と大阪で行われる予定であった。

¹³ 安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房 1971 年 参照。

軍国主義復活という新しい事態に即応して計画を立てたのが、戦前の「大陸進出」を戦後に「継承」する団体であったことは注目される。まさに換骨奪胎ともいうべく、その中国認識は戦前から連続している。ここでわれわれは霞山会をふくめて戦前の中国語教育の歴史を、厳しく問い直してみる必要があるだろう。だが、問題はそれだけにとどまらない。たまたま霞山会が躍り出たために、かえって本質が見やすかったのであって、もっと巧妙なかたちで中国語教育が再編される危険性は常に存在する。日本の反動勢力の一部さえ日中両国国交の「正常化」を叫び始めている現在、教育全般の再編成の企図とも絡んで、われわれはよほど厳しい監視の目をもたなければならない。

再編成される危険性を支える重要な要素に、たびたび述べてきた中国語学への特殊視がある。特殊視というよりも無関心あるいは軽視といったほうがよいかもしれない。（中略）極言すれば言葉にかんするかぎり、日中間は真の平等互惠になっていないのである。¹⁴

日本人のわれわれが中国語に無関心であったり軽視したりするのには、中国そのものを軽視するためだけではなくて、漢文の知識に安易によりかかるという面がある。むしろ中国文化に親しみを感じて、かえって外国語としての中国語を軽視してしまうのである。この、漢文との安易な類比は、中国語の理解をさまたげるだけでなく、しばしば中国そのものの理解をもさまたげる。¹⁵

安藤は戦後の中国語学をこれから建設していくためには、克服しなければならない問題を取りわけ重要視している。

六角恒廣¹⁶は 1970 年代に書いた論文の中において、戦後日本の中国語教育の建設が「戦前・戦中における中国語教育の果たした歴史的役割への批判、および戦後の中国

¹⁴同注 13 135－136 頁。

¹⁵同注 13 136 頁。

¹⁶1919 年一。1941 年早稲田大学政治経済学部卒業。専攻は中国語教育史である。著書として『近代日本の中国語教育』（淡路書房 1961 年）があげられる。

をいかなる視点から把握するか」¹⁷といった二つの側面から考えることになっている。現状をまず明らかにしたうえで、戦後の中国語教育は、戦前・戦中への反省を基礎とし、実用語から科学的文化語学を目指してきて、中国語教育ないし学習の意義付けが大きな問題として残されていることを指摘する。彼の中国語教育ないし学習の意義付けに関する議論は溝口と相似するところもあるし、また異なる点もある。

戦前・戦中への反省だけにとどまらない点において六角と溝口は相似する。六角は戦後日本における「中国語は外国語」¹⁸であるという意識の稀薄さを通じて、英・仏・独語の普遍・一般性に対して中国語の特殊・個別性を問題視する。

英・仏・独語についていうなら、それらは「何のためにそれを学習するのか」という問いは成立しない。それらの外国語を学習するのは、この近代社会においては当然のことである。つまり英・仏・独語には一般的な性格がある。だが、スペイン語・ロシア語・中国語には、英・仏・独語にみられるような一般性は存しない。それらは通商貿易という実用的側面があり、また特定の地域の研究であったり、社会主義という近代社会からみれば特殊な社会形態を探ろうとするためのものである。こうした外国語は、つまり特殊な性格のものであると言えよう。英・仏・独語を学習して、ある特定の国の諸事情を学び取るのではなく、先進近代諸国における学問や研究の諸成果を学習しようとするための外国語である。¹⁹

さらに六角は中国語の個別・特殊性について具体的に展開する。ここで中国近代文学研究と中国との関係に関する部分に取り上げられる。

¹⁷六角恒広「戦後の中国語教育」『早稻田商學』229 1972年 133頁。

¹⁸1954年10月に中国語学研究会第15回大会が開かれ、「中国語教育方法論」という題の共通討論会が行われた。その討論の中において「中国語は外国語である」という言葉は最も多く使用されたといわれる。括弧付きの「中国語は外国語である」はそれを指す。

¹⁹六角恒広「戦後の中国語教育」『早稻田商學』229 1972年 141頁。

中国の近代史は、封建制に反対し、列強資本主義の中国に対する植民地化（侵略）に抵抗し、反対する歴史である。したがって、中国の近代文学は、そうした社会の人間の苦悩を内容としたものである。同じく近代とはいえ、近代社会へ移行した資本主義社会の諸国の普遍・一般の文化の中で生活し、近代的思想や思考から、中国の近代文学を観察した場合、資本主義の植民地化に抵抗し、反対する文学は、特殊なものであり、中国の抵抗として個別に観察・研究せざるを得ない。ここに中国の近代文学の研究は、特殊・個別な文化の研究ということとなる。こうした中国の近代文学研究と結びつく中国語学研究ないし中国語教育は、特殊・個別な文化の研究のための外国語研究ないし教育ということとなる。²⁰

異質な社会形態や植民地化への抵抗などの前提をもつことは特殊・個別であると六角は捉える。溝口もこれと似た指摘をしている。

溝口は東京大学教養学部が中国語²¹を第 3 外国語から第 2 外国語へ昇格させたことを取り上げて、その問題点、つまり「「昇格」のもつ特殊なニュアンス」²²を捉えて批判する。

この「昇格」は又、中国語がドイツ語・フランス語などのヨーロッパ語と同格になるという側面を同時にもった。こういう捉え方には、日支親善の旗印の下に隠されていた日本の中国侵略という事実に対する政治的民族的反省が背景としてあるのだが、端的には日本の中国に対する植民地化政策の道具として用いられた戦前の支那語教育に対する深い反省という形で顕在化した。

²⁰同上。

²¹戦前、中国語は実用語として扱われ、学校教育と無縁であった。1946 年に第一高等学校（東京大学教養学部）にはじめて中国語が設置される。これで中国語は制度的にようやく表に出てくる。当時大半の大学が英・独・仏の 3 カ国語を外国語とするが、中・露の 2 ヶ国語を第二外国語とする大学は少なかった。その中で東京大学教養学部は中国語とロシア語を第二外国語とする。

²²溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について—吾国の外国語教育の沿革と現況の中から—（一）」『中国の文化と社会』3-8 1970 年 2 頁。

中国語についていえば、明治以後の日本の「脱亜」的近代化に対する反省、戦後のアジアに沸き起こった広汎な民族主義をアジアに地理的に位置する日本民族が思想的にどう咀嚼するかという問題、とりわけ中国革命以後はそれまでのヨーロッパ一元の価値基準もしくはその裏返しの八紘一宇的価値基準をどう自己変革するかという問題を抱え込んだアジア的知識人の新理念模索のプロセスとして、対処される側面を持っていた。²³

「戦前の支那語教育に対する深い反省」、「明治以後の日本の「脱亜」的近代化に対する反省」といった前提は溝口にとって不自然で特殊なものに思える。こうした「反省」がいかにも名目的で、これまでの立場を安易に逆転して、ヨーロッパ中心主義の批判が単純にアジア賛美に向かうような無自覚な方向転換を呼び起こしそのような危機感が溝口にはあった。安易な方向に流れるようにすると、自己への問いかけの欠如の姿勢を溝口は批判した。

上述した内容から、六角、溝口の両氏はある種の前提のもとになされようとする戦後の中国語教育のあり方に批判的であることが分かる。

次は両氏の相違点に触れたい。溝口は日本人の外国、外国語に対する主体意識の欠如を重要視する。一方、六角は、戦後の中国語が「特殊な個別な中国文化の学習のための中国語学学習ではなく、普遍的な一般的文化を受容するための第一義的中国語の学習となる」²⁴ことを望む。英・仏・独語と変わらなく、優劣の価値観が含まれない外国語として中国語を位置づけたい、昇格させたいという六角の意図が読み取れる。

溝口は中国語の昇格に疑問を抱く。東大教養学部の中国語の昇格を取り上げて、「何故第一、第二と区分されねばならず、又何故必須科目でなければならぬのか、一体何故中国語を、又何故外国語を大学生に教えなければならぬのか、何故それを教養課程で教えなければならぬのか、といういわば大学における外国語教育の存在理由そのものに向けての問いかけを忘却しがちである」²⁵と述べている。溝口は日本人の外国の概念・イメージを問うのである。具体的には以下のように述べている。

²³同注 22 2-3 頁。

²⁴六角恒広「中国語教育の現実と理念」『早稻田商學』237 1973 年 159 頁。

²⁵溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について—吾国の外国語教育の沿革と

日本にとって「外国」とは、否応なくヨーロッパであり、又帝国主義列強であった。それ以外に「外国」を選択する余地はなかった。

日本にとって「外国」は、英（米）独仏以外の国ではありえなかった。朝鮮や中国や蒙古はもとより、ポーランドもデンマークもオランダもスペインもポルトガルも、すべて「外国」ではありえなかった。なぜならそれは、この百年以来、日本にとって脅威的な帝国主義でありえなかったから。²⁶

「外国」は括弧を外し、本来意味する所の外国に回帰すべきである。²⁷

「外国語教育は最初からより優位なる文明・文化を導入するための手段として宿命づけられていて」、「日本側の主体的意思によるものではない」²⁸として、日本人のもつ受動的な外国イメージを問題視する。これは溝口が最も深刻な問題と考えるところである。こうした指摘を通して溝口が提示したいことは、特殊性をもたない外国イメージである。それについて溝口はこのように描いている。

ヨーロッパとアジアの二元的世界を場とし、ヨーロッパの価値観を世界史の価値観とする一元的世界観は、すでに早く破算し、米ソを二元的世界とする戦後の新たな力関係すら、今や過去のものとなりつつある。日本以外のすべての国が、独立の価値観をもった外国であり、原理的には全てが平等であるという前提こそが、外国の必須条件でなければならない。外国が英独仏露中の五カ国に限定され

現況の中から一（一）」『中国の文化と社会』3-8 1970年 5頁。

²⁶溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について一吾国の外国語教育の沿革と現況の中から一（三）」『中国の文化と社会』3-11 1971年 9頁。

²⁷溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について一吾国の外国語教育の沿革と現況の中から一（四）」『中国の文化と社会』3-12 1971年 6頁。

²⁸溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について一吾国の外国語教育の沿革と現況の中から一（二）」『中国の文化と社会』3-9・10 1970年 15頁。

ることも、ましてや英を第一とし他を第二とする根拠はどこにもない。というところから吾々は出発すべきである。²⁹

「原理的に平等」である外国のイメージを示して、西洋の侵入に迫られて近代化の歩みを始めざるを得なかった時期から既に百年余りも経つ 1970 年代に至ったのに、依然として西洋からの「脅威」による緊張感に振り回されてよいのか、そうした発想から解放されるべきではないのか、今日において最も性急にしなければならないことは発想の転換であると彼は発信する。この点において溝口は安藤や六角との違いをみせる。事実だけにとらわれるのではなく、そうした事実関係をささえる緊張した状況を問題とするのが溝口の独特な問題意識であると言える。

中国語教育を制度上改善しようと努める中国語関係者に対して、溝口は人々の抱く一般的な認識・考え方を変えることのほうを主張する。考え方の転換は、容易に実現できるものではないし、どのように転換するのか、具体的な説明が必要である。しかし、溝口の主張は、それに触れることがないゆえに、戦後の中国語教育の再建において即効的に役立つことは難しい。

学ぶ側の主体意識を強調する溝口の指摘は、戦後日本の中国語教育のあり方を多様化することに貢献するが、他の人の意見に比べて、彼の主張からは誤解が生じやすい。例えば、「アジア的知識人の新理念模索のプロセス」や「戦前の支那語教育に対する深い反省」などの前提をもつことに対する批判などに対しては、「反省は必要ではないと言うのか」と誤解を招く恐れがある。溝口と比較すれば、六角は比較的柔軟な態度を取っている。彼は戦前・戦中に対する反省を基本にする方針およびその果たした役割を認めたうえで、特殊と普遍の批判を展開する。そうした六角のやり方と比べれば、溝口は問題のより根源的な部分を考察していると言わざるを得ない。

戸川芳郎は溝口の中国語教育をめぐる 4 本の連載について言及している。

²⁹溝口雄三「大学における中国語教育のあり方について—吾国の外国語教育の沿革と現況の中から—（四）」『中国の文化と社会』3-12 1971 年 6 頁。

私はこのレポートを重視した。（中略）外国を意識することないし自己認識することができなかった没主體的な「主體」の惨めな再発見」を指摘し、溝口流近代批判が浮き彫りされた論文として、私は君を把握することにした。³⁰

しかしこれ以上の展開はなかった。管見の限り、戸川による言及以外は見当たらない。

溝口雄三はその改革を通して、どのような中国学を目指しているのか、その志向を推定することはできる。対象としての中国を曖昧な存在ではなく、他者として位置づけ、その哲学思想史を明確な構造をもったものとして構築する中で、その他者との葛藤を通じて自己を確立しようとしていると考えられる。そのために上述したような改革を敢行し、中国語教育の実務的な再建策に対して主体意識の欠如という根源的な問題を提起する。この問題意識は、1980年代に至ってさらに発展していき、注目する人々の数も徐々に多くなっていくのである。

³⁰戸川芳郎「溝口雄三君を悼む」『東方学』121巻 2011年 4頁。

第2章 対象の変化と批判的意識

—尾上兼英著『魯迅私論』を通して語る溝口雄三の竹内好像—

前章では、溝口の1970年代の批判意識について論じた。本章では、1980年代の批判意識に着目したい。

1976年に文化大革命が終焉を迎える。それによって、中国という対象を如何に取り組むのかについて、1980年代の中国研究に新たな課題が与えられた。この時期の溝口の批判意識はそうした背景と密接に関連する。本章では、溝口の尾上兼英『魯迅私論』に対する評価および竹内好の魯迅像に対する批判を比較対照し、溝口の批判意識を明らかにするとともに、その問題点も指摘する。

1 「タダの中国」に対する注目

1980年から1981年まで、溝口雄三は四回にわたって「中国の近代」をみる視点を雑誌『UP』に連載している。これをはじめとして、自らの中国研究方法をめぐる議論を展開しはじめる。その中で竹内好の魯迅観および近代中国観を一つの典型として取り上げ批判している。こうした批判を1980年代を通じて一貫して行っているが、1990年代の後半に入ると、議論の展開に変化が見られる。1980年代から始まる中国研究方法に関する議論を初期段階とすれば、この段階においては竹内好に対する反発が基調となる。そして1990年代後半に至ると、竹内好に対する批判がまったく消えるといった異なる展開を見せる。ここで検討するのは、その初期段階から転換をするまでの過渡期の議論とも言える。

従来の研究においては、溝口の竹内好に対する批判的継承が指摘されている。穂山新は「中国を語る作法と「近代」」において、「溝口雄三は竹内の課題を多元的な「近代」の理解枠組みの中で引き継ぎ、「中国における「近代過程」の内部に西洋的な「近代」を超えた普遍性をもった「近代」を見出そうとする溝口の姿勢は、実のところ竹内好とほとんど同じものであったと言える」¹と述べて、近代というテーマ

¹穂山新「中国を語る作法と「近代」」『社会学ジャーナル』32 2007年 88頁。

をめぐる竹内と溝口の共通性あるいは継承関係に注目している。また、曾倚萃は『溝口雄三的中國方法—超克亞洲的知識脈絡』において「竹内と溝口の知識体系は実は相似するところが多い」²と述べている。このように、溝口の知的営為は竹内に対する継承であることが指摘されている。

本章では、溝口の竹内好に対する批判のほうに注目する。1988年という時点において溝口が、最も有効的な批判方式を切望したことを明らかにする。有効的な批判方式を性急に求めたのは、当時大きな変化が起こった中国を観察する視点を早く確立したいと溝口が考えたからである。

溝口の1980年代の竹内好批判の根底には、中国という大きな対象に如何に取り組むかという問題があったからである。1976年に中国の文化大革命が終焉を迎えるに至って、それが大きな災難であったことが明らかとなるとともに、中国をみる視点の転換が必要とされるようになった。こうした背景の下で、中国に向き合う際に、当時の日本の観察者が無意識のうちにとってきた態度を溝口は問題にしたのである。

1988年8月に、溝口の「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」（『中国研究月報』486号）が発表されている。その中で、1988年6月に出版された佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』からの引用が紹介されている。引かれたのは、本文ではなく訳者あとがきの中の「タダの中国」という言葉であり、「タダ」は文中十回も表れ、一つのキーワードとして使われている。「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」における最初の部分は次の通りになっている。

中華人民共和国の成立以来の40年を区分してみると「(イ) 建国から文革開始1966年までの十数年、(ロ) 76年四人組逮捕までの文革の10年、(ハ) それ以後現在までの十余年、の三つに分けられそうである。この三つをかりに、(イ)「新」中国の時期、(ロ) 中国が「新」を脱いだ時期、(ハ) タダの中国となった時期、とよ

²原文：「竹内與溝口の知識體系實有許多高度相似之處」。

曾倚萃『溝口雄三的中國方法—超克亞洲的知識脈絡』國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心 2008年 111頁。

んでおこう。³

文化大革命が終わった後の中国を指す時期の区分として「タダの中国」を溝口は用いている。「タダの中国」という言い方は佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』のあとがきの中での用語であり、時期の区分を表すために使われている。

佐藤慎一⁴は、1988年にアメリカの中国研究者 P・A・コーエンの *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past* を翻訳して『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』という題で出版している。その訳者あとがきの最初のところで、佐藤は東北大学法学部に勤めていた時に、学生に竹内好をはじめさまざまな世代の中国論を読んだ上で「私たちの中国観」という題でレポートを書かせたことを語り、その中で特に印象に残ったものの一部を抜粋している。詳細は以下の通りである。

文革当時の日本人が中国に対して抱いていた思い入れを見ると、そういう共感を抱きうる対象があっただけ幸福な世代だったとも思うけれど、反面、まるで「信仰告白」を読まされるようなやりきれなさも感じる。「信仰」を共有しない人間には全く説得力を持たないという点では空しいし、「信仰」を異にする人の意見が全否定されるという点では空恐ろしい。

幸か不幸か、ぼくたちの世代にとっては、中国は「タダの中国」になってしまった。中国に熱狂的関心を抱くということなくなった反面、距離を置いて中国を見ることができるようになった。距離を置くということは、「この視点から、これだけの材料をもとに見れば、この程度のことはほぼ確実に言える」という、自分の中国観の妥当性の限界に対する自覚を生み出すことになる。ぼくたちの世代の中国観は、「中国観」というほどの大げさなものにはならないかもしれないが、そのかわり他人の中国観とは競争的に「平和共存」できるだろう。

³溝口雄三「『タダの魯迅』と『私』の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 33頁。

⁴1969年に東京大学法学部を卒業し、その後近代中国政治思想史を専攻する。1973年4月東北大学法学部比較政治学担当の助教授となる。

「タダの中国」になっても、中国と中国史はやはり面白い。いや、「タダの中国」
になってますます面白くなった。さまざまな権威が音を立てて崩壊し、けっきょく
のところ自分に納得のいく中国観をきづく責任と権利がぼくたち自身にあること
がハッキリしたからだ。その意味では、中国が「タダの中国」になったのは、ぼく
たちの世代の不幸というよりは、幸せのような気がする。⁵

佐藤がこの学生の「タダの中国」をわざわざ引用していることから、この言い方を重視していることが推測できる。原文の中で言われる「タダの中国」とは、文化大革命後の中国を指し、社会主義の中国が崩壊して変化が起こった後の中国を捉える、つまり時期を区分するキーワードとして使われていることは明らかである。また、「タダの中国」を研究する研究者として、熱狂的でなく「距離を置いて」、自らによって客観的に中国を見ることができるようになったことと、「タダの中国」になったという変化に伴う日本の中国研究方法の今後の行方についても言及している。具体的に言えば、西洋資本主義に対抗するといった特定の権威あるいは枠組みにとらわれるのではなく「自分に納得のいく中国観をきづく」ということが問題となるのである。

佐藤が、なぜ上述した内容を『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』のあとがきで取り上げているのかというと、社会主義の新中国から「タダの中国」になったというような変化に伴って、日本における近代中国研究方法も調整をしなければならないと考えたからである。そのことは、「従来の研究の批判的再検討と膨大な新史料とを踏まえた中国近代史研究が、アメリカのみならず、日本でも中国でも、同様に求められているわけである」⁶と述べている佐藤の言葉からも分かる。

こうした佐藤の動きに溝口は独特な形で応答する。佐藤の取り上げている「タダの中国」という語句をそのまま自らの論文「「タダの鲁迅」と「私」の対話—尾上兼英著『鲁迅私論』によせて—」の中で使用している。それを解釈するというよりは、自らのコンテクストにおいて自らの言葉として再利用したのである。このような形の応

⁵佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 訳者あとがき 283頁。

⁶同注5 290～291頁。

答は、『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』に対する他の書評⁷とは大きく異なっている。その関心は訳書全体にあるのではなく、訳者あとがきの「タダの中国」という言葉に集中する。溝口と佐藤の両名は、中国に起こった変化に緊張感を持ち、こうした動きに対応して日本における中国研究方法も変えなければならないという点において認識が一致している。これにとどまることなく、溝口は「タダの中国」を通して「タダの魯迅」を引き出し、自らの議論を展開していこうとする。

2 典型への反発およびその対立面の構築

溝口は尾上兼英の『魯迅私論』を通して「タダの中国」から「タダの魯迅」を引き出す。その目的は竹内好による魯迅解釈と対立させるためである。溝口が竹内好による魯迅像を批判するのは決してはじめてのことではない。しかし竹内好による魯迅像との対立を明確にするのは初めてである。それを通して「タダの中国」とどのように向き合うのか、ということを考える。本節では、溝口がどのような過程を通じて、その問題を追求したのかを考察する。

2-1 尾上兼英『魯迅私論』に対する溝口の注目点

⁷書評は具体的には以下のものがある。

- ①並木頼寿「『知の帝国主義』を読んで」『中国研究月報』485 1988年。
- ②張士陽「ポール・A・コーエン著/佐藤慎一訳『知の帝国主義』」『史學雑誌』97 1988年。
- ③井尻秀憲 書評「P. コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『国際問題』345 1988年。
- ④河田悌一 書評「『知の帝国主義』」『思想』6月号 1989年。
- ⑤今沢紀子 書評「P.A.コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『歴史学研究』595 1989年。

尾上兼英は、1949 年 4 月東京大学文学部中国文学科に入学し、1952 年に卒業する。卒業する 1952 年に魯迅研究会を設立した。この研究会発足については、次のような経緯がある。1952 年の 5 月 1 日のメーデー事件⁸においては、「墨で書かれたデマは、血で書かれた真実を覆えない」「血債は血を以って償わねばならない」という魯迅の言葉⁹がスローガンとして使われた。この使用に対して、尾上は魯迅が、どういう状況の中で言ったのか、考えてみる必要を感じ、安易な使用を批判した。「有名人のことばによって、事柄に対する判断の正しさが立証されたとする考え方、教養主義とでもいうのでしょうか、そういう読まれ方に直感的に反発を感じ」¹⁰で、魯迅を正確に読まなければならないと思って、1952 年に魯迅研究会を設立したとされる。後に溝口も魯迅研究会の一員となる。尾上と溝口については、年譜によれば、1968 年—1969 年の間ともに東京大学文学部助手を担当していた。また、『中国の革命と文学』全 13 巻の第一巻尾上兼英・丸山昇編『魯迅集』（平凡社 1971 年）において、溝口は「葉」、「トロツキイ派に答える手紙」、「徐懋庸^{シューマオヨン}に答えあわせて抗日統一戦線問題に関して」の三篇の翻訳を担当している。

尾上兼英の『魯迅私論』は、1950 年代から書いた論文を集めて 1988 年に汲古書院によって出版されている。初出情報の詳細は次の資料 1 のようである。

⁸血のメーデー事件は、1952 年 5 月 1 日に東京の皇居外苑で発生した、デモ隊と警察部隊とが衝突した騒乱事件である。事件は一部の左翼団体が暴力革命準備の実践の一環として行われたものと見られている。

⁹この言葉は、1926 年の 3 月 18 日に魯迅の教え子たちが素手で請願に行き、衛兵の発砲で死者 47 人、負傷者 150 余人にのぼる犠牲者を出した 3・18 事件の後に書かれたものである。

¹⁰尾上兼英 『魯迅私論』 汲古書院 1988 年 133 頁。

魯迅私論初出一覧

魯迅——人間の教師

「彷彿思想裏有鬼似的」から

魯迅の小説における知識人

古川哲史編『人間の教師 東洋篇』 一九五八年 大阪教育図書

『魯迅研究』第五号 一九五三年

『東京支那学報』第四号 一九五八年

魯迅とニーチェ

進化論とニーチェ

魯迅と文体

魯迅におけるニヒリズム

『日本中国学会報』十三 一九六一年

尾上・丸山編『現代中国文学選集』(一) 一九六三年 平凡社

中国語学研究会編『中国語学新辞典』一九六九年 光生館

(原題「魯迅作品」)

東京大学中国哲学研究室編『中国の思想家』下 一九六三年 勁草書房

(原題「魯迅」)

佐々木基一・竹内実編『魯迅と現代』一九六八年 勁草書房

野原四郎他編『講座近代アジア思想史』(一) 一九六〇年 弘文堂

(原題「文芸界の思想闘争」)

東京大学中国文学研究室編『近代中国の思想と文学』一九六七年 大安

『日本文学』一五卷二号 一九六二年

『中文学会報』第九号 一九六六年

「孤独者」私論

儒・道・墨と作家

魯迅の目にうつった日本人

最初の論文は、1953年に『魯迅研究』に掲載され、その後他の論文が続々と発表されている。管見の限りそれらをめぐる関連の議論は見当たらない。1988年に書籍として『魯迅私論』という題で出版されても、それに対する注目は、溝口雄三の「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—以外には見当たらない。尾上の魯迅論は、当時それほど広く注目されなかったことが垣間見える。しかし、

溝口にとって尾上の『魯迅私論』は特別な意味があった。溝口は「「新」中国の時期、すなわち魯迅が「新」においてこそ「魯迅」であった時期に、じつは氏は、すでに早く魯迅をタダの魯迅として、これに対していた」¹¹と述べ、尾上は先見性があると評価している。タダの魯迅という視点をもつ点によって、溝口は尾上を「氏はむしろ魯迅研究会の実を代表した人であったというべきであろう」¹²と評価しているのである。

溝口は『魯迅私論』全体の中から「魯迅の「個人主義」と「人道主義」」という一篇の中の次の部分を特に注目して取り上げている。

とにかく我々の生き方にかかわる作家であるという自覚が友人たちの間でも共通になって降りましたので、……スローガンとしてではなく、もっと深い所で自分の生き方とかかわるように読むという方法—それを「姿勢」ということばで表現し、そのための論争もありました。考えてみれば、竹内好氏の読み方と基本的には一致するのではないかと思うのですが、……（しかし）なま（傍点は原文のまま—筆者）の感動を大切にしようと思った我々の素人っぽさが、（「どこかに西洋の物差しではかろうとするとところがある」竹内好氏との）やはり分かれ目になっていると思います。¹³

魯迅を読むとき、「なまの感動」を大切にする尾上の姿勢に溝口は大いに賛同していることが分かる。だがこれよりもっと重要な一点がある。そうした姿勢が竹内好との分かれ目となるという点である。上述の尾上の言葉を引用してから、溝口はすぐ竹内好の魯迅観を取り上げて対比している。

もっとも素直に読んで読み取れるのは、それが個人の読者としてのことだ、ということである。魯迅に対する「素人っぽい」「なまの感動」が、この『私論』の根

¹¹溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 34頁。

¹²同上。

¹³同上。

底にたしかに流れている。竹内氏が魯迅について「旧」のなかの「新」¹⁴にもっぱらこだわり、日本の近現代の意識や主体にかかわらせたのと、ここがもっとも大きく「わかれ」るところである。¹⁵

「素人っぽい」と「なまの感動」がなぜ溝口に重要視されたかという点、それは「「旧」のなかからの「新」」あるいは「日本の近現代の意識や主体」と連動するなどのような言説とまったく異なるからである。ここにおいて、溝口によって尾上の魯迅私論対竹内の魯迅論という対立構図が成立するのである。

溝口が竹内好を批判するのは初めてではない。1980年の「「中国の近代」をみる視点」において既に竹内好を批判している。

わたくしたち戦中・戦後育ちの中国研究者のほとんどの研究起点に、中国への批判的視点というものはなかった。むしろ中国に批判的かつ蔑視的であり、そのためおのずと中国侵略に加担することにもなった戦前・戦中の例えば津田左右吉らの近代主義的中国観を否定的に批判もしくは排除するところこそが起点であった。その場合その有力なよりどころの一つが、竹内好氏の「魯迅」や「中国の近代と日本の近代」にみられる中国観であったろう。それは日本のいわゆる脱亜的な近代主義を自己批判し、その反面その対極に押しやられていた中国にかえってあるべきアジアの未来を憧憬したものであり、端的にいうならば私たちの中国研究の起点には基本的にこの憧憬がまずあった。この憧憬なるものは、さまざまの日本内的自己意識、

¹⁴旧と新について、竹内好は次のようなことを述べている。「魯迅のような人間が生まれてくるのは、激しい抵抗を条件にしなければ考えられない。(中略)あらゆる進歩への道が閉ざされ、新しくなる希望が砕かれたときに、あのような人格が固まるのだろう。古いものが新しくなるのではなく、古いものが古いままで新しい、というぎりぎりの存在条件を備えた人間が可能になるのだろう。」(竹内好「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりにして—」『日本とアジア』竹内好評論集第三巻 1966年 筑摩書房 39頁) 竹内好において旧と新が魯迅の性質を現すキーワードとなる。

¹⁵溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 34頁。

すなわち日本の近代百年にかかわるさまじみの反あるいは非日本意識の対極に、いわば反自己意識の投影として自己内に結ばれたそれに向けられたもので、だからそれはあらかじめ主観的なものであった。¹⁶

竹内好の中国観を「憧憬」とか「主観的なもの」「中国への批判的視点というものはない」と批判していることは上述した内容から分かる。しかし 1980 年のいわばイデオロギー的な批判とは異なり、1988 年に至って溝口は尾上の『魯迅私論』との比較を通して、竹内好の魯迅像との対立を確立しようとしていることは明らかであろう。ここにおいて批判すべき対象としての竹内による魯迅像、その解釈モデルが尾上との比較によって明らかとなってきた。その読解の枠組みは自然に存在するのではなく、比較を通じて作成されていく。尾上との比較を通じて溝口は自分が標的とする「敵」の姿を明らかにした。尾上の著書はその敵を乗り越えていく道を示すことになる訳である。

2-2 対立構図の確立

尾上の『魯迅私論』の中に「「孤独者」私論」という一篇がある。ここでの「私」は作品の中の主人公である「私」を指している¹⁷。つまり、魯迅の作品の主人公「私」

¹⁶溝口雄三「「中国の近代」をみる視点」『UP』96号 1980年 3頁。

¹⁷原文の中で「私」は次のように現れている。「視点に設定された「私」は、魏連殳に対してどういう位地を占めているか。最初は傍観者として登場するが、失業中に連殳の客間を訪れる一人となって接近する。深入りするのは、連殳が失業してからである。要路者から攻撃され、すべての人から敬遠されて失意のどん底にいる彼を、土産をもって訪れ、まるで寄り添うように苦悩を共感し慰め熱い同情を寄せるが、「私」には救い出す力はない。(中略)このように、戦い、傷つき、倒れた一人のインテリを作者魯迅はどう見ているか。早く目覚めて戦い、敗れて戦線から退き、あるいは墮落したインテリたちを、作者は「私」の目を通して批判している。自分の中にもある苦悩をすっかりさらけ出しかみ締めながら、正しい道を見つけ出そうと努力する誠実さを出発点として、連殳と「私」の目を通して現実を分析し、ささやかながらも前進の方向

に対する著者尾上の分析や見方が『魯迅私論』の「私論」の意味である。溝口もちろんこの意味で使うが、それ以外にもう一つ、著者尾上の「私」を引き出している。

『私論』の「私」は、読めば明らかなように、魯迅の作品にしばしば真の主人公として隠然また顕然と登場する「私」であり、要するに『私論』とは、その魯迅の「私」と尾上氏の「私」の「深い所」での対話でもある。¹⁸

溝口の重点は『魯迅私論』において、尾上がどれほど作品中の「私」と対話できているかにあるのではなく、尾上個人の私見としての「私」が解釈の過程の中で立ち上がってくるということにあることが伺えよう。溝口にとっては、こうした姿勢こそ魯迅研究の「実」とつながり、「タダの魯迅」という視点に立脚しているかどうかを判断する根拠となると言ってもよからう。

名を「新」なり「旧」なり「近代」「意識」「主体」なり「アジア」なり「解放」なり「革命」なり「ヨーロッパ」なり、とすれば（中略）それらの名を脱いでしまえば、実とはタダの魯迅すなわち文学者魯迅以外のなにものでもなかろうからである。¹⁹

溝口は、「名」と「実」の対立構図を作り、そして尾上「氏はむしろ魯迅研究会の実を代表した人であったというべきであろう」として、尾上を実のほうに分けている。なぜかといえば、『魯迅私論』には、溝口がもっとも批判する「名」つまり「「新」なり「旧」なり「近代」「意識」「主体」なり「アジア」なり「解放」なり「革命」なり「ヨーロッパ」なり」などの言説、つまり、戦後の研究者たちを縛ってきた、いわ

を見つめている。それは「人生の浮沈は定まりなく、失意の人といっても、永久に失意の人であるわけではない。」という確信の上に立っているからなのである。

尾上兼英『魯迅私論』汲古書院 1988年 258—260頁。

¹⁸溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 35頁。

¹⁹同注18 34頁。

ゆる「西洋の物差し」ではかるような概念がないからである。

溝口は尾上が『魯迅私論』で展開する「素人っぽい」と「なまの感動」という一人の読者としての私見の姿勢を肯定して、「実」のほうにふり分ける。根本的な基準とは、「新」や「旧」などの言説が入っているかどうかであることは分каろう。入っていれば「名」となり、入っていなければ「実」となる。言い換えれば、竹内好的な解釈による魯迅像のキーワードが入れば、それは「名」となり、「私」の姿勢ではなくなるという明快な構図を溝口は作ったのである。

ここまで述べてきたことから、尾上の『魯迅私論』が溝口に高く評価されている理由は、竹内好の魯迅観と関係する言説が入っていないからであり、竹内的世界観を支えるような概念が不在であることによるのは明らかであると思われる。ただ溝口のこの構図は、かなり明快ではあるが、簡略化されたものであると言えよう。実は、その構図に溝口の批判の特徴が秘められている。それについて、これから見ていきたい。

1949 年新中国の成立から文革開始の 1966 年までの十数年を「新」中国とし、文革の十年を中国が「新」を脱いだ時期とし、文革以後 1988 までの十余年を「タダの中国」と溝口は分けている²⁰。「タダの中国」になったという変化にどう対応していくのかを溝口は考えた。

1988 年という時点について考えてみれば、溝口の近代中国を見直す作業が始まって既に 8 年も経ち、その翌年に『方法としての中国』が出版される。方法論に関する思考は長年蓄積され、おそらく転換の意識が最も強い時期であると言えるかもしれない。中国をみる視点の転換という意識が、尾上『魯迅私論』に関する見解に深く浸透していると考えられる。

以下では、「タダの中国」と「新」中国、「タダの魯迅」と「魯迅」をめぐる言説をまとめて、溝口の批判の特徴を明らかにする。

「「タダの魯迅」との「私」の対話」において溝口は次のように述べている。

当時、日本のそれらの人々（「新」中国ひいてはアジアに関心を持つ人たちを指す一筆者による）は、中国やアジアの「新」、わけても中国の「新」に対して、外の政治面と内の主体・意識の面と、二つのかかわりをもって対していたが、魯迅

²⁰溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話―尾上兼英著『魯迅私論』によせて―」『中国研究月報』486 号 1988 年 33 頁。

の存在感は、そのうちとりわけ内の主体・意識にかかわるものであった。

この「新」は、それらの人々には、たんに社会主義中国の新生、国際秩序の再編、あるいは民族解放とそれの封じ込め、といった政治レベルのことにとどまらず、明治以後の日本の近代の歴史価値、ヨーロッパの文明価値、自己の価値観・アイデンティティにかかわることとして受止められていた。²¹

さらにこのように述べている。

中国が「新」を脱ぎ捨て、タダの発展途上国中国になったとき、「魯迅」も「タダの魯迅」になった。(中略)日本人の中国の近現代に対するかかわりの特殊性、中国の「旧」と「新」、あるいは「旧」から「新」へをみる眼の特殊性といったものがあつたと思われるが、相手がタダの魯迅であれば、それらのメンドウもいまや自然と消滅した。読者もタダの外国人の読者となった。暗黒とか掙扎とか虚妄とかは、当時の中国のことであって、いまの日本人読者の主体まして日本の近現代にかかわることではない。かかるとすれば、一人の作家に対する一人の読者としての個人の内面関係においてのことである。²²

上述した内容から、溝口が「タダの中国」、「タダの魯迅」と「新」中国、「魯迅」の間に境界線を引こうとする傾向が伺えよう。その分断の行為は「新」中国と「魯迅」をめぐる言説を通して展開する。

「新」中国と「魯迅」をめぐる言説をまとめれば、以下の通りである。「新」中国といえば、「内の主体・意識にかかわるもの」、「社会主義中国の新生」、「国際秩序の再編」、「民族解放とそれの封じ込め」、「明治以後の日本の近代の歴史価値」、「ヨーロッパの文明価値」、「自己の価値観・アイデンティティにかかわる」ものなどである。「魯迅」といえば、「暗黒」、「掙扎」、「虚妄」、「日本人の主体まして日本の近現代にかかわる」ことである。

²¹溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 33頁。

²²同注21 33—34頁。

ここにおいて、一種の図式が作られる。つまり、「新」中国イコール民族解放、内の主体・意識などのような図式である。それによって「タダの中国」と「新」中国とが、はっきりと区別される。「新」の時期と「タダ」の時期が明確に分けられるとともに、中国に対する認識も「新」と「タダ」で明確に分けられるべきであるという溝口の強い主張が読み取れよう。

2-3 問題点

そうした溝口の図式は「タダの中国」と「新」中国を明瞭に分けた時点において有効的のものであろう。しかし同時に単純化された図式でもある。例えば、「新」中国に関する言説については、竹内好の魯迅像および近代中国観がその根源にある。しかし、溝口の竹内批判は、竹内本人に向けられたものであるか、それとも、竹内的解釈を安易に繰り返してきた研究者たちに向けられたものであるか、その区別を明確にしないまま、行なわれているのではないだろうか。溝口のそれまでの竹内批判をたどりながら、検討するにしよう。

溝口は1963年6月から1966年5月まで四回にわたって、論文を『魯迅研究』に連載している²³。1960年代から溝口は、竹内好によって築き上げられた魯迅像に不満

²³1963年から1966年まで溝口は『魯迅研究』に連載している。取り上げた(2)以外に他の論文を以下で取り上げる。

- ①『『呐喊』一覚え書き(1)』『魯迅研究』31号 1963年6月。
 - ②『『一件小事』をめぐって—『呐喊』覚え書き(2)—』『魯迅研究』32号 1963年10月。
 - ③『『頭髮的故事』をめぐって—『呐喊』覚え書き(3)—』『魯迅研究』33号 1963年12月。
 - ④溝口雄三「魯迅における知識人と民衆—『呐喊』覚え書き(4)—』『魯迅研究』35号 1966年5月。
- 連載以外に「中国の魯迅研究と日本の魯迅研究」『魯迅研究』34号 1965年4月 という論文もある。

を持っていた。『一件小事』をめぐって—『呐喊』覚え書き（2）—」において「私が（中略）所謂魯迅読者のゆがんだ対魯迅観—絶望や暗黒という語を魯迅の形容詞のようにしたがる安易な感傷的魯迅観—に常に反感を覚えているからである」²⁴と述べている。魯迅といえば絶望や暗黒などを結びつける安易な図式に溝口は反発している。こうした図式が固定して継承されていくことにさらなる不満を感じる。「これはいわゆる「竹内魯迅」の悪しき影響の表れなのかもしれない」²⁵と考える溝口は、暗黒・絶望・悲観などのキーワードで彩られた魯迅像が林立する研究傾向の根源が、竹内好による魯迅像に帰結するとする。この時期の批判は、竹内好というよりは、そこから発して竹内好的解釈を押し進める研究者たちのほうに対して述べられていることが分かる。

1980年代になると、対象たる中国自体の変化に伴い、批判はより明確に、そうした竹内に端を発するこれまでの一元的な研究方向に向けられる²⁶。溝口は戦後日本の中国研究者たちに中国への批判的視点がなかったことを指摘し批判する。その代表として、竹内好の『魯迅』や「中国の近代と日本の近代—魯迅を手がかりにして—」を取り上げて批判している。竹内的な近代中国観を客観性が欠如し、主観的であると批判する²⁷。

1988年に至って「『タダの魯迅』と『私』の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」においては、その読解の過程の中で竹内による魯迅像をモデル化することを批判している。イデオロギー的な見取り図があって、それを作品に適用していくのではなく、むしろ作品を読む中で読み手の主体が立ち上がってくるようなプロセスを溝口

²⁴溝口雄三「『一件小事』をめぐって」『呐喊』覚え書き（2）『魯迅研究』32号 1963年 3頁。

²⁵同注24 4頁。

²⁶こうした溝口の批判に対して竹内からは応答がなかった。そのことの意味について深く論じることは、その重要性を認めながらも、当時の思想状況のより全般的な理解と丸山真男などをはじめとする他の思想家との関係なども考慮にいれる必要があり、本論文の主題から大きくずれていく恐れがあるために、あえて触れないこととし、今後の課題としたい。

²⁷溝口雄三「『中国の近代』をみる視点」『UP』96号—99号 1980年—1981年。

は、尾上の著作の中に読み込もうとしている。それは 1960 年代の批判を継承し、発展させたものである。

ただそうした竹内批判は、竹内本人に向けられたものというよりは、竹内の図式を安易に繰り返す研究者たちに向けられるべきものであることを確認しておこう。そこに溝口の批判に内在する問題点があると思われる。

尾上評価にしても、全体を捉えて理解しようとするよりは、主として自らの批判的な観点を支えるような方向から解釈をすすめていくようなところがある。尾上の「なまの感動」と「素人っぽさ」の姿勢で魯迅を読むことが竹内好との分かれ目になると溝口はみている。しかし、分かれ目だけではなく、竹内好の読み方と基本的には一致するところも多くある。実際、尾上は竹内の読み方と基本的には一致することを語っている。ところが、溝口がこの部分を強調することはない。そこには、ある種の戦略的読解がある。

3 まとめ

竹内好が切り開いた魯迅観および近代中国観が、時代の変化を無視して恒久的な図式として安易に継承されていくことを溝口は強く批判した。その批判が、対立構図を設定することで、批判すべき対象をより明快な形で提示することで行われていることを考察した。そこから、中国という対象が変化していく中で、それに伴って研究主体として過去の認識を改め、意識の変革の必要性を強調する溝口の方法論を確認した。

第3章 相容れない批判意識

—『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』と溝口雄三をめぐって—

中国思想史において「公」思想が前近代から近代まで継承された過程を通して、溝口は中国社会に変革をもたらす原動力を示そうとした。それを中国自身の独自性に即する考え方と称する。更に近代中国をそうした視点に立って考えるべきであると強調している。そうした指摘を通じて彼は、欧米近代化を早く実現したことに優越を感じることと、中国革命の成功に欧米近代化を超越する価値を求めることの二点を批判しようとしたが、そうした批判意識は受け入れられなかった。

本章では、その批判意識はなぜ受け入れられなかったのか、その原因を明らかにすることを目的とする。具体的には、二つの面から展開する。一つは、溝口が主張する中国の独自性が、生得性・原初性を重んじる文化本質主義と同じ性質のもののように思われ、中国の独自性イコール親中国的といった構図に回収されるという面から考察を試みる。もう一つは、コーエンの著作『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の出版との関連を手がかりに、西洋中心主義を批判する中国研究イコール親中国的研究といった構図によって、コーエンと同じ性質のもののように溝口の探求が見なされるという面に着目したい。それらによって溝口の強調する優劣価値観への批判が見落とされていることを検証する。

1 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』について

1-1 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の翻訳

近代中国政治思想史研究者佐藤慎一は、1979年から1981年までカリフォルニア大学バークレー校客員研究員として2年間アメリカに滞在した。そしてアメリカで体験した中国研究について1982年に「アメリカの中国研究」を書いている。その6年後

の 1988 年にアメリカの中国研究者 P・A・コーエン¹の *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past* を翻訳して『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』という題で出版している。これは中国語版の林同奇訳『在中国発見歴史』（1989 年 中華書局）よりも早い。佐藤は、アメリカの中国研究に触発されて、中国研究方法論の問題に目を向けるようになり、さらにコーエンの著書をいち早く訳すまでになったことを考えれば、アメリカの中国研究に大いに刺激されたことが分かる。

1980 年に溝口雄三は「＜中国の近代＞をみる視点」を発表し、戦後日本の中国研究方法を再検討しようとする。佐藤と溝口はどちらも方法論の転換に注目し、同じ志向を共有していることが分かる。しかし、全ての研究者はそうであるとは限らない。中国思想史研究者の河田悌一²はその一人である。河田は 1980 年にアメリカに渡り、1981 年に「アメリカの中国研究」を書いている。佐藤と同じ時期にアメリカに行って、また同じタイトルの論文を書いているが、二人の体験はかなり異なる。佐藤がアメリカの中国研究に対して高い評価を与えるのに対して、河田は「近現代中国の研究では、日本の研究にまさるとも劣らぬところにまできているのではないのでしょうか」³と言っている。さらに『知の帝国主義』に対する書評において「アメリカの中国研究が成長

¹1934 年生まれ。シカゴ大学を卒業し、1955 年にハーヴァード大学大学院に入学し、当時中国研究の中心的指導者となるフェアバンクやシュオルツのもとで中国史を専攻する。1961 年に 1860 年代のキリスト教布教に対する中国人の反応を分析した論文を執筆して博士号を授与される。著書には： *Between tradition and modernity: Wang T'ao and reform in late ch'ing china*, Harvard University Press ,1974 ; *Discovering History in china: American historical writing on the recent Chinese past* ,Columbia University Press,1984 ; *Fairbank Remembered* ,Harvard University Press,1992 ; *History in three keys: the boxers as event ,experience, and myth*, Columbia University Press,1997 などあげられる。以上取上げた著書のいずれも中国語に訳されている。日本語に訳されているのは『知の帝国主義』だけである。

²1945 年—。中国哲学研究者。著書『中国近代思想と現代—知的状況を考える』（研文出版 1987 年）等。

³河田悌一「アメリカの中国研究」『創文』9 月号 1981 年 15 頁。

し、成人に達した」⁴と述べていることから、河田は佐藤ほどアメリカの中国研究に共感せず、それを日本の中国研究に取り入れる必要性も感じていないことが分かる。ここから当時新方法の誕生を皆同じように感じているわけではないという背景が浮かび上がってくる。そうした背景の中で佐藤と溝口の共通点が浮き彫りになってくる。

1－2 日本語版の出版による反響

『知の帝国主義』において、コーエンはアメリカにおける従来の中国近代史研究方法を、「西洋の衝撃と中国の反応」アプローチ、「伝統と近代化」アプローチ、「帝国主義」アプローチの三つに分け、いずれも西洋中心的な見方に由来する歪みという深刻な問題があると指摘する。そして西洋中心的な歪みを最小限に減らして中国近代史を見直そうとする。その試みとして、コーエンは「中国自身に即する」アプローチ（China-centered approach）を主張する。

『知の帝国主義』の出版は、歴史研究者や思想史研究者たちの議論を引き起こした。まず書評は5篇もある⁵。書評は、主にコーエンの著書の内容および特色を紹介しながら、十分ではないところを指摘している。訳者による周到な注釈や解説を高く評価しているものもある。書評は著者と著作をめぐって書かれている。ほかに、コーエンの

⁴河田悌一「書評『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『思想』6月号 1989年 162頁。

⁵詳細は次のようである。

①並木頼寿「『知の帝国主義』を読んで」『中国研究月報』485 1988年。

②張士陽「ポール・A・コーエン著/佐藤慎一訳『知の帝国主義』」『史學雑誌』97 1988年。

③井尻秀憲 書評「P. コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『国際問題』345 1988年。

④河田悌一 書評「『知の帝国主義』」『思想』6月号 1989年。

⑤今沢紀子 書評「P.A. コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『歴史学研究』595 1989年。

説を溝口雄三の説とともに挙げて論じているものもある。佐藤一樹は「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」において、「従来の研究枠組みと新たな動きを詳細かつ明快にまとめた本書が刊行されたことは、日本での新たな枠組みに関する議論の活発化、問題点の発見のためにも非常に有意義であると考ええる」⁶と評価して、「コーエンと溝口が示す新たな研究枠組みをめぐる両氏の問題提起のおかげで、今日の近代中国研究、とりわけ思想史研究のもつ課題は、ある程度明らかにすることができたと考ええる」⁷と述べている。その他、並木頼寿の「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」（長崎暢子 山内昌之編『現代アジア論の名著』中央公論社 1992年）も挙げられる。

溝口も『知の帝国主義』に言及している。管見の限りその言及は二箇所である。一回は、「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」（『中国研究月報』486号 1988年8月）においてである。前章で検討したように、溝口は本文より訳者あとがきの中の「タダの中国」という言葉に注目して引用する。前章で述べたように、溝口は中華人民共和国の成立以来の40年を三つの段階に分ける。一つは建国から1966年文革開始までの十数年であり、それを「新」中国の時期とする。もう一つは、76年四人組逮捕までの文革の10年であり、それを「新」を脱いだ時期とする。三番目は、文革以後1980年末までの十余年であり、それをタダの中国となった時期とする⁸。

もう一回は、『方法としての中国』（東京大学出版会 1989年）に収録された「＜儒教ルネサンス＞に際して」においてである。

ちかごろ欧米における儒教の再評価が話題になる。このことの背景には、一つには東アジア世界とくに日本、韓国、台湾の急速な経済成長に対する欧米の側からの注目と、もう一つにはオリエンタリズム論争やコーエン『知の帝国主義』に

⁶佐藤一樹「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』47 1989年 67頁。

⁷同上 74頁。

⁸溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 33頁。

みられるヨーロッパの自己相対化—アジアへの優越意識に対する自己批判がある。

9

『知の帝国主義』に対する溝口の捉え方は明らかである。つまり、『知の帝国主義』をヨーロッパの自己相対化、言い換えればヨーロッパ中心主義に対する自己批判として捉えているが、それ以上触れることはなかった。彼の関心は欧米の儒教再評価の潮流に乗るアジアの儒教ルネサンスに警鐘を鳴らすことにある。

現時点でのわれわれの課題は、むしろ「ルネサンス」を外化し、欧米の自前性
に対抗できる自前性、すなわちわが国の資本主義のやみ雲な発展が持っている反
道徳性（例えば東南アジアの森林乱伐）などを、いかに正しく自己検討できるか
であろう。欧米追随の裏返し「儒教文化」自尊の「ルネサンス」などはこの際、
願い下げてもらいたいものである。¹⁰

欧米の儒教再評価の潮流に乗ることより、「欧米の自前性」、つまり自己反省によって
儒教の再評価に至るメカニズムを溝口は重要視する。『知の帝国主義』は彼にとってそ
のメカニズムを見抜くための手がかりである。ただ『知の帝国主義』に二回も言及し
ているものの、いずれの場合も本文の内容に触れることはなかった。

2 新たな研究方法論の呼びかけ

1976年に中国の文化大革命が終焉を迎えるに至って、それが大きな災難であった
ことが明らかとなり、文革を賛美した中国研究者たちは挫折を感じざるを得ない事態
となった。文革の挫折により、従来の中国認識を見直すことが迫られる。こうした背
景をもとに、日本の中国思想史研究分野において、1980年代から近現代中国を研究す

⁹溝口雄三「＜儒教ルネサンス＞に際して」『方法としての中国』 東京大学出版会
1989年 174頁。

¹⁰同注9 178頁。

る方法論に関する新たな検討が現れはじめる。本節では佐藤慎一と溝口雄三をめぐって検討したい。

1987年に佐藤は東京大学文学部に移って溝口と同僚となり、1987年から1993年まで、6年間共に東京大学文学部にいた。この間、1988年に佐藤訳の『知の帝国主義』が出版される。1989年に溝口の『方法としての中国』が出版される。このほかに、1993年から刊行される溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える』全7巻¹¹の第5巻『近代化像』に佐藤の「近代中国の体制構想」¹²が収録されている。

佐藤は『知の帝国主義』の訳者あとがきにおいて次のように述べている。

グローバルに見て、中国近代史研究は新たな段階にさしかかっている。第一に、中国近代史研究の主たる生産国は中国・アメリカ・日本だが、中国（と日本）の場合であれば文化大革命の挫折、アメリカの場合であればヴェトナム戦争の挫折と、いずれも従来の認識枠組みの根本的再検討を迫る体験をしたばかりである。第二に、文化大革命以後の中国で、洪水とも言えるような勢いでおびただしい史料の公刊がなされ、従来の枠組みでは説明できない新事実が次々に浮かび上がってきた。つまり、従来の研究の批判的再検討と膨大な新史料とを踏まえた中国近代史研究が、アメリカのみならず、日本でも中国でも、同様に求められているわけである。（中略）コーエンがアメリカの中国研究者に突き付けた問題は、決して他人事ではない。私たちはどのような前提にもとづいて中国研究を行ってきたのか、私たちの中国研究も「アウトサイダー」性の十分な自覚を欠いていたのではないか、今後の研究戦略は如何にあるべきか等、日本の中国研究に即して私たちがみずから考えなくてはならない問題は決して少なくないはずである。¹³

¹¹ 7巻それぞれは、①『交錯するアジア』②『地域システム』③『周縁からの歴史』④『社会と国家』⑤『近代化像』⑥『長期社会変動』⑦『世界像の形成』 東京大学出版会 1993年—1994年。

¹² 後に佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996年 所収。

¹³ 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』訳者あとがき 290—291頁。

文革後「タダの中国」になったという変化に触発されて、日本の近代中国を捉える視座の変化を痛感しながら、佐藤が『知の帝国主義』を訳したことは明らかである。『知の帝国主義』におけるコーエンによる 1970 年代のアメリカにおける新たな中国研究の潮流、つまり「中国自身に即する」アプローチ（China-centered approach）を通して、日本における近代中国研究方法の再検討の必要性を自覚させ、顕著化させようとしていると考えられる。

19 世紀後半より西洋モデルを採用する過程において生じる中国人の思想的変化について、佐藤が主張するのは、中国の知識人が単なる西洋模倣でも反発でもない態度をもって、西洋と向き合うことである。具体的にはこのように述べている。

中国が新たに何かを導入しようとする際、それと類似のものを中国の過去の歴史の中に再発見し、「真なるもの」と「自己なるもの」を一致させ、それによって導入を正当化することは、一八六〇年代に西洋の機械・技術の導入を開始した際にまず行われ、以降も様々な附会のバリエーションが展開されてきた。¹⁴

附会の論理を強調する背景には「近代中国の対外関係の歴史を全て帝国主義の侵略と中国人民の抵抗という図式で割り切る見方に対する反発が基底にあった」¹⁵と佐藤自身は述懐している。

附会の論理について、コーエンも言及している。『知の帝国主義』第一章「西洋の衝撃—中国の反応」にまつわる問題」において、附会論的発想として戊戌変法の前後の時期に流行した改革正当化論、つまり、西洋の学問の源流が実は中国にあるという主張が取り上げられている。具体的な例として、張之洞（1837—1909）が 1898 年に著した「中学為体、西学為用」（中国の学問を根本的な原則とし、西洋の学問を実際的な応用に役立てる）という一文による「体用論」が取り上げられている。¹⁶

¹⁴佐藤慎一「「文明」と「万国公法」—近代中国における国際法受容の一側面—」『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996 年 198 頁。初出：祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』創文社 1977 年。

¹⁵佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』あとがき 東京大学出版会 1996 年 359 頁。

¹⁶P・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988 年 63

こうした附会論的発想が果たした機能をコーエンは三つにまとめている。第一に、中国の文化的誇りを傷つけることなく、西洋に倣った変革を正当化することができた。第二に、中国人は人種としては決して西洋人より知的に劣っていないということを、中国人に対しあらためて保証した。そして第三に、ものごとの正当性の根拠を古代に求めるという、中国人の一般的な好みを満たすことができたのである。¹⁷

佐藤は万国公法の翻訳と刊行¹⁸の経緯を通して、西洋と向き合うに際して、中国人は単なる西洋模倣でも反発でもなく、自らの規則に従っていたことを強調する。附会の方法によって、万国公法と中国の経書や史書を対照し、万国公法のある箇条が春秋時代に実行されていたことが文献的に実証され、受容すべき西洋のものがすでに中国文明に備わっていたことが示されてはじめて、規範として中国人に受け入れられるようになった過程を佐藤は確認した。19世紀後半から20世紀初頭にかかる近代中国において、西洋モデルは中国文明を超える固有の価値をもつものとして自立するのではなく、当時の知識人は中国自身の論理つまり附会の論理をもって西洋モデルとの関係を処理していたと佐藤は指摘する。佐藤は附会の論理を通して「近代中国の対外関係の歴史を全て帝国主義の侵略と中国人民の抵抗という図式で割り切る見方」に異議を唱えたのである。

一方、溝口は「近代中国像の再検討」において最初から新しい方法論を模索する必要があると主張している。

中国研究は八〇年代以来、急角度の転回をとげつつある。中国の変化は、日中関係の変化という要因もちろん大きい、冷戦構造の溶融を因として果ともするアジアの政治・経済関係上の枠組みの変化、それらに依拠しての、進歩—保守、社会主義—資本主義、先進—後進という単純二元論の構図の崩壊という変化がも

—64 頁。

¹⁷P・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 64—65 頁。

¹⁸アメリカ人宣教師ウィリアム・マーティン（William Martin, 中国名・丁韪良, 1827—1916）が、ホイートン（1785—1848）の著作 *Elements of International Law* を中国語に訳して『万国公法』という題名のもとに 1864 年に刊行した。

う一つの大きい要因としてあげられる。歴史学が現在の中に未来を析出し、あるいは過去を現在の批判形として再生させることを一つの役割としているとすれば、六、七〇年代の方法論ではもはやその役割が果たせなくなっている、と多くの人が感じているということである。戦後以来の一歴史観・世界観の実践でもあるところの一方法論を再吟味し、現在のための方法論を模索、確立することが必要となっている。¹⁹

従来の方法論の再検討の実践として、溝口は中国近代史研究における段階論的構図—中国の近代過程は洋務—変法—革命といった段階論—to異議を唱える。洋務運動は日清戦争の敗北によって挫折し、代わって立憲君主制を企図した康有為・梁啓超らいわゆる変法派が台頭し、戊戌新政を試みるが、西太后のクーデターによってわずか百日で失敗する。結局、章炳麟や孫文らの革命派が満州王朝を倒すというのが中国近代化過程に関する通説である。溝口はそうした見方を「保守反動から進歩への段階論」²⁰と捉え強く批判する。その代わりに、地方の開発、開明化および充実—学校、水利、商務、農事、工業—といった社会経済史的考察を踏まえて、「洋務・変法とも足並みは完全にそろっていた」²¹と指摘する。また、辛亥革命において省紳層が果たした役割は見逃せないとされ²²、洋務—変法—革命の間の連続性を強調して、従来の保守から進歩へという構図を超えようとした。

佐藤と溝口は一致して方法論の転換を呼びかける。佐藤の附会論と溝口の地方の力を重視する視点は、いずれも革命究極認識に異議を唱えたものである。ただ佐藤はアメリカの中国研究に刺激されることが多いが、それに対して溝口はアメリカの中国研究にそれほど関心を寄せないという違いがある。

¹⁹溝口雄三「近代中国像の再検討」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 35頁。

²⁰溝口雄三「近代中国像は歪んでいないか—洋務と民権および中体西用と儒教—」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 200頁。

²¹同注 20 217頁。

²²同注 20 219頁。

3 『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけ

3-1 キーワード翻訳における選択

Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past の日本語版と中国語版を比べてみれば、本書の重点となる第4章“Toward a China-Centered History of China”におけるキーワードの翻訳が異なっていることが分かる。本節ではその相違を手がかりに、佐藤の翻訳における考慮について検討してみたい。

第4章のタイトルおよび節の見出しの翻訳において異なるところを取りあげて表を作ってみれば次のようになる。

	原文	中国語訳	日本語訳
第4章の タイトル	Toward a China-Centered History of China	走向以中国为中心的 中国史	中国研究の新たな潮流
第2節の 見出し	Centering Chinese History in China	把中国的中心放在中国	「中国自身に即した」ア プローチの誕生とその特 色
第3節の 見出し	The China-Centered Approach : Implications and Consequences	中国中心主義 : 其含意及後果	一八四〇年を超えて

佐藤訳日本語版は章のタイトルの翻訳において原文そのままの直訳より「新たな潮流」という点を強調していることは分かる。そして第二節のタイトルにおいて、新たな潮流となる“China-Centered”というキーワードを「中国自身に即した」と訳している。中国語版は原文そのままの「以中国为中心」（中国を中心という意味―筆者による）と直訳している。しかし日本語版はそうではない。この点について、佐藤は訳

者あとがきにおいて次のように述べている。

原文は **China-centered approach** である。直訳すれば「中国を中心に据えた」アプローチとでもなるのだろうが、西洋の基準を外在的に持ち込まず、あくまで対象に即して中国史を捉えようとする態度を指して、コーエンはこの言葉を用いるので、本書ではあえて「中国自身に即した」アプローチという訳語を用いる。²³

訳者は原文の意味を変えず、それを尊重したうえでこうした考慮をしたことが分かる。その訳は、1980年代中国自身の独自性に即して近代中国を見直そうとする溝口の主張と非常に相似している。

1980年から1981年にかけて、溝口は「「中国の近代」をみる視点」を雑誌『UP』に連載する。その中で「中国内視点」²⁴に立って、近代中国を客観的に捉えることを目指す。具体的には「公」思想の継承を取り上げて、前近代と近代の連続性を強調する。溝口によれば、清末の孫文の「三民主義」から毛沢東革命思想—「公」思想をプロレタリア的に発展させた—へと継承され、それは明末清初の時期の戴震（1723—1777）に淵源づけられるとされる。それに基づいて溝口はみずからの方法論を打ち出す。「中国の近代はほかならぬそれ自身の前近代をあらかじめ母胎としており、したがってそれは中国の前近代の歴史的独自性をみずからの内に継承するものである」²⁵。「今後わたくしたちがアジアの近代を考えるには、日本にせよ中国にせよ、それ自体の前近代に基づいたそれぞれの異ヨーロッパ的独自性に即して考える必要がある」²⁶。

“China-Centered” Approach の翻訳に際して佐藤は「中国を中心に据えた」より「中国自身に即した」を選んだ。その結果、「中国自身に即した」アプローチと溝口の「中国自身の独自性に即する」主張とは非常に接近する。その結果、コーエンと溝口は内発的变化を重要視する同志として連想されやすいようになる。

1988年に佐藤の訳書『知の帝国主義』が出版される前後のできごとをあげてみれば、

²³ P・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 224頁。

²⁴ 溝口雄三「「中国の近代」をみる視点（四）」『UP』99号 1981年 31頁。

²⁵ 溝口雄三「「中国の近代」をみる視点（二）」『UP』97号 1980年 10頁。

²⁶ 同注24 30頁。

二つのことがあげられる。1987年に佐藤は東大文学部に移って溝口と同僚になったこと、1989年に溝口の『方法としての中国』が出版されたことである。こうした背景を踏まえてみれば、佐藤の翻訳における選択は意図的ではないかと考えられる。そうした選択を通じて、溝口の「中国内視点」と相俟って、方法論の転換に関する議論の活性化を目指したのではないかと考えられる。

もう一つ指摘したいことは、『知の帝国主義』の翻訳出版が溝口の「中国内視点」の位置づけに変化をもたらしたのではないかということである。以下ではそれについて検討する。

3-2 『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけの変化

『知の帝国主義』と『方法としての中国』が相次いで出版されるにともなって、中国自身に即する視点が話題となる。そして1988年6月『知の帝国主義』の出版と前後して、中国研究者たちによる溝口の主張に対する態度には変化が見られる。反対から次第に評価へと向かっていくのである。そうした移行を1988年6月『知の帝国主義』の出版を境にして考察する。

『方法としての中国』は溝口の1980年代に書かれた12篇の論文を収録してできた書である²⁷。その中の8篇は1988年6月まで発表されている。その8篇の中で次の3

²⁷具体的には以下の12篇である。

①「「中国の近代」をみる視点」『UP』1980年～1981年。②「近代中国像は歪んでいないか」『歴史と社会』2号 1983年5月。③「ふたたび＜近代中国像＞をめぐって」『史潮』新19号 1986年7月（『方法としての中国』に再録するとき「近代中国像の再検討」と題名を変えている）。④「ある反「洋務」」『伊藤漱平退官記念論文集』1986年3月。⑤「天下と国家、生民と国民」『歴史学研究』553号 1986年4月。⑥「方法としての中国」『UP』1987年1月号。⑦「津田シナ学とこれからの中国学」『津田左右吉全集』（第二次）第18、19巻 1988年2-3月。⑧「いま儒教ルネサンスをどう考えるか」『空潭』1 1988年1月。⑨「儒教と近代および現代」『読売新聞』1988年10月。⑩「日本の宋明学研究と中国の宋明学研究」『空潭』2 1988

篇が議論されている。

- ①「「中国の近代」をみる視点」『UP』1980年～1981年
- ②「近代中国像は歪んでいないか」『歴史と社会』2号 1983年
- ③「ふたたび＜近代中国像＞をめぐって」『史潮』新19号 1986年7月

②「近代中国像は歪んでいないか」に対して、1985年に久保田文次は「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」を書いて、「洋務運動が「事実への無視と歪曲」「偏見」によって歪められてきたという溝口氏の基本的な論旨にはまったく承伏できない」²⁸と反論している。

①「「中国の近代」をみる視点」と③「ふたたび＜近代中国像＞をめぐって」について、杉山文彦は1988年3月に発表されている「近代中国像の『歪み』をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」において、「各文明はそれぞれ独自のものであって、その間に先進後進の関係は成り立たないとして、ヨーロッパの物差を軸として近代中国史を見ることを全面的に否定し、それにかえての「中国基体論」の提唱となると、その先には何やらかつてのアジア主義のようなものが見えてきて、強い異和感を持たざるを得ない」²⁹と批判している。

しかし『知の帝国主義』の出版後、溝口の方法論は否定的な評価だけではなく、コーエンと共に挙げられることで、積極的な意義が認められるようになる。

佐藤一樹は「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」において「コーエンと溝口が示す新たな研究枠組みをめぐる両氏の問題提起のおかげで、今日の近代中国研究、とりわけ思想史研究のもつ課題は、ある程度明らかにすることができたと考える。（中略）新たな研究の枠組みについてはまだまだ検討

年12月。⑪「儒教資本主義と儒教社会主義」『UP』1989年1月号。⑫「中国における「封建」と近代」『文明研究』7号 1989年3月。

²⁸久保田文次「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」『史潮』新16号 1985年 68頁。

²⁹杉山文彦「近代中国像の『歪み』をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」『文明研究』6号 1988年 14頁。

されるべき試案さえ出そろっておらず、今後の活発なる議論に期待せねばならない」³⁰と述べている。

そのほか、並木頼寿は「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」において、「コーエンの本書は、オリエンタリズムを批判して中国に即した歴史の発見を提唱した。その流れの中で、アヘン戦争以前、明清時代からの中国社会の内発的な変容の追跡に精力が注がれている。アヘン戦争による歴史の断絶を批判する立場からすれば、このような研究動向は当然あるべき姿かもしれない。しかし、そこに発見されるべき中国社会の独自の歴史的発展とはどのようなものなのであろうか。そしてさらに、中国社会の特質を精緻に解明することのなかから、いかなる普遍的視野が開かれるか、それが自国史、外国史を問わず、われわれの大きな課題ではなかろうか」³¹と述べている。この書評において溝口の『方法としての中国』は参考文献として取り上げられているが、直接言及されることはなかった。翌年の1993年に書かれた「日本における中国近代史研究の動向」（小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店）において、1980年代の思想史分野で中国近代史像の転換を敢行した人として溝口は取り上げられている。ただし並木は中国社会の独自の歴史的な発展という研究動向を警戒している。

『知の帝国主義』の出版は、溝口の「中国内視点」の革新性が受け入れられることに貢献したと言えよう。だが、それによって溝口の主張は、西洋中心主義批判と安易に見なされ、コーエンと同じ性質のもののように捉えられる。それによって、西洋中心主義と微妙な差異がある溝口の批判意識が見落とされることになったのである。

3-3 問題意識の違い

コーエンと比べれば、溝口が中国自身に即する視点を主張するのは、優劣価値観を

³⁰佐藤一樹「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』47 1989年 74頁。

³¹並木頼寿「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」長崎暢子 山内昌之編『現代アジア論の名著』中央公論社 1992年 35頁。

批判するためである。欧米近代化を早く実現したことに優越感をもつ考え方、および日中両国の近代化過程に存在する構造的な差異を優劣の差異とする見方との戦いである。そこから竹内好に対する批判が出てくる。「中国の近代」をみる視点」において溝口は、竹内好による抵抗の近代中国像および自己を保持する回心型という中国像をまず批判する。それは客観的な中国像ではなく、「自己否定的な憧憬構造」によるものであり、「徹頭徹尾日本的近代の反措定」となるとされる。つまり、「抵抗」や「回心」といった構造をヨーロッパ近代化の超克として優位にすることに溝口は反対する。同時に欧米の近代化を早く実現したことに優越感をもつ考えにも反対するのである。優劣価値観を批判するからこそ、自然態のもとで内部から発生する中国思想史の原動力をとりわけ重要視し、西洋からの衝撃を考慮に入れない。

思想史からみていえることは、十七世紀から二〇世紀にかけてこの三〇〇年の儒教的イデーつまり理は、存人欲的天理（王夫之）—コモンウェルスの仁（戴震）—公理・大同と章炳麟、譚嗣同、康有為、孫文らによって展開されるが、この間に公を内部から崩す形での私の主張は一切なく、しかも現実には革命思想は公理・大同の三民主義から共産党の人民民主主義まで、多数を公とし、少数を私とする公革命思想で一貫している³²と唱え、近代における中国革命を前近代の理観の歴史的発展の結果と見なしている。後にその公思想の流動的発展過程を思想的にいう中国の近代過程となると位置づける³³。西洋の衝撃は「日本と中国について言うかぎり、前近代以来の構造を破壊したり崩壊させたりするものではなく、たんにそれぞれの前近代の脱皮を促成した、ただしその力あまってやや変形をもたらした、という程度のものではあった」³⁴とされる。

それに対してコーエンの“China-centered” approach は、西洋の衝撃に対する中国の反応の複雑さを示そうとする。コーエンは自分自身を含めた多くの中国研究者を取り上げ、1970年代から台頭する新たな中国研究の潮流を“China-centered” approach と名づける。だが、実際に1970年代のアメリカの中国研究の傾向は、多岐にわたり、一つにまとまった方法論にはなっていない。コーエンはあえて一つの新た

³²溝口雄三「ふたたび〈近代中国像〉をめぐる」『史潮』新19号 1986年 25頁。

³³溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 58頁。

³⁴同注33 59頁。

な傾向としてまとめようとする。そして、その潮流の四つの特徴として、 ①内発的変化の重視 ②地域や地方の重視 ③基礎社会の重視 ④社会科学の影響 を抽出している。

19世紀の中国における改革、変法、革命をもっぱら西洋に対する反応ではなく中国内部から発生した問題として捉えようとする動きを、コーエンは内発的变化を重視する特徴としてあげている。コーエンは自分自身の王韜に関する研究を取り上げて説明する。「王韜は一八七〇年代・八〇年代における代表的な西洋通であり、かつ西洋流の改革の鼓吹者であったが、彼が社会問題や政治問題に対する批判的関心から改革論をはじめて唱えたのは六〇年代のことであった。つまり、彼の改革論は西洋に対する反応ではなく、太平天国の反乱に対する反応として開始されたのである」³⁵。他にスーザン・マン・ショーンズやフィリップ・クーンの研究も取り上げている。「洪亮吉（一七四六―一八〇九）が一七九三年に人口増加の影響について論じて、その時点で中国人が関心を持った問題は、当然のことながら徹頭徹尾中国国内の問題であった。その後西洋の脅威に対する海防の問題は、徐々に中国人の問題関心の一部を占めるようになったが、その程度はきわめて限られたものであった。十九世紀の前半に著作活動を展開した龔自珍（一七九二―一八四一）の場合は、西洋の脅威を意識し、それについての意見も述べているが、彼の主たる危機意識の対象は、中国人の政治的・社会的モラルの衰退現象にあった」³⁶。これだけでなく他にも取り上げられているが、これ以上は触れないこととする。

残りの三つの特徴―②地域や地方の重視 ③基礎社会の重視 ④社会科学の影響―について、コーエンは、地域的ないし地方的偏差を重視する研究を取り上げ、「沿海」と「内陸」、もしくは省レベルと県レベルに分けた研究を取り上げている。省レベルの研究テーマ、例えば「十九世紀中葉の広東省における社会秩序の混乱」、「清末の山東省におけるドイツ帝国主義」、「一九一一年から一九二七年に至る湖南省の農民革命」などが挙げられている。県レベルの研究として明代・清代の安徽省桐城県の地方エリ

³⁵ P・A・コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義―オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 229頁。

³⁶同注 35 228頁。

ートに関する研究を行ったヒラリー・ビーティーが挙げられている³⁷。その他に、清代の教育と民衆の読み書き能力に関するエヴェリン・サカキダ・ロウスキーなどの研究が取り上げられている。民間宗教と民衆反乱について研究するダニエル・オーバーマイヤーとスーザン・ネイクインなどの基礎社会を重視する研究が挙げられている。文化人類学のような社会科学の諸分野の手法を摂取して、エリートだけに限定するのではなく、庶民が生きる社会基層から問題を捉えようとする傾向をコーエンは重視している。

要するに、コーエンの“China-centered” approach は西洋衝撃による中国反応の複雑さを示そうとしたのである。コーエンと比べれば、溝口の関心は何よりも優劣価値観に囚われず中国史の自然態を探索することにあると言える。

4 まとめ

『知の帝国主義』においてコーエンが主張する「中国自身に即する」(China-Centered) アプローチは、1978 年に出版されたエドワード・サイードの *Orientalism* の影響も背景にあって、西洋中心的な知に対する批判となる。こうした流れの中で、溝口の方法論の革新性が注目されはじめるが、安易に西洋中心主義批判のほうに分けられ、コーエンと同じ性質のもののように捉えられた。西洋中心主義批判と微妙な差異がある溝口の優劣価値観に対する批判意識は見落とされた。つまり、欧米近代化を開始した時間的な早さを優劣の軸とする考え方、日中両国の近代化過程の構造的な差異を優劣の差異として解釈する見方、そうした固定化された認識に捕らえられて乗り越えられない状態を改善しようとする溝口の試みは取り上げられることはなかった。

³⁷P・A・コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 244頁。

第Ⅱ部

現在と向き合う思想的営為

—溝口雄三と孫歌を中心に—

1980年代の竹内好に対する溝口の猛烈な批判は1990年代に入って一切消える。晩年に至ると、竹内好の態度を継承しようとし、「いまでは竹内は僕のなかで、先達であり、同志であり、親友です」¹と述べ、1980年代とまったく異なる展開を見せる。なぜこのような変化が起こったのかというと、溝口は専門知という狭い枠内に安住できない竹内好の学問の態度に共感したからである。それ以降、溝口はアカデミズムの世界にとどまらず、視野をより広い公共圏に向けて開いていく。「日中・知の共同体」活動はそうした変化が起こった後に催された実践である。

竹内好の再評価は決して彼の考え方に改めて賛同するようになったからというわけではない。むしろ自己の置かれた状況を認識し、その中で絶えず取るべき行動を思考するという竹内の姿勢のほうに、そうした行為に感じるところが溝口の中で大きくなっていったのである。中国に対して不毛な優越意識をもつ国である日本は、戦後時間があつたにもかかわらず、そうした意識を問題とする主体の形成に成功しなかった。中国という対象のほうに無自覚に寄りかかって、それを探求する主体の問題を問うことはなかった。冷戦構造の中で共産圏の英雄を追っていたら、文革の流れを見ていけば、進む道は明らかであるように思われていた。その構造が崩壊され、中国という対象からそれまで背負われていた「革命」という看板が消えた今日、主体の問題が再び表れ、これまで問われることのなかった優越意識の姿が明らかとなってくる。こうした背景の中で、溝口の竹内好再評価が生まれてくるのである。

再評価までは、竹内の言う言葉の内容を重視して考えていたが、再評価するようになったきっかけは、内容よりも動機に注目するようになってからである。つまり、なぜそうしたことを言おうとするのかと問いかける。その問いは同時にその言葉を発する場の状況の考察をも含むことになる。具体的に言えば、「転向型の日本文化」と「回心型の中国文化」、「後進」と「先進」、「非ヨーロッパの近代」などの言葉にもっぱら

¹溝口雄三／聞き手：村田雄二郎・伊東貴之 インタビュー「主体への問い—「方法としての中国」をめぐって」平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜編『インタビュー—戦後日本の中国研究』平凡社 2011年 108—109頁。

注目して、それらの当否を厳しく問うことより、そうした語句を用いた理由を探るようになる。すなわち、何が竹内好をして「中国の近代と日本の近代」を問題化させたのか、その動機について問うようになる。

竹内好の動機について、溝口は以下の二点を取り上げて、そこに竹内が「中国の近代と日本の近代」を問題化した理由が存在するのではないかと推測している。一つは、「近代化」(西洋化)スタートの時間的な早さを優劣軸とした日本の対中国優越感への不承認、すなわち「近代化」(西洋化)の時間的先後の構図を優劣(先進日本対後進中国)の構図とすることへの不承認である。もう一つは、両国の近代過程の構造的な差異を優劣の差異とする見方への不承認である。日本の近代社会空間構図と中国の近代社会空間構図があまりに異なっており、到底同じ歴史類型では律せられないということを竹内は直感的に捉えていた。その近代の構造的な差異を民族の優劣に置き換えて中国の歴史を蔑視する風潮への不承認が問題となっている²。

溝口の竹内好に対する読み方が変化したのは明らかである。単なる字句の解釈だけではなく、その言葉が及ぼす効果、それもその言葉が置かれた場との関係で生み出す効果を考えるようになる。

竹内好の再発見と直接関連することとしては、1996年に溝口は中国社会科学院名誉教授として北京に1年間滞在していた時、竹内好が主催していた中国文学研究会の雑誌『中国文学月報』(のちに『中国文学』と改名)の復刻版を読んだことを挙げなければならない。それをきっかけとして溝口は竹内と出会った。その時注目したのは主に次の3篇の論文である。

①竹内好「目加田さんの文章」『中国文学月報』59 1940年2月

②竹内好・吉川幸次郎「翻訳論の問題」『中国文学』72 1941年5月

③竹内好「支那学の世界」『中国文学』73 1941年6月

竹内が書いたこの3篇はいずれも『竹内好全集』(筑摩書房 1981年)第14巻に

²溝口雄三「方法としての「中国独自の近代—明末清初から辛亥革命へ、歴史の軌跡を辿る」鶴見俊輔・加々美光行編『無根のナショナリズムを超えて—竹内好を再考する』日本評論社 2007年 20頁。

収録されている。溝口は「彼（竹内好を指す一筆者による）の倉石批判が、『全集』ではなく「月報」の中にあることによって、その時代の文脈が生き生きと感得できた。つまり、倉石武四郎、吉川幸次郎、目加田誠ら五〇年代以降日本の中国学を代表した錚々たる中国文学者の、その当時の言説の中に竹内の鬱屈、時代の鬱屈というものが感得できた」³と述べていることから、『全集』より『中国文学月報』の中における竹内好と出会ったことが分かる。

『全集』と比べてなぜ『中国文学月報』のほうが溝口にとって特別な重要性を持ったのか、その理由を解明するために、上述した 3 篇の論文の背景を明らかにしたい。まず、この 3 篇の批判対象をそれぞれ取り上げる。一番目の「目加田さんの文章」は、目加田誠「文人の藝術」（『中国文学月報』57 1939 年 12 月）に対する批判となる。二番目の「翻訳論の問題」は、翻訳論をめぐる竹内好と吉川幸次郎との論争から生まれている。竹内好と吉川幸次郎の往復書簡で展開される論争である。三番目の「支那学の世界」は、倉石武四郎の『支那語教育の理論と実際』（岩波書店 1941 年）に対する批判となる。倉石武四郎への批判として、竹内好以外にも、竹内照夫「漢文・支那語教育と支那学との現実—倉石主義の感想—」（『中国文学』73 1941 年 6 月）と魚返善雄「記号の問題」（『中国文学』73 1941 年 6 月）が同誌同号に共に掲載されている。竹内好の言説だけを考えるのではなく、他の人が行う倉石批判もともに射程に入れながら、溝口は竹内好を再考した。その結果、溝口は「当時の竹内の鬱屈にふれた思いがした。竹内を「中国研究」という雑誌の中に置く、言い換えれば他の中国研究者の言説の中に置いてみて、竹内がいかに平俗なあるいは高尚なアカデミズムの中で孤独であったかが、身につまされて分かった」⁴と真摯に述べる。「当時の竹内の鬱屈にふれた思いがした」、「竹内の孤独が身につまされて分かった」というのはどういうことであるか。具体的には、竹内好が置かれた当時の状況を考察しながら考えてい。

竹内好は吉川幸次郎や目加田誠などの支那学者を批判した。吉川幸次郎との論争の中で、翻訳の態度に注目して、「僕にとって、支那学を在らしめるものは、僕自身であ

³溝口雄三「「否定の造型」としての学問」『UP』33 巻 10 号 2004 年 2 頁。

⁴溝口雄三「竹内好『日本とアジア』今、どう竹内か」『現代思想』33（7） 2005 年 206 頁。

るし、吉川にとっては、支那学に無限に近づくことが学問の態度なの」⁵であり、「主體的に把へるか、傍觀者に立つか」⁶であると竹内は述べている。また「毎朝鞆をかかえて支那文学の事務所へ出勤するやうな生活は俺には向くまい」⁷とも述べていることから、彼は支那学者たちと相容れないということが伺える。中国という対象に寄り添うだけで、それを研究する主体を問題とすることがない支那学者たちを竹内は批判する。彼は、他の人と違って、中国文学を研究する態度に重点を置く。彼の追及するのは「否定」的な学問の態度である。「否定」的な学問とは、ひとつの決まった形として定型化、固定化するような学問ではなく、不断に自己否定をはらんだ運動体としての学問という意味での「否定」的なということである。倉石による漢文科の廃止、漢文を古典として国語科に入れる改革に対して、竹内は「今日、倉石さんは、支那学の貧困を、手段の改革によって救ひ得ると信じてゐる。實は支那学にとっては思想そのものが貧困なのである。それを忘れて無理に新しい手段を加へようとすれば、支那学は雲霧となって四散するであらう」⁸、「学問上の変革が達成されるやうな安易な考へ方には僕は反対である。僕は、学問についてもう少し厳しいものを考へてゐる。いはゞ否定の造型といったものである」⁹と述べている。それは、たえず自己の基盤を問い返していくやうな意欲がなければ、ただ目先を新しく変えるだけでは満足できないという竹内の態度である。

こうした支那学者たちに対して孤立する竹内好に溝口は共感した。支那学者たちによる中国という対象にひたすら無限に近づこうとする姿に対して、竹内の研究主体を問いかけることを重要視する態度の方に共感した。共感したのは、溝口が竹内と同様な状況に遭遇したからであろう。同様な状況というのは孤立する中での孤独感を指す。孤独感を経験してはじめて、竹内好と出会うことができたと考えられる。以後、溝口が置かれる状況について考察してみたい。

⁵溝口雄三「竹内好『日本とアジア』今、どう竹内か」『現代思想』33（7） 2005年 206頁。

⁶竹内好「翻訳論の問題」『中国文学』72 1941年5月 92頁。

⁷竹内好「目加田さんの文章」『中国文学月報』59 1940年2月 154頁。

⁸竹内好「支那学の世界」『中国文学』73 1941年6月 114頁。

⁹同上。

1996 年北京に 1 年滞在していた時、中国経済の急速な変動を肌で感じた述べていることから、溝口は当時の中国の繁栄を実際に目にし、衝撃を受けたことが分かる。一方、日本は新たな事態を見極めながらも古い地図しか持たないために、新しい状況の中で前に進めないのである。中国が達成した新たな繁栄を前にしても、日本の中国を見る視点は、主体への問いかけを怠ってきたために、以前とほとんど変わらない状況にあることを溝口は痛切に感じた。すなわち、中国の発展と日本人の中国観の停滞である。それを確信させたのが、2005 年の反日デモとそれをめぐる日本の報道である。2005 年 4 月に日本の国連常任理事国入り反対を掲げて、中国で反日デモが起こる。溝口はその時のマスメディアによる中国観を取り上げてこのように分析した。

例えば、政府が背後で操っている、政府批判や民主化要求のガス抜きに反日を利用している、愛国という名の反日教育の結果である、貧富の格差に対する大衆の不満のはけ口になっている、など。それらはすべて部分的に当たっているであろう。当たってはいるけれど、だからといってそれが「反日」として噴出したという事実までを帳消しにするものではない。煽動があったにせよ、民主化要求が潜んでいるにせよ、そのことで彼らの中の反日感情を架空のものとするとはできない。¹⁰

中国共産党だけに目を向ける日本人を溝口は目にしてきた。このような日本人がなお大多数を占めていると溝口は感じた。中国の現状と日本人の認識の停滞という裂け目が深刻な問題となっているのに、それが問題視されず、結局先進的日本と後進的中国といった構図によって中国をみてしまう。文革が終焉し、改革開放に入る中国は、先進資本主義国を追いかける単なる発展途上国にすぎないという対象としてしか見えない。つまり、中国に対する優越感が根底に横たわっているということである。

竹内好はその時代において、日本人の中国に対して持ついわれのない優越意識を絶えず問題にしようとし、日本人として主体を問い直すことが中国研究においても必要と考えたが、周りの支那学者たちはただひたすら対象としての中国に寄り添うことだ

¹⁰溝口雄三「反日デモ—どう歴史の目で見えるか」『現代思想』33(6) 2005 年 148 頁。

けを目指しているものばかりで、視線が向かうのは中国ばかりで自らに回帰することはなかった。そうした光景は、あたかも中国共産党だけに目を向ける研究者たちを目にしてきた溝口と重なるところはないだろうか。竹内の時代と今日の時代はそれを分かち時の流れにもかかわらず、自己の主体への問いかけを怠ってきたために、日本人の中国を見る視点においては変わっていないのである。そして、この孤立感をそのままの形で受け止めながら、けっしてごまかすことなく、偽りの優越感に頼ることなく、進まなければならないことを痛感したと言ってもよかろう。

自己主体への問い返しという研究態度に他者認識を通して反映してくる自己認識というメカニズムが働いている。中国を単なる観照的な対象として理解するだけではない。中国という他者は、研究主体の視点が無自覚になっていないかどうかを診断する有効な道具なのである。自己反省の鏡となる。中国を理解するのは、ただ中国に対する知識を増やすのではなく、改めて自己を認識する手続きでもある。

日本の中国研究において溝口は自分の主体を問うてきた。同様に、中国における研究についても問いかける。そして、中国人が日本を他者として意識していないことに溝口は大いに驚く。1996年に北京に滞在していたとき、日常経験を通じて中国における日本文化への関心の低さを感じた。1997年に第1回の「日中・知の共同体」活動を終えて、中国の知識人の日本への無関心という事態の深刻さを痛感した。日本の場合は、いわれのない優越意識をもつものの、絶えず中国を意識せざるを得ないところがある。それに対して中国の場合は、中華思想が根強く、中華文明圏内の周縁の存在をまったく考えない。日本に対する他者意識すら持っていない。両国間におけるこのような深いギャップに溝口は大きな危機感を覚える。こうしたアンバランスな状況を変えようとして、せめて知の次元で変えようとして「日中・知の共同体」活動を続けて展開していくことになる。

第4章 戦争の感情記憶と溝口雄三

—「日中・知の共同体」をめぐる—

この章では、戦争の感情と記憶について論じる。それは1999年「日中・知の共同体」第3回の会議「戦争と革命」における孫歌の会議報告によって提起されたものである。本章では、溝口の日本人の戦争に関する感情記憶の分析と孫歌の中国人の戦争に関する感情記憶の分析過程をたどり、日常経験に内在する記憶の構図についての両氏の分析に見られる共通の特徴を示すことにする。その枠組みを如何に乗り越えようとしたのか、両氏の試みを考察する。感情記憶の積極的な部分、つまり他者の痛みを共感する能力を取り出し、評価しようとする溝口の試みを浮き彫りにし、戦争の感情記憶分析が溝口の研究においてどのような位置を占めているのかを解明する。

1 「日中・知の共同体」活動の開催

1997年—2002年、国際交流基金の援助を得て溝口雄三は自らを日本側の発起人とし、孫歌¹を中国側の発起人としてともに「日中・知の共同体」活動を開催した。6年間にわたって行われた主な活動を取り上げてみれば、以下の表1のとおりである。

¹孫歌（1955年—）比較文化、日本思想研究者である。東京都立大学で政治学の博士学位を取得し、現在、中国社会科学院文学所研究員となり、北京日本学研究中心兼任教授にもなっている。また、『学術思想評論』咨議、『台湾社会研究季刊』および *Inter-Asia Cultural Studies: Movements* 編集委員を担当している。1988年に初めて日本を訪れ、1991年に溝口雄三と知り合う。主要な著作に『亜細亜意味着什麼—文化間的「日本」』（台北远流图书 2001年）、『主体弥散的空間—亜細亜論述之兩難』（江西教育出版社 2002年）、『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』（岩波書店 2002年）、『竹内好という問い』（岩波書店 2005年）、『我们为什么要談東亞—狀況中的政治与歴史』（三聯書店 2011年）等があげられる。

年	活動内容
1997 年	「知の制度について」（討論会）、「市民社会、近代化、公共領域、中間層」（シンポジウム）、「文学の位置」（対談）、「中国の歴史像」（講演）、「アジアの近代化と近代性」（公開座談会）
1998 年	「近代とナショナリズム」（シンポジウム）、日中の文芸、批判編集者による雑誌会議、参加者による雑誌での特集、対談
1999 年	「戦争と革命」（シンポジウム）、主要参加者による文芸、批評誌での特集、対談
2000 年	「アジア認識と戦後責任」、「日中間における報道ギャップ」（シンポジウム）、主要参加者による文芸、批評誌での特集、対談
2001 年	「日本のメディアの中国イメージ」、「教科書問題について」、「『日中・知の共同体』の現在点」、「現代中国の社会変容」（討論会）
2002 年	「流動する中国の現状と課題」（シンポジウム）、「アジアを語ること—その困難さと可能性」（シンポジウム）

表 1²

活動のテーマは毎回異なり、一定したものではない。本活動の一部の会議報告は日中両国で発表されているが、会議の全体像を反映した論文集は出されていない。だが、会議報告以外の資料は少なくない。溝口と孫歌両氏の対談は両国の雑誌に掲載されている。また、参加した後に感想を発表した者や、会議には参加していないが展開された議論に興味を持って、見解を発表した者もいて、「日中・知の共同体」に関する文章は開催後毎年雑誌に掲載され話題となった。筆者は、参加者であるかどうかにかかわらず、本活動に関する議論に加わったものをも入れ、主催者である溝口と孫歌を主軸に考察する。

「日中・知の共同体」の成果として孫歌『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』（岩波書店 2002 年）と溝口雄三『中国の衝撃』（東京大学出版会 2004 年）が出版される。多くの関心は、孫歌と溝口それぞれの思想の展開に集まっている

²表 1 は、孫歌の「これからの知の共同体とは」（『アジアセンターニュース』22 2002 年）をもとに作成したものである。

が、両氏の共通点については言及されることはない。6 年間にわたって「日中・知の共同体」活動を展開しえたのは、溝口と孫歌に共通する土台があつてこそ可能であつたと思われる。本章は、両氏の関連を重要視しながら、通底するところについて検討してみたい。孫歌が溝口と本当に一緒に仕事したのはこの活動のみである。以後、この活動が開催されるに至った経緯について触れてみる。

孫歌は、東アジアの間に、特に知識人の間に、共通の立場があつていいのではないか、という考えが芽生え、それを「知の共同体」という言葉にした。その話を聞いた溝口はそれを実践に踏み出した。最初の時に、両氏は「知」とか「共同」について深く考えることはなかった³。溝口は孫歌の提案を受け入れ、さらにそれを実行したのはなぜか、について以下の溝口の言葉を見てみたい。

「知の共同」を実践に移すに際し、私の中にあつたものとして決意という言葉を使われましたが、そうではなく、自分の中の何か衝動のようなものでした。衝動というのは、何から出てくるかといえば、ある種の満たされなさからです。中国と長い間、戦後一九五〇年代から一九八〇年代まで関わってきた三〇年というのは、東西冷戦の枠組みの中で、アジアの民族解放の戦いとか、アメリカの中国包囲戦略との戦いとか、そういう戦いを通じて中国との連帯を求めた、今から思うとそれらは空っぽなスローガンでしかなかったのですが、怖ろしいことに、その頃われわれの「正義感」はそれで満たされていた。その「正義の連帯」の帯が、文革などによって変形させられたり打ち切られたりした挙句、空っぽなスローガンが無残に消えた、国交が回復した後の八〇年代になって、中国から学術代表团などが続々来日されるようになった。それらの人々に対し、私は貪るように個人対個人の交流を求めたのですが、いつも何かが満たされない。何かどこかが違う。

これは自分が求めているものと違う。⁴

今までの学術交流に対して感じる満たされなさは溝口にあつた。そもそもそのよう

³溝口雄三・孫歌対談「歴史に入る方法—知の共同空間を求めて」孫歌著『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002 年 204 頁。

⁴同注 3 206—207 頁。

な不満が存在していたので、孫歌の提案に躊躇なく積極的に応えたと考えられる。また、両氏の竹内好に対する読み方が一致するという共通点も見逃してはいけない。

溝口は竹内の理解者となってから、それにとどまらず、竹内に学ばなければならない、竹内を継承する⁵とも述べている。何を学び、継承するのかというと、彼の学問の態度である。「存在として定型化されるものではなく、不断に自己否定を孕んだ運動体としてある。そのいわば定所への安住を許さない運動体」⁶である。

一方、孫歌は『竹内好という問い』⁷においてこのようなことを述べている。

竹内の世代と比べて、今のわれわれが歴史上の自分に出会う能力は明らかに衰退しつつある。そのことにはある意味では、われわれが状況の流動性から遊離して、観念の世界に安住しがちであることと表裏の関係にある。観念の世界に安住できるということは、観念の安定性を前提としている。今日われわれが使っている概念のほとんどが欧米伝来ということを考えれば、観念を「歴史化」させるプロセスがいかに重要かは自ずと明らかであろう。もしも竹内好を今日に蘇らせることに意味があるとすれば、それは何よりもまず「観念」の安定性を崩し、歴史的にそれを相対化するところにあるに違いない。⁸

孫歌と溝口はともに竹内好の「観念の安定性を崩す」「運動体」「流動性」といった点に注目し、重要視していることは一目瞭然である。こうした共通点は、両氏が協力して「日中・知の共同体」活動を開始した重要な基盤となるのではないかと思う。なぜかという、両氏の竹内好への共通理解は、その活動の性格によって反映されるからである。「日中・知の共同体」は、アカデミズムの世界を超えて、より広い公共に向けて行なわれた活動である。それは「定所への安住を許さない運動体」の主旨と一致

⁵溝口雄三「「否定の造型」としての学問」『UP』33巻10号 2004年。

⁶溝口雄三「竹内好『日本とアジア』今、どう竹内か」『現代思想』33(7) 2005年 207頁。

⁷岩波書店 2005年、中国語版『竹内好的悖論』北京大学出版社 2005年。本書は孫歌の博士論文の大部分によって構成されている。

⁸孫歌『竹内好という問い』岩波書店 2005年 まえがきXX頁。

し、その表れとなるのではないかと思う。また、一般的な学術交流と違って、専門家型の知の交流を行なうのではなく、感情を重視するのは、「観念の安定性を崩」そうとする試みではないかと考えられる。溝口と孫歌には竹内好に対する共通理解があったから、「日中・知の共同体」は開催に至ったと思われる。

2 交流方式が確立する過程

以下では、孫歌と溝口の対談を考察し、「日中・知の共同体」において両国の研究者たちの間に共感する交流方式を確立しようと試みたことを示していくことにする。

「日中・知の共同体」活動において、具体的にどのようなことが問題となり、焦点をどこに置くのかということは最初からはっきりとしていたわけではない。それは活動の進行に伴って徐々に明確になってくるのである。ただ起点として以下の基本前提を設定した。

- 1、知の共同体は、専門家型の知の交流を目標とはしない。知の共同体は、専門家型交流が隠蔽してしまった文化的差異ないしは文化衝突の問題を扱い、各々の知の置かれた状況や互いの困難な状況を反省することを目標とする。
- 2、知の共同体の対話は、専門を異にする学者間や行動的知識人間の対話を前提とするもので、相手文化のある一領域の研究を前提とするものではない。このため、参加者の基本条件は、本国文化と社会の基本問題に危機感と介入力を持ち、また現在の知の状況に対し反省する精神を備えていることである。
- 3、知の共同体は、実体化と制度化に反対し、また民族や文化の代弁者となることに反対する。そのため個人の資格で対話と議論に参加し、交流のプロセスを流動的なものに保ち、限られた時間と交流の中で、できる限り多くの問題を提示、国境で区切られた枠を越える思考の起点を探求する。⁹

⁹孫歌「グローバリゼーションと文化的差異—国境を越えた知の状況に対する考察」『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 97-98頁。
初出：中国語版「全球化与文化差異：對於跨文化知識狀況的思考」『東方文化』2001

1999 年に第 3 回目の活動として溝口と孫歌の対談が行われる。その中において、溝口は一般的な学術交流の問題点を指摘する。

学術交流のレベルにおいて日中友好的な現象が存在する。つまり、お互いに国家という枠組みを尊重する前提のもとで行われることである。逆に言えば、国家という枠組みを絶対化する前提のもとで行われることである。枠組みと枠組みの間には何の衝突もなく、平穏な礼儀がコミュニケーションの可能性にとってかわる。¹⁰

国家という前提の下での何の衝突もない友好交流を「日中・知の共同体」活動において避けるということを溝口ははっきりさせる。第 3 回目の活動を通じて、求められていることがより一層浮き彫りになってきた。最後の第 6 回目の活動を終えて、孫歌は「これからの知の共同体とは」を書き、その中において「知的活動における危機感、国境を越える対話の中で感じ取っていた戸惑いなどの「形にならない」緊張関係が暗黙の前提となっていた」¹¹とより明確な形で分析する。

両国の参加者たちが持つ戸惑いや苦悩や葛藤などの容易には表明できない感情をあらわにさせることを重視した。このような交流方式は、まず、苦悩を考えることが要求され、そして他者の苦悩を読み取ることが求められる。これは感性を働かせようとする試みに他ならない。周知のように、アカデミズム研究においては感情移入をすることはではない。感情を重視するという時点で、この活動は一般的な学術的交流と分かれる。孫歌と溝口もその点を意識している。専門の知を交流しないことを最初からは

年 2 月号；日本語版『世界』2001 年 11 月号。

¹⁰原文：「学術交流層面存在着的日中友好現象，就是在相互尊重国家框架的前提下進行的。反過來說，這是一種国家框架絶対化前提下的交流。框架之間沒有任何衝突，平穩的礼儀取代了交流的可能性。」

溝口雄三／孫歌「關於“知識共同体”」『学術思想評論』第 5 輯 遼寧大学出版社 1999 年 10 月 227 頁。

¹¹孫歌「これからの知の共同体とは」『アジアセンターニュース』第 22 号 2002 年 20 頁。

っきり意識し、あえて感情を重視するという交流方式を確立しようとする点から、本活動は両氏の大胆な試みであるといわざるを得ない。以下では、両氏を中心に、感情を重視する実践を通じてどのような問題が提起されたのかについて考察する。

3 孫歌と溝口が提示する構図

「日中・知の共同体」第3回の会議において、孫歌は戦争の感情と記憶という問題提起をした。後に「日中戦争—感情と記憶の構図」¹²という題をして発表される。戦争の感情と記憶をめぐって、孫歌と溝口がそれぞれどのような分析を行なったのかを考察する。考察を始める前に、まず孫歌の戦争問題を捉える立場はどうであるのかを見てみよう。

研究者として、ただ戦争が正義であるかどうかを検討するだけでは足りないのである。日中戦争を例にしていえば、それはより広範な深い面で検討されるべきである。イデオロギーだけの問題ではなく、個人の思想問題でもある。さらに今日と連動する歴史問題でもある。われわれは異なる国の人間であるが、必ず国家と民族が交錯する点においてこの戦争を共有する歴史を作らなければならない。

つまり、われわれは共にこの戦争の歴史を消してはいけない責任がある。¹³

戦争の正義を検討するだけでは満足できず、それを「個人の思想問題」としても論じ

¹²『世界』2000年4月号、中国語版「実話如何実説」『読書』2000年3月号。『アジアを語ることのジレンマ』（岩波書店 2002年）所収。

¹³原文：〔作為研究者、僅僅討論戦争是否正義是不夠的，就中日之間的戦争而言，它應該在更広範和深入的層面上得到討論。它不僅是意識形態問題，也是個人的思想問題，更是与今天相關的歷史問題。我們雖然属于不同国家，但是必須在国家和民族的交錯点上把這場戦争作為共有的歷史。就是說，我們同樣具有不使這段歷史消逝的責任。〕

溝口雄三／孫歌「關於“知識共同体”」『學術思想評論』第5輯 遼寧大学出版社 1999年10月 226頁。

るという孫歌のことばを念頭に入れて考察に入りたい。

「日中戦争—感情と記憶の構図」の中において、孫歌は中国人の戦争をめぐる感情と記憶が動くメカニズムを剔抉する。それは、中国人の「感情と記憶イコール被害者の怒り」¹⁴というように、一個の記号に単純化されることである。「南京大虐殺」という、この簡単なシンボルに拠って、また「被害者三〇万人」という一個の数字に拠って、中国人は日本の間の友と敵を確認する」¹⁵という非常に単調な態度と陥っていることを指摘する。その他に、東史郎現象¹⁶も取り上げて、そこにも象徴により簡略化されている危険があることを指摘する。

東史郎といえ、彼が八七歳という高齢ながら、日本の法廷で南京大虐殺を否定する原告たちと一歩も譲らぬ闘争を展開しているという一点、また南京の被害者記念碑の前で頭を垂れて謝罪する姿をもってすれば、圧倒的多数の中国人から

¹⁴孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 57頁。

¹⁵同注14 37頁。

¹⁶元日本兵の東史郎は1987年に従軍日記『わが南京プラトーン—召集兵の体験した南京大虐殺』（青木書店）を公表した。彼は何回も中国にわたって、中国人に対して謝罪した。それで東史郎は中国で非常に注目されるようになった。1993年に東史郎日記の内容をめぐって元上官から名誉毀損で東京地裁に提訴され、日記記述に客観的証拠がないとして損害賠償を求められた。1998年東京高等裁判所で東史郎の二審敗訴が確定した。この敗訴は中国からの抗議と批判を招いた。中国側では、1999年に『東史郎日記』は翻訳出版され中国人の読者に広く知られている。1999年4月東史郎は中国中央テレビ局の番組『実話実説』に参加して大きな反響を呼んでいる。これらの現象を対象とする研究論文として次の数篇が挙げられる。①山内小夜子「“南京裁判”をめぐる内外の危険な動き」『世界』1999年4月号。②水谷尚子「私はなぜ東史郎に異議を唱えるか」『世界』1998年8月号。③中北龍太郎・丹羽雅雄・空野佳弘「『東裁判』の真実を訴える—八月号水谷尚子論文批判—」『世界』1999年10月号。④孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」『世界』2000年4月号、「思想としての「東史郎現象」—理論と現実の間で—」『世界』2001年2月号。

理解され、受け入れられるには十分であり、ついには英雄視すらされる。その彼が日本国内で何をしている人間か、どのような人間か、そういったことは実は主要な問題ではないのである。¹⁷

中国人に理解できない基本的問題とは、同じく戦争責任を追及する良心ある日本人にもかかわらず、なぜ多くの人が東史郎のことばの信憑性問題に拘泥するのだろうか、ということである。訴訟で勝訴した側が、公然と「南京大虐殺捏造裁判勝利」を祝う横断幕を張った時点で、この裁判が民事裁判であるか、また東史郎の証言が信用できるか否かは、既に議論の核心になりようもなかったのである。なぜなら、裁判の性質と東史郎個人の問題を追及することは同じ作用しか示せないから。それはつまり、人々の南京大虐殺に対する歴史の記憶へ向けた関心を捻じ曲げることであり、これは虐殺の数字に拘泥することと、効果という面では同じである。¹⁸

記号化される戦争の感情と記憶のせいで、中国人にとっては、日本人が犯した罪を認めるかどうかという二者択一でしか問題を考えることができなくなっている。この二者択一の態度は、被害者の数は 30 万かどうか、東史郎日記は真実かどうかといった歴史的事実を確かめることで満足する姿勢を取っている限り、どうしても問題となることがない。南京大虐殺を単なる歴史的な事実として議論することに孫歌は満足できない。歴史的な事実の襞の中に分け入り、歴史的な事実以外のコンテキストを読み取ろうとすることが孫歌の姿勢であった。なにが、そうした事実だけにこだわるような傾向を生み出すのかについて、孫歌は考えようとした。

そうした探求に向かうのは、中国人の戦争認識が罪の認可をめぐる二者択一的な単調さを示しているのに対し、日本人が全く別の枠組みからなる思考の論理で対応するからである。その乖離に孫歌は危機感を感じている。戦争問題から明らかになる中国側の意識に対する日本人の思考の論理について孫歌は二つの面を取り上げている。一つは、「文献資料の考証に満足して、人々の感情記憶を完全に無視したり、果てには敵

¹⁷孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002 年 37—38 頁。

¹⁸同注 17 54—55 頁。

視したりする」¹⁹ことである。もう一つは、東史郎訴訟の判決結果に抗議を表明する中国政府に対する日本社会の一般的な反応、つまり、「中国が日本の三権分立制度を無視して、民事訴訟と政治的判決を混同している」²⁰ということである。そこには、日本における政治認識の優越性を誇る気持ちがある。こうした中国人の単調な戦争認識と日本人の思考方式とが全く噛み合わないままに、事態を進展することなく、膠着化、固定化していくことを孫歌は問題にしている。「むしろ「良識ある日本人」と「中国」の間の溝を深めることになるのだ」²¹と述べて強く危機を感じている。これは「日中・知の共同体」活動において示された孫歌による「形にならない」緊張関係」となる。

孫歌によって提示された構図は、中国人は感情と記憶を短絡的に結びつけ、被害者の怒りという観点から考えようとするというものである。また彼女がそれに応ずる日本側の反応にたいして下す批判は、歴史学研究者が文献資料という観点を最重要視することと、日本国民が自国の政治制度に密かに優越感を覚えているということであった

一方、溝口は日本側の記憶の構図を示す。その前にまず彼の戦争問題の捉え方について見てみたい。

〔あなた(孫歌を指す一筆者による)が述べるイデオロギーの面だけではなく、思想の面において戦争問題を処理するという点に私は深く同感する。戦争は(中略)必ず思想の面まで深まり、戦争と歴史の中で生きる主体の問題として認識され、自己原理化される段階に至らなければならない。²²

¹⁹孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 52頁。

²⁰同注19 51頁。

²¹同注19 54頁。

²²原文：〔我对于你所說的不僅僅在意識形態層面，也在思想層面上处理戦争問題這一点深有同感。戦争（中略）它還必須進一步深入到思想的層面，作為生活于戦争和歷史中的主体問題被加以認識，到達使自己原理化的階段。〕

溝口雄三／孫歌「關於“知識共同体”」『學術思想評論』第5輯 遼寧大学出版社 1999年10月 226頁。

戦争問題を思想の面において掘り下げて思考する点で、溝口と孫歌は一致することが明瞭である。孫歌論文「日中戦争—感情と記憶の構図」が掲載された5ヵ月後、溝口は「日中間に知の共同空間を創るために」²³を書いて応えている。その中で、日本人の感情記憶が働くメカニズムを整理した。それはただ孫歌への応答というだけではなく、近代以来の欧米を軸とした歴史認識の問題の延長として論じていくという射程を持つものであった。そのことについて検討していきたい。

日本の国民に共有される戦争記憶について、溝口は「被害と奮闘」と加害の三つの次元から述べている。

ここで共有される感情は、日本人がアメリカの圧倒的な軍事力と戦いそして敗れた、という「奮闘と被害」のアンビヴァレントな感情であり、奮闘＝「玉砕」、被害＝ヒロシマと両極化するけれども、その間に断絶はなく、奮闘から被害まで、国民感情としてひと繋ぎの「場」になっている。ここで留意しておきたいことは、「奮闘」は被害の意識や感情から出てくるもので、加害の意識や感情からはストレートには出てこないということである。²⁴

日本国民の戦争の感情記憶を支配している「奮闘と被害」といった構図を溝口は捉えた。国民に共有される戦争記憶は被害記憶のみで、加害という視点は出てこないという構図を明らかにした点で孫歌と同じである。日本人もみずからの記憶を被害という観点から構成しようとしている。

溝口は構図の指摘だけにとどまらず、その原因も探った。日中両国の「戦争記憶の外側には、欧米の近代を軸とした、そしてそれに依拠すれば優劣の価値意識を伴うことにもなる歴史意識が、見えないかたちで存在し、その意識あるいはその意識への反

²³『世界』2000年9月号。のちに「現在形の歴史とどう向き合うか」と改題して『中国の衝撃』所収。

²⁴溝口雄三「歴史認識問題はどの問題なのか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004年 67頁。

発の感情が戦争記憶に浸透している」²⁵と述べられている。戦争問題は、溝口において近代化の過程の構成部分として扱われ、近代化の過程をいかに認識しているかという問題と連動するものとなる。近代化を物質的次元での具体的な目標の実現、達成といった具体的な事実の観点から考えるよりは、近代化の過程が人々の認識に与えたことの方に溝口は大きな関心を寄せる。上述した原因の分析過程から分かるのは、感情記憶にたいして戦争問題を越えた、近代以来の歴史認識にかかわる問題として扱おうとしていることである。

溝口と孫歌は、戦争記憶が被害者の記憶のみに関わるといった構図の存在を具体的に示した。両氏は感情を重視し、それが働くメカニズムに注目する方法において、異なるものではない。日本も中国も被害者という観点から形成されたシステムの中に閉じこもり、他者を認識する契機を、自己を他者に向かって開いていく機会を失っているのである。そうした膠着状態の不毛性を溝口も孫歌も批判しているのである。ただ、孫歌と比べて、溝口はそのメカニズムの根源にまで踏み込み、そこに歴史的な要因、欧米的近代化とそれに伴う優劣価値観という問題から考察していこうとした。

4 構図を乗り越えようとする試み

これまで、溝口と孫歌の構図の分析を考察してきた。本節では、その固着した構図を乗り越えようとする両氏の試みを確認する。その考察を踏まえて、感情記憶の分析が、溝口の研究において占める位置づけを解明していくことにする。

まず、戦争の感情と記憶が被害者の視点からのみ構成されるといった構造の乗り越えを考えたことについて検討したい。「歴史認識問題はどう問題なのか」において、日中間の歴史認識問題に触れる前提として、溝口は「文脈の共同」を提起している。その中で「文脈の共同」とは何であるか、についてはっきり定義していないが、事例を挙げて説明している。

²⁵溝口雄三「現在形の歴史とどう向き合うか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004年 46頁。

歴史認識の問題についていえば、日本でこの問題について国民的なコンセンサスが得られていないという複雑な国内の文脈そのものが、中国の知識人にとって「知」的関心の対象にならねばならない。例えば、中国では戦争体験が日中戦争だけであるのに、日本では日中戦争のほかに大東亜戦争、太平洋戦争、第二次世界大戦とそれぞれ性格規定を微妙に異にしたいくつかの戦争が同時に体験された、このため、ある思考回路からすれば当然のことながら、勝者による敗者の裁判という一面をもつくすぶり、「なぜ日本だけが裁かれるのか」などの発言が飛び出したりする。(・・・) こういった双方の文脈の掛け違いそれ自体が、「アジアの知」の対象として双方に共同認識されねばならない。²⁶

また、その反対の事例も挙げられている。「ただ問題だけを共同討議したことは「認識の共同」であっても、「文脈の共同」にはなっていない」²⁷のである。上述した事例からすれば、「文脈の共同」とは、他者の痛みへの共感²⁸がなければならない。

被害者の記憶だけで形成される単純な戦争の感情記憶からは、他者の文脈を理解することを求めることができない。そのため、他者への共感能力を養成しなければならない。それにより、優劣価値観に支配され、乗り越えられない状態になっている被害者の立場から解放されることになる。感情記憶の構図を分析した上で「文脈の共同」を主張した溝口はその可能性を考えていた。

後期の活動における溝口の感情記憶の分析²⁹は、優劣価値観を乗り越える方法を探った実践であった。このような意義を持つ実践として、それは近代化の過程の中で生まれる歪曲された価値観を問題にしてきた溝口の思想史研究の流れと通底している。

一方、孫歌は構図を乗り越える試みとして、文化を越える立場を確立しようとする。

²⁶溝口雄三「歴史認識問題はどうか問題なのか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004年 65頁。

²⁷同注 26 64頁。

²⁸溝口雄三「歴史学における共感と科学性と主体」(『日本史研究』451 2000年3月)において、歴史家は共感能力を養成する必要があると強く主張している。

²⁹感情記憶と事実記録について、溝口は「歴史叙述の意図と客観性」を書いて、歴史学の主観と客観の問題とかかわって展開している。それについて論じることは本論文の主題から多くずれる恐れがあるために、あえて触れないことにする。

その立場はまだ明確な形が形成されたわけではないが、一点だけははっきりとしている。「文化を越える立場」というものは、二つの文化の間で発生するのではなく、一つの文化内部で発生するのだということを、われわれは益々明瞭に思い知るようになった。つまり、一つの文化内部に己の自足性に対する懷疑が生じた時に、初めて文化を越えるということが起こりうるということだ」³⁰。「一つの文化内部に己の自足性に対する懷疑」とは、一国の文化の閉鎖性を批判したものであることは明らかである。それは、他者への共感を妨げるものと言い換えてもよからう。ここまで至れば、以下のようなことが言えるのではないだろうか。孫歌の「文化を越える立場」は、溝口の「文脈の共同」と緊密に関係していて、それを広げていくものである。戦争問題を主体の問題と解釈し、そこに近代化の問い返す契機を見いだそうとする溝口の姿勢は、そうした主体が自己変革の中で遭遇していく他文化との関係という孫歌の探求の方向へとつながっていくように考えられる。

5 まとめ

上述した考察を踏まえ、以下の二点が明らかになったのではないかと思う。

一つは、「日中・知の共同体」において、溝口と孫歌は、なぜ日中の研究者たちの苦悩、ジレンマ、怒り、苛立ちをあれほど重要視したのか、という点である。それは、両国の研究者たちのあいだに、共感能力を呼び起こそうと考えたからである。また、自国の状況を問う中で、文化の枠を越えた知識人の誕生を展望していたとも考えられる。

もう一つは、感情記憶の分析の溝口の研究における位置づけが明らかになってきたという点である。戦争の感情記憶が被害者の記憶のみで構成されるという限定的な状態の中から、他者の痛みを共感するという積極的な部分を創出しようとした。すなわち、共感能力を養成しようとしたのである。そこに、優劣価値観に伴う歴史認識から解放されるルートを溝口は見た。この意味で戦争の感情記憶をめぐる分析は、溝口の

³⁰孫歌「グローバリゼーションと文化的差異—国境を越えた知の状況に対する考察」

『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 104頁。

これまでの研究とつながっているのである。

第5章 戦争の感情記憶をめぐる議論について

前章では溝口雄三による戦争の感情記憶の分析について論じた。この章では、学界において戦争の感情記憶はどのように議論されているのか、について検討する。また、孫歌と溝口の戦争の感情記憶の分析は、それぞれ如何に読まれているのか、を分析する。最後に、戦争に関する共同の知の構築において、孫歌と溝口はどのような志向を共有するのかを明らかにする。

1 戦争の感情と記憶に対する態度の分かれ

1-1 孫歌の問題提起の深化—溝口雄三の態度

「日中戦争—感情と記憶の構図」³¹の中において、孫歌は中国人における戦争の感情と記憶のメカニズムを刎抉する。つまり、中国人が戦争の感情と記憶を被害者の怒りのみによって構築するという、複雑な表象の単純な記号への還元のことである。文献資料の考証によって人々の感情記憶を無視することを孫歌が厳しく批判したことは前章で述べた。「日中戦争—感情と記憶の構図」が掲載された5ヵ月後、溝口は「日中間に知の共同空間を創るために」³²を書いて応えている。その中において、孫歌の問題提起を深めようとしたことを本節で検証する。

中国人の戦争の感情記憶を被害者の怒りのみに集約するという構図を如何に乗り越えるかについて、孫歌は「感情記憶は必ずや複雑な歴史の内容を担わなければならない」³³と述べている。その第一歩として、感情記憶を被害者の怒りだけに限定して

³¹『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年。初出：『世界』2000年4月号、中国語版「実話如何実説」『読書』2000年3月号。

³²『世界』2000年9月号。のちに「現在形の歴史とどう向き合うか」と改題して『中国の衝撃』所収。

³³孫歌『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年

考えるのを止めなければならないと指摘して、論文を結んでいる。

孫歌への応答論文において、溝口は日中両国の戦争記憶が作り出されるメカニズムを分析した。

中国についていうと、中国人の戦争記憶が抗日戦争に集中しているのは、中国の近現代史が帝国主義の侵略とそれに対する抵抗、一九三〇－四〇年代は共産党を中軸とする抗日戦争という構図であることにもとづく（・・・）一方、日本の場合、国民の戦争記憶がアメリカ軍から受けた空襲体験に大きく傾いているのは、大筋からみて、明治以後のいわゆる「脱亜入欧」路線と基本的に暗号する。つまりその歴史認識の道筋においては、日本は欧米と対抗し欧米と戦い、欧米ととりわけアメリカに敗れたのであり、アジアに敗れたわけではない、というものである。この文脈からは、容易に、“広島”を欧米への新たな挑戦の出発点に位置づけることも可能であろう。あるいは、敗戦から立ち上がった不屈の精神、国民的困苦と健闘の象徴にもなしうるだろう。³⁴

そしてそのメカニズムが形成された原因をも探った。

日本の近代史は、日本の近代過程を帝国主義的近代と見なすにせよ、文明開化的近代とするにせよ、アジア諸国に対して経済的・軍事的・制度的に優位に立った近代とする点で共通している。これを「入欧の近代」というとすれば、それは「抵抗の近代」（中国の近現代史は帝国主義の侵略に対する抵抗の近代とすることを指す一筆者による）とは、歴史意識の位相を一見異にするが、西洋「近代」軸を共通にする点で同一であり、少なくとも日本人の歴史価値意識においては、その同一軸上において「入欧」が優位と見なされる。両国の戦争記憶の外側には、欧米の近代を軸とした、そしてそれに依拠すれば優劣の価値意識を伴うことにもなる歴史意識が、見えないかたちで存在し、その意識あるいはその意識への反発

56 頁。

³⁴溝口雄三「現在形の歴史とどう向き合うか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004 年 44－45 頁。

の感情が戦争記憶に浸透している。³⁵

ここにおいて優劣意識が要因として登場し、戦争記憶の問題に新たな光をあてる。記憶の問題にこの要素が介入することで、歴史的な視点が導入されることになる。記憶の問題は歴史的意識の問題、近代化の問題でもある。こうした分析を行なった溝口論文への応答として、孫歌は「近代史に向き合う倫理的責任」を発表している。その中で「日本の戦争の歴史と日本の近代化の過程自身とは密接不可分であり、そのため戦争の歴史を検討することは、近代化の検討と結び付けなければならない」³⁶と述べて、溝口の分析に応える。また「溝口論文が言及していたように、感情記憶を作り出した「装置」自身に反省が及ぶ段になれば、われわれは被害者の立場でのみあの歴史に向き合って満足するというわけにはいかなくなる」³⁷と述懐して、溝口の分析に被害者の記憶のみに頼って戦争記憶を積み上げようとする単純な図式から解放される可能性を見いだしている。

だが、同論文において孫歌は感情記憶の分析に引き続いて取り組んでいこうとするよりは、むしろ国境を越えた知識人の仕事の倫理を問うといった他の方向に移っていく。ここから、孫歌の仕事は戦争の感情記憶の問題に注意を喚起しながら、それを支えとして別の方向へと向かおうとしていることが分かる。感情記憶問題の解決に取り組んだのは溝口である。感情記憶をめぐる溝口の試みは、孫歌によって提起された問題を深めたものにほかならない。しかし、すべての研究者が同じ態度を取るわけではない。むしろまったく反対である。

1－2 批判の声

³⁵溝口雄三「現在形の歴史とどう向き合うか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004年 45頁。

³⁶孫歌「近代史に向き合う倫理的責任」『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 87頁。初出：『世界』689号 2001年。

³⁷同注6 90頁。

ここでは古厩忠夫³⁸の反論を取り上げて論じる。溝口の「日中間に知の共同空間を創るために」に対して、古厩は「感情記憶」と「事実記録」を対立させてはならない—溝口雄三論文への反論として」（『世界』692 2001年）を発表している。氏の反論は以下の二点にまとめられる。第一点は、歴史学研究において感情記憶は無視されていないということである。第二点は、「感情記憶」と「事実記録」を対立させて考えることに異議を唱えるということである。

まず、はじめの点について考えてみたい。古厩は、論文において南京事件調査研究会によるルポルタージュ方法と聞き取り調査を取り上げて、「感情記憶」をも重視している³⁹ことを強調している。また、研究会は「歴史の科学性」を重視し、徹底して資料を集め、事実を発掘し、それらによって謬説を論破してきた⁴⁰と述べ、実証的客観性による調査研究の有効性も強調する。古厩のこの反論は溝口に対するものとして書かれているが、同時に孫歌の戦争の感情記憶の論考に対する反論ともなっている。感情記憶を口述資料として扱うか、それとも、感情記憶自体を直接研究対象として扱うか、という点で、同じ対象にたいして、双方の立場が分かれてしまうことは明らかであろう。議論する共通基盤が確立されていないと言わざるを得ない。この対立した状況を打開したのは代田智明である。それについては章を改めて詳しく検討する。

次に、第二の点について論じる。古厩は、溝口の日本における南京大虐殺をめぐる肯定派と否定派の両派に対する捉え方に反論している。溝口が具体的にどのように捉えていたか、以下の引用を見てみたい。

自由主義史観に立つ人々が、「侵略」を否定しようとするその究極の狙いは、「自虐」に対して、日本近代の優越性を歴史認識のうえで確立することにあるであろう。ここで注意しておきたいのは、それに反対する立場の人々の「侵略」史観が、

³⁸古厩忠夫（1941年—2003年）：東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。新潟大学人文学部教授。専門は中国近現代史である。著書には『東北アジア歴史像の共有を求めて』（1994年 有信堂高文社）、『裏日本』（1997年 岩波書店）等がある。

³⁹古厩忠夫「感情記憶」と「事実記録」を対立させてはならない—溝口雄三論文への反論として」『世界』692 2001年 139頁。

⁴⁰同注9 140頁。

「優者の侵略」対「劣者の抵抗」および「劣者の勝利」対「優者の謝罪」という優劣の構図を出ていない点で反対者と同軌であること、そして中国人の「抵抗の近代」の構図もこれと同軌であるため、おそらく中国人によってこの構図上の謝罪では釈然としないものが残りつつけるであろう、ということである。⁴¹

これに対して古厩は以下のように述べている。

本年四月三日、来年度教科書として『新しい歴史教科書』が検定に合格すると、新聞各紙は一斉に一面記事でこれを報じ、識者の見解を紹介したが、溝口氏も日本経済新聞に「寄稿」を寄せている。ところが、氏は「寄稿」の書き出しで「その背後にある『歴史観』を見てみると、加害行為を反省する側も、認めまいとする側も、アジアの近代過程において日本を『優等生』、中国をはじめとする他のアジア諸国を『後進的』と見なす、という点では実は同じである」と両者を一刀両断した。大胆な発想は溝口氏の真骨頂で、これまで感嘆することしばしばであったが、本来真摯な問題提起である氏の指摘も、舞台を間違えると「自分の知のカプセルの窓から眺めた」声に聞こえてしまう。これはまさに溝口氏の言う「現実」、検定・採択をめぐって凌ぎを削っている現実から遊離している。⁴²

溝口氏はすぐれて戦後および現在の問題である「感情記憶」というフィールドと歴史的事実を論ずる「歴史の科学性」のフィールドを一緒にくたにしているのではないだろうか。否定論者が二つのフィールドを駆使しているからにはわれわれも二つのフィールドで考えねばなるまい。⁴³

「否定論者が二つのフィールドを駆使している」という現状を考慮した古厩からみ

⁴¹溝口雄三「現在形の歴史とどう向き合うか」『中国の衝撃』東京大学出版会 2004年 47頁。

⁴²古厩忠夫「「感情記憶」と「事実記録」を対立させてはならない—溝口雄三論文への反論として—」『世界』692 2001年 142頁。

⁴³同注12 141頁。

れば、溝口の方法は「現実から遊離している」ものである。古厩の批判は、溝口が肯定派と否定派を同列に論じたことにある。古厩の論文からは南京大虐殺をめぐる否定派との論争において肯定派が果たした役割およびその立場を守ろうとする姿勢が読み取れる。

古厩の反応から、誤解を招きやすい溝口の方法の特徴が明らかとなる。つまり、溝口の立場にたいしては、肯定派による努力や歴史学の文献実証による貢献を無効にしようとしているのではないかという誤解が生じやすい。しかし、溝口はそのような議論に応えはしない。古厩の批判にも応答することはなかった。前述したように、それはおそらく感情記憶の扱い方について共通基盤がないからであろう。そこから、溝口がもっぱら自らの批判を推進することに専念するだけで、そこから派生する問題を考慮に入れない態度が窺える。

1－3 孫歌の感情記憶分析に対する読み方

孫歌の『アジアを語るジレンマー知の共同空間を求めて』は上述した戦争の感情と記憶の論考を含めて、主に 1997 年以後の論考を所収した論文集である。この著書について言及している論文は数多くあることから、その著書の注目度が高かったことが分каろう。それを敢えて分類してみれば、二つに分かれる。一つは、中国思想史や文学研究者および日本思想史研究者たちによる評価である。もう一つは、歴史学者による異議を唱える声である。

まずは積極的な評価の声から聞いていこう。中国人の戦争の感情記憶のメカニズムを剔抉する孫歌の指摘は高く評価されている。「孫歌論文が、われわれに示唆しているのは、中国の知識界もまた、決して一枚岩ではない、という至って単純明瞭な事実である」⁴⁴と指摘する伊東貴之は、『『歴史』と相渉る、開かれた主体形成の倫理—孫歌『アジアを語ることのジレンマー知の共同空間を求めて』を読む』においては、南京

⁴⁴伊東貴之『『歴史』と相渉る、開かれた主体形成の倫理—孫歌『アジアを語ることのジレンマー知の共同空間を求めて』を読む』『政治思想学会年報』第 18 号 2004 年 134 頁。

大虐殺をめぐる日中間の歴史認識の齟齬を挟った論考および多様性と複雑多義性を帯びたアジアを語りなおす状況論的な思考に画期性をみている⁴⁵。

「中国人の「感情記憶」が「被害者の怒り」だと考えるのを止めたとき、われわれ日本人は、不要な圧迫感から解放されて、中国人の思惟と感情を「思想資源」とすることに参画できやすくなるだろう」⁴⁶と評価する代田智明はその一方で、「著者の基本的姿勢に共鳴し、それを高く評価しつつ、だが個別の具体的事案について、著者の判断に評者が保留の態度を取らざるを得ない」⁴⁷とも述べている。

中国人における戦争の感情と記憶をめぐる状況論的な考察について、「こうしたさっぱりとしたことばで「自国」に対する冷静な眼差しを表現してみせることのできる著者自身に興味を抱いた」⁴⁸と小林敏明は述べている。

こうした好意的な評価に対して、歴史学者たちは感情記憶といった提起によって、歴史学の客観性を批判しようとする姿勢に抵抗を持つ。すでに紹介した古厩もその一人である。歴史学に科学的な基盤を与えているように思える客観的な資料が支える視点を否定するかにみえる意見について反発することは当然ともいえる。

こうして孫歌が提示した見方について、相反する評価が生まれ、議論が盛んに行われるのを見るにつけ、明らかになることは、孫歌の自国に対する考察—中国人の戦争の感情と記憶のメカニズム—が比較的容易に論議の対象となったが、同様に指摘された日中間の「形にならない」緊張関係の方はそれほど注意を引くまでには至らなかったということである。つまり中国人の戦争の感情と記憶が深刻な問題となっている一方で、その問題の根底にある歴史認識の問題、近代化の中で生まれた優劣意識の存在に日本の良識ある知識人たちは気づくことなく、優劣意識を温存して、現状を追認するだけにとどまっているのである。この断絶は非常に大きく、乗り越えるべき大きな障害が存在していることは明らかである。

⁴⁵同上。

⁴⁶代田智明「書評 孫歌『アジアを語ることのジレンマ』」『現代中国とモダンティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011年 26頁。初出：『野草』71 2003年。

⁴⁷同注16 29頁。

⁴⁸小林敏明「ナショナリズムにおける感情の問題—孫歌『アジアを語ることのジレンマ』との対話の試み」『情況』第3期第5巻第3号 2004年 12頁。

一方、溝口の『中国の衝撃』をめぐる議論は、戦争問題の分析から近代中国を見直すというところに集中している。もちろん、近代中国を見なおすことは重要とされるが、戦争問題から中国の近代化考察に至る溝口の発想が見逃されている。

書評として、代田智明「溝口雄三著『中国の衝撃』」⁴⁹と子安宣邦が書いた二篇：①「現代中国の歴史的な弁証論—^{アポロジー}溝口雄三『方法としての中国』『中国の衝撃』を読む」②「中国の衝撃」⁵⁰があげられる。代田は、中国に内在的な近代過程、具体的には民間空間の拡大と統治理念—民は天賦の生存権をもつこと、統治者の民に対する配分が公正であること、すべての生存が調和的に保証されること—取り上げて、「評者としてはこれらの議論を支える、いくつかの論点に共鳴を覚えることも多い。（・・・）しかし、複雑な近現代中国の歴史過程を、本書の内在的発展の論理だけで語りきるには（・・・）分かりにくい部分や綻びが見えてしまうのは、やむを得ないのかもしれない」⁵¹と述べている。子安は主に中国の独自性に焦点を当てて、それは民主化問題をもつ中国の正当性を証明する弁証論となると批判する⁵²。

内在的な近代化過程それ自体は注目されている。しかし、「日中・知の共同体」活動において溝口が提示する日中間の「形にならない」緊張関係は見逃されている。つまり、日中戦争をめぐる両国の戦争認識は、いずれも欧米的な近代化を軸とする優劣の価値観に支配されているが、両国の人々はそれに気づいていないということである。

2 批判を越えた地平へ

溝口の方法が冷遇または反対される中で、孫歌はそのような傾向と逆の方向を進みながら、溝口の方法を発展させようと試みる。孫歌はこのように評価している。

⁴⁹『中国研究月報』59 2005年3月。

⁵⁰①『現代思想』40(14) 2012年11月、②『現代思想』40(17) 2012年12月。

⁵¹代田智明「溝口雄三著『中国の衝撃』」『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011年90頁。初出：『中国研究月報』59 2005年。

⁵²子安宣邦「現代中国の歴史的な弁証論—^{アポロジー}溝口雄三『方法としての中国』『中国の衝撃』を読む」『現代思想』40(14) 2012年。

これほど複雑な日本と世界の文脈の中で、国境を越えた言説空間において歴史の責任を背負うとしている日本の知識人である溝口氏がわれわれに提示したのは、イデオロギー上の結論に単純化できない複雑な問題であった。つまり、戦争責任の追及がそのことだけを論じて事足れりとする方法では埒があかない今、また歴史修正主義者が卑劣なやり方で歴史相対主義の原則を俗化し歴史を改竄しているいま、批判的知識人の責任とは結局のところ何であるのか？と。⁵³

溝口氏がこの課題（戦争の歴史を一般化することを指す一筆者による）を日中知識界の共同空間に提出した際に、彼は竹内がかつて遭遇した難題に出会っている。それはつまり、「日中友好」という誠意に満ちた専門家たちが不断に再生産している、相手方の流動的現実を本国の文脈の中で静的に「知識化」しようとするモデル操作であり、またこのモデル操作が不断に引き出す現実的効果である。このモデル操作のせいで、知識人が国境を越えた主体の次元で生きた歴史に入っていくことが妨げられている。⁵⁴

孫歌は溝口の発想に正面から向かい合い、肯定的に捉えた。それだけではなく、発想の理解を妨げるものについても言及した。膠着した状況を問題にすることで変革の契機を生み出すのではなく、その状況を知的に肯定されるべきものとして規定することで、その膠着状態が維持されていく基盤ができてしまうのである。その膠着状態はますます対話を難しいものとしていく。

溝口の戦争分析に対する孫歌と古厩の態度は正反対であることは明らかである。孫歌論文⁵⁵が古厩論文⁵⁶より少し早く掲載された。だから孫歌は古厩に対して発言してい

⁵³孫歌「近代史に向き合う倫理的責任が問われている」『アジアを語ることのジレンマ—— 知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 84頁。

⁵⁴同注23 89頁。

⁵⁵「近代史に向き合う倫理的責任が問われている——溝口論文への返答として——」『世界』689 2001年。

⁵⁶「「感情記憶」と「事実記録」を対立させてはならない——溝口雄三論文への反論とし

るのではないことがはっきり分かる。

欧米的な近代化を軸とする優劣価値観から戦争に関する認識を解放しようとする溝口の方法を、孫歌は理解した。それにとどまらず、彼女は溝口論の理解を阻害するもの、「静的に「知識化」しようとするモデル操作」の存在を指摘しており、そこには溝口の方法をより広く発展させようとする彼女の姿が伺えよう。

3 まとめ

本章では、戦争の感情と記憶をめぐって起った議論について検討してきた。それを通じて、以下のようなことが浮き彫りになったのではないかと思われる。

孫歌が提起した戦争の感情記憶問題は盛んに議論されたが、その問題提起を明確に理解し、問題を解決しようとしたのは溝口のみである。そして、孫歌は彼の解決方法を理解し、その実現を阻むものの存在を示しながら、解決へといたる方策をより広く認識させようと努めた。

第6章 皮膚感覚の問題化について

—孫歌と代田智明の比較分析—

この章では、孫歌と代田智明の感情記憶の分析を比較し、孫歌による感情と記憶分析の補うものとして代田を取り上げる。孫歌の戦争の感情記憶という問題提起によってどのような波紋が引き起こされたか、そうした問題を代田がどのように展開していったかに着目したい。具体的には、孫歌の日中戦争の感情と記憶をめぐる分析を、代田の感情記憶をめぐる「癒し」の視点と比較して考察を試みる。

代田が、孫歌の強調する中国人の戦争記憶の記号化という指摘を高く評価する一方で、感情記憶を事実記録と単純に対立させ、感情記憶が無視されているという指摘だけで済ませている孫歌の姿勢には代田としては同意できないということを確認する。両氏の比較を通して、戦争の感情記憶という視点により新たな地平が切り開かれていく中で、またそこから異なる観点が生じていく状況を示していく。そうした考察に基づいて、代田は感情記憶の分析の他の可能性を示し、その分析をさらに一層掘り下げ深めたということを明らかにしたい。

1 戦争の感情と記憶をめぐって

孫歌は日中戦争の感情と記憶の分析を通じて、日常経験に内在する構造を把握するという考え方を強調したことを前章で検討した。孫歌は「皮膚感覚によって問題を掘み取る」¹ことを重要視する。彼女の戦争の感情記憶分析は、自らの皮膚感覚を問題化するという考えを提示したものである。

代田智明²は、1998年に北京で行われた第二回の「日中・知の共同体」活動、シン

¹溝口雄三・孫歌対談「歴史に入る方法—知の共同空間を求めて」孫歌著『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 215頁。

²（1951年—）中国文学研究者で、1976年東大文学部中国文学科卒、78年同大学院修士課程修了、そして1993年に東大教養学部の助教授となり、1998年に同大学の総

ポジウム「近代とナショナリズム」に参加した。そして、翌年の 1999 年に「日中・知の共同体」シンポジウムに参加して」（『中国研究月報』53(2) 1999 年）を書いている。2000 年の第四回の活動は東京で行われた。そのテーマは「アジア認識と戦後責任」、「日中間における報道ギャップ」である。活動の一環として、酒井直樹・高橋哲哉・孫歌・戴錦華四人の学者による座談会「戦争の感情記憶の壁どう乗り越えるか」（『世界』2000 年 11 月号）が開かれた。代田は、この座談会を聞いて最後にいくつかの疑義を呈した。こうした経緯を後に「感情としての「加害の記憶」（『中国研究月報』54（11） 2000 年）として発表している。

戦争記憶の問題といえば、孫歌の「日中戦争—感情と記憶の構図」（『世界』2000 年 4 月号）において提起された。それに応える形で溝口が「日中間に知の共同空間を創るために」（『世界』2000 年 9 月号）を書いている。孫と溝口は主に感情記憶と歴史学の実証的客観性をめぐって議論を展開している。代田智明の「感情としての「加害の記憶」」は二人の議論に対する応えである。この論文において、代田は孫歌の戦争記憶という問題提起に対して、単なる評価にとどまらず、独自の視点で日中戦争をめぐる感情と記憶を癒しの観点からとらえていこうとする。

2 戦争の感情記憶によって開かれた共同空間

「日中・知の共同体」活動の成果の一つとなる孫歌の『アジアを語ることのジレンマ— 知の共同空間を求めて』（岩波書店 2002 年）に対して、代田智明は「孫歌『アジアを語ることのジレンマ』との対話」³を書いている。本節では、代田の分析は、戦争の感情記憶をめぐって孫歌の残した課題を前へ進めようとする試みであることを明らかにする。

合文化研究科教授になっている。主な著書として、『魯迅を読み解く 謎と不思議の小説 10 篇』（東京大学出版会 2006 年）、『現代中国とモダニティ—蝙蝠のポレミク』（三重大学出版会 2011 年）等があげられる。

³『野草』71 2003 年。後に『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミク』三重大学出版会 2011 年に所収。

2-1 戦争の感情記憶に対する代田智明の反応

代田の戴錦華に対する疑義と孫歌に対する応えを比較して、彼の感情記憶に対する態度を考察する。

酒井直樹・高橋哲哉・孫歌・戴錦華四人の学者による座談会「戦争の感情記憶の壁 どう乗り越えるか」の中で発言者の一人である戴錦華の以下のような発言に対して代田は疑義を呈する。

戴：いったん南京大虐殺あるいは 30 万という死者の数字について、いかなるやり方にしろ疑問を挟んだのなら、ほとんど例外なく相当数の中国人（私を含めて）の怒りの感情を引き起こすことだろう。私たちはそれを、ある種の復讐の要求と名づけてよいかもしれない。

代田：「大虐殺」の事実は認めるが、数字に対しては保留したいこと、被害の言説について、ナショナルな感情に捕らわれることなく、より開かれた言説を期待したい。

戴：毛沢東も言ったように、敵を利する発言は味方にとって不利だ。⁴

この対話に関して代田は次のように述べている。

このやり取りに、私は何かすっきりしないわだかまりを残さざるを得なかった。なぜなら、「いかなるやり方にしろ」あるテーゼを踏み絵にして、復讐を語ることは、対話の拒絶に等しいからだ。そしてそれを確認しようとしたのに、

⁴この内容は、代田智明の「感情としての「加害の記憶」」（『中国研究月報』54（11）2000 年）に基づいた整理したものである。質疑の部分だから、雑誌に発表されている座談会報告には載っていない。

別の踏み絵を踏まされたという「被害」の意識に、私が捕らわれたからである。

5

戦争責任を語り合う際に、こうした踏み絵を突きつけられることはよくあることである。(中略) 私が気になったのは、もう一歩手前のことであった。あのような不愉快で落ち着かない、わだかまりを感じてしまう場に、「被害」の意識にとどまることなく自らその場を引き受けることは、どのようにして可能になるか、ということである。糾弾と贖罪という関係性の中で、贖罪の場を引き受けるのは楽しいことではない。だからそれを積極的に引き受けるには、その行為の意義について、論理的構想力を突き詰めることが、思想や立場を超えて、やはり必要だと私には思われたのだ。⁶

戴の対話の姿勢に代田は不満を感じ、それは「対話の拒絶に等しい」と批判している。それよりむしろ「不愉快で落ち着かない、わだかまりを感じてしまう場に、「被害」の意識にとどまることなく自らその場を引き受けること」を考えるべきであると代田は自らの見解を述べる。

戴と代田との対話および代田の批判が示しているのは、日中戦争をめぐる二人のやり取りがかみ合わず、更なる展開が不可能な状態に陥ったことであると思う。これは日中戦争に関して議論する際に常に起こる問題であると言えよう。こうした状況の中で、孫歌の戦争の感情記憶論は、日本人の学者に対する糾弾と贖罪という関係を抜け出し、開かれた空間を提供した。前章で述べたように「日中戦争—感情と記憶の構図」において、孫歌は中国人の戦争記憶が象徴化によって硬直していることを剔抉し、最後に、中国人の戦争をめぐる「感情の記憶イコール被害者の怒り」⁷という「一個の記号に単純化され」⁸ることを止めて「感情の記憶は必ずや複雑な歴史の内容を担わなけ

⁵代田智明「感情としての「加害の記憶」」、『中国研究月報』54(11) 2000年 54頁。

⁶同上。

⁷孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」、『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 56頁。

⁸同上。

ればならない」⁹と主張している。これに対して、代田は書評「孫歌『アジアを語ることのジレンマ』」においてこのように評価している。

中国人の「感情記憶」が「被害者の怒り」だと考えるのを止めたとき、我われ日本人は、「不要な圧迫感から解放されて、中国人の思惟と感情を「思想資源」とすることに参画できやすくなるだろうから。」¹⁰

代田は、戴の「「被害」の意識にとどまる」ことに不満を表す一方で、孫歌の主張に対しては「不要な圧迫感から解放され」と述べている。代田は孫歌による自国の戦争の感情記憶に対する批判に賛同していると考えられる。そして、さらに中国人の戦争の感情と記憶を「思想資源とすることに参画できやすくなる」と述べていることから、代田の今後の方向性が読み取れる。つまり、孫歌の残した課題を前へ推進することである。具体的には、加害と被害の関係を多様化することを通じて、戦争の感情記憶イコール被害者の記憶のみといった構図を乗り越えようとする試みである。

2-2 加害と被害の関係の多層化

「日中戦争—感情と記憶の構図」の最後で孫歌は「感情の記憶は必ずや複雑な歴史の内容を担わなければならない」と述べ、今後の課題にした。代田は文学的テキストの分析を通じて、被害者には加害的意識と被害的意識もあることを示唆し、被害者の記憶のみといった単純化した戦争記憶から抜け出そうと試みる。

代田は「感情としての「加害の記憶」」において被害という立場の複雑さを、丁玲¹¹

⁹同上。

¹⁰代田智明「孫歌『アジアを語ることのジレンマ』との対話」『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011年 25-26頁。

¹¹丁玲（1904-1986）女性小説家・政治家。中国共産党にも所属した左翼系の小説家として知られ、女性運動にも幅広く従事した。1939年に西北戦地服務団を率いて慰問する際に、抗日戦争の中で女性が大きな犠牲を蒙っていることを見聞して、それを素

の小説に対する分析を通じて明らかにしている。2003年に書いた「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」¹²の中で加害と被害の関係に関する探索をさらに深める。まず丁玲の小説『新しい信念』の粗筋を紹介しよう。

中国西北にある村、西柳村が日本軍に襲撃される。老女の長男陳新漢は無事逃げるが、家族と離散する。一人息子の同官と次女銀姑と老母の安否が確認できない。五日後、遊撃隊が村を取り戻したと知らせが入り、村に帰ってくる。陳新漢一家の大半は無事戻るが、息子と次女と老母の姿が見えない。後で息子の遺体が発見され、既に葬られていた。老母と次女が行方不明である。翌朝、重傷を負った老母が家の前で発見される。日本軍に囚われたが、奇跡的に生き延びる。老母は言葉も意識も失っていたが、数日後に回復する。一緒にいた十三歳の孫娘銀姑は日本軍の慰さみものにさせられた後、隅にうち捨てられるのを祖母はその目を見た。老母はいなくなった孫娘銀姑の遭遇した事件をあまりにあからさまな言葉で家族に話し始める。それを聞いた上の孫娘金姑は恐怖におびえた顔をする。しかし老母は話すことをやめない。むしろこうした反応に満足を感じ、より残酷な話を続けていく。最後、老母は婦人会という組織に加入し、たくさんの見知らぬ人の前で講演して、「おら、日本軍にひでえ眼にあった婆だ。これ、見なせえ……」と自らの体験をあらわに説き聞かせる¹³。

日本軍に酷使された陳おばあさんが被害者であることは言うまでもない。しかし代田は陳おばあさんに被害と正反対の加害的意識もあると指摘する。

現場にいながら孫たちを救えなかった「加害的意識」も含まれており、こうした恫喝のような、感情的語りを生み出しているようにも思える。¹⁴

材にして『新しい信念』、『霞村にいた時』などの作品を創作した。

¹²『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011年；初出：『現代中国研究』12 2003年。

¹³ 岡崎俊夫訳『現代中国文学全集第九巻 丁玲篇』河出書房 1955年 参照。

¹⁴「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011年 56頁。

代田において「加害の場合とは、ある事件の出来に対して責任を感じ、恥辱や罪悪感を抱くこと、強い後ろめたさを感じて、自分を許せないような感情を抱くことである」¹⁵。代田の「加害的意識」は、戦争による被害とともに生ずる二次的なものである。一方、性的暴力による被害者の周囲から疎外されたり糾弾されたり、いわれのない謗りを受けるようなことも含めて被害的な場合と定義する。

加害と被害をただ戦争だけに限定するのではなく、生きていく人間として受ける精神的な苦しみも含めて代田は捉える。これによって戦争による加害と被害の二項対立の関係を打開して、戦争による被害者たちが日常生活に戻って生きていこうとするときに、生ずる二次的問題—加害的意識と被害的意識—を取り入れて多層化を試みた。代田のこの加害と被害の関係を多層化しようとする行為は、このようなことを示した。加害と被害に関する言説は、ナショナルな感情だけでなく、人間が生きていくために直面しなければならない葛藤と苦悩でもある。こうして、加害と被害の関係がより広く開かれていくことになった。

3 「癒し」という視点

「日中・知の共同体」活動は日中間の共同の立場を目指して行われるが、活動進行中に様々な困難に遭遇することもある。そのときは方針を変えざるを得なくなり、調整が必要となる。それについて、活動の発起人である孫歌は以下のように述べている。

この運動は、始まるや否や、私が当初考えていたような素朴な目標に向かうものとは凡そかけ離れたものだということを、思い知らされました。つまり、この運動は、ある共同の知の立場を建立するといった目標に向かうよりは、運動の矛盾に満ちたプロセスそれ自体がはるかに重要なのだ、と。¹⁶

¹⁵代田智明「癒しの文学としての鲁迅」『中国研究月報』66(1) 2012年 36頁。

¹⁶溝口雄三・孫歌対談「歴史に入る方法—知の共同空間を求めて」孫歌著『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 204頁。初出：「関

溝口も「「共同」は齟齬を齟齬として認め合う共同である（・・・）日中間の諸問題は、どのように齟齬しあっているか、を知ることからまず始まる」¹⁷と孫歌と同じ意味のことを述べている。実際に、両氏も両国間の緊張関係を分析したことを前章で述べた。最後まで「日中・知の共同体」活動は、両国間の断絶やズレを突出させる方向に向かって進められた。しかし代田は断絶を突出させるよりつなぐほうに力を注ぐのである。

3-1 被害と加害をつなごうとする発想—「癒し」の視点

代田は丁玲の小説「新しい信念」には「強い「癒し」への渴望が暗示されていると言えるのである」¹⁸と指摘する。具体的な例として、「新しい信念」における被害体験をあまりにあらわに語る陳おばあさんの語りを示す。

あの子は本当に死んでしまった。自分で舌を噛み切ったのじゃない。下半身は血だまりで犯され、その血は、子供を産んだ時のようじゃった。胸にも血があり、それは腰に流れ、肩に流れた。奴らは、あの子の乳首を噛み切った。その乳首はあんたの程もないんだ。¹⁹

このほかに、陳おばあさんの正式な大会で「私は日本皇軍に蹂躪された年寄りです」と語った台詞を取り上げて、これらは被害者の「癒し」へのやみがたい欲求のように映る」²⁰と述べている。なぜ「癒し」に繋がるのかについてこのように分析している。

於“知識共同体”『開放時代』（広州）2001年11月号。

¹⁷溝口雄三「新しい日中関係へ—個人レベルで『知の共同空間を』」、『東京新聞』夕刊 中日新聞東京本社 2001年3月27日。

¹⁸代田智明「感情としての「加害の記憶」」『中国研究月報』54 2000年 57頁。

¹⁹同注18 56頁。

²⁰同上。

「新しい信念」において、「語ること」が被害者に与えた変化であった。「語ること」とは、単なる事実や体験の伝達なのではない。小説のおばあさんは、出来事の直後に、身内を含めた近しい人々に語り始めた。そこに彼女の受けた、恐怖やトラウマがどう代償されていくのか、が語られているのでもあった。²¹

戦争によって被害を受けた陳おばあさんは自らの被害体験を語ることに伴って癒されることに繋がると代田は述べたいと思われる。癒しという行為は双方があって初めて成立するのは言うまでもない。一方は語る側であれば、もう一方は聞く側である。代田は文学的テクスト分析によって語る側を立てた。そしてもう一方の聞く側を立て、癒しの過程が成り立つ可能性を探る。その探索は日本人の歴史研究者の現地調査を通して行なわれた。

孫歌と溝口はともに戦争の感情記憶をめぐる日中両国間の溝を鮮明にし、それを両国の人々に認識させようとすることに對して、代田は癒しの行為を成り立たせて、加害と被害を媒介する橋を架けようとする。こうして戦争の感情記憶をめぐる展開は二つの方向に分かれた。

3－2 聞き手の確立と歴史学への批判

代田は、高橋哲哉の『戦後責任論』（講談社 1999 年）を取り上げ、「彼は日本が戦後一貫して戦争責任を回避してきた以上、戦後責任があると述べる。彼は責任ということばを「応答可能性」と読み替えて、責任を問う人々に対するリスポンスと捉えている。その応答の責務は、日本国籍を有した人々、特に民族的にマジョリティーである人々に主にかかっていると主張する。高橋の議論は論理的で、外部に対してかなり開かれており、その点は説得力があるといえるだろう」²²と述べて高橋に同意してい

²¹「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」、『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミーク』三重大学出版会 2011 年 58 頁。

²²代田智明「感情としての「加害の記憶」」『中国研究月報』54 2000 年 55 頁。

る。小説『新しい信念』において被害者には強い「癒し」への渴望があると代田は指摘し、そうした渴望に応答しようと試みる。そこで高橋の「応答可能性」を取り上げ、論理的基盤とする。

代田は文学的テキストの分析に歴史学の実地調査を取り入れて加害側が被害側へ応答する可能性を提示しようとする。具体的には、石田米子の調査を取り上げて展開する。石田米子は、長年、中国山西省で日本軍による性暴力被害について聞き取り調査に携わっている。その一部を 2002 年 10 月に「中国における日本軍性暴力被害の調査・記録に取りくんで―被害女性たちの「出口気」(心にわだかまるものを吐き出す)の意味を考える―」²³という題で、日本現代中国学会全国大会で報告をした。

代田はなぜ実地調査を取り入れたのかということ、それは歴史学の実証的客観性と感情記憶の関係を説明するためであると考えられる。それは孫歌の「日中戦争―感情と記憶の構図」における歴史学の客観性によって感情記憶を排除し無視する批判への応えとなる。

代田は石田の報告の中で日本人調査者の聞き手が如何に「癒し」の過程に参加できるのか、という点にとりわけ注目している。

「最初はほとんどの方が[……]気分が悪くなるとか、吐いてしまうとか、失神してしまうとか、震えが止まらなくなるとか、そういうことで語れない。[……]具体的な被害のことになる[と]語れなくなってしまう」(石田米子報告からの引用。以下も同様―筆者による)。そういう状態であったが、「女性たちは裁判をしたい、「出口気(心にわだかまるものを吐き出す)」しなければ死んでも死にきれない、と言われたのです」。そして「聞き取りの回を重ねることによって語り方も変化していきます。信頼関係ができるからもう震えたりしないで語れる。[……]そうしてこころの底からあふれ出る涙に触れることにもなります」。「自分の身に起こったことが何であったのかということを、彼女の被害を受け止めて共に怒ったりする人がいることを知る中で認識していくのです」。「忘れた過去が物語化されることによって彼女はその過去にはっきり向かい合い、少

²³後に『中国女性史研究』11号 2002年 に掲載されている。

しずつ癒されていくのですね」。²⁴

「何のために聞こうとするのかそれ自体も、自分の中で変わっていくわけです。双方の関係の変化の中で、聞き手と語り手の間で聞いたりする中身が、物語、向き合うべき過去として共有されていきます」。「聞き取りというのは、その人自身の心身の消しがたい体験に対する自分の認識とか感情とかを解放していく過程になるかどうか、そこにかかっていると思えてきたわけです」。これが、先に述べた被害者の癒しに参加できる可能性ということに他ならない。²⁵

聞き取り調査による治癒の役割を認めることを通じて、代田は歴史学が感情記憶を排除してもいいし、無視してもいいということを言おうとしていると推測したい。むしろ被害者のトラウマを癒す役割を果たしていることを最も強調したいのだと思う。これは孫歌による「文献資料の考証に満足して、人々の感情記憶を完全に無視したり、果てには敵視したりするのだ。このような歴史学の絶対的な合法性はどこから来るのだろうか？」²⁶という歴史学の実証性への強烈な批判に対する反論となることは明らかである。一方、代田は文献実証主義を批判する。

事実を同一性の実証的確認としてのみ扱うことは、何かを欠落、隠蔽することにはならないだろうか。それこそ性的暴力の被害者たちの「証言」が、場や時間や聞き手との関係に応じて変容する、時に劇的に変化すること、を、文献実証主義の立場から、未熟な史料だと決め付けることは危険なことだろう。また、聞き取り調査を通して、一般的で、抽象的事実が同定されるに至るプロセスそれ自体も、活き活きとした歴史的資料そのものではないだろうか。語り手と聞き手の出会いや緊

²⁴「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」、『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミック』三重大学出版会 2011年 59頁。

²⁵同注24 63頁。

²⁶孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」、『アジアを語ることのジレンマ— 知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 52頁。

迫したやり取り、不愉快な沈黙や糾弾という「関係性」それ自体が、アカデミズムの関心の対象から外されるべきではないだろう。出来事についての一人ひとりの記憶は、歴史を構成するために奉仕する材料なのではない。両者は相互に差異化しつつ、相互に浸透する。歴史的記述の深層に累積された、個人の記憶という具体性を、学問的に対象化し、救いあげる作業は、匿名化した「歴史学」を人間化する働きをもつはずだ。²⁷

小説における被害者の「語ること」から拡がって、聞き取り調査における証言に及び、その有効性を示す。聞き取り調査の過程における感情と記憶を重視していること、むしろ被害者のトラウマを癒す効果があることを代田は提示した。それを通じて、文献史料の独占的な位置を批判している。これは、孫歌による「感情の記憶の喪失は、歴史から緊張感と複雑性を奪い、これを統計学で代替できるような死んだ知識に変えてしまう」²⁸といった主張と異なるものではない。どちらも人間性の複雑さを重要視し人間という視点を忘れない「歴史学」を求めている。ただ、孫歌に比べれば、代田は歴史学において文献実証と聞き取り調査というように細かく分けて批判を行なった。

目標は同じであるが、たどるルートはそうではない。孫歌と溝口は感情記憶を救い上げるために、それと対立する歴史学の実証性を強く批判した。それに対して代田は感情記憶を完全に無視することなく、逆に重視していることを強調する。それを通して、文献史料による口述資料に対する抑圧を批判した。孫歌と溝口は歴史学の文献実証と感情記憶を対立させる立場を取ったが、それと代田の立場は大いに異なるのは明らかである。代田は感情記憶を無視していないことを提示すると同時に、歴史学の文献実証主義をも批判した。代田が孫歌の批判に同意できないところがあることは一目瞭然である。同時に、文献実証主義に対していずれも批判的であることも明らかである。

²⁷「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」、『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミク』三重大学出版会 2011年 追記 67頁。

²⁸孫歌「日中戦争—感情と記憶の構図」、『アジアを語ることのジレンマ— 知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年 53頁。

戦争記憶をめぐる日中間の様々なズレや問題点を突出させて、そこから共同を求めようとする孫歌と溝口の動きと違って、代田は日中間をつなぐことに力点を置いてきた。これは明らかに孫歌と反対の方向を歩んでいる。しかし孫歌が目指すことと背くことなく、代田は「癒し」という視点をもって、感情記憶の分析の他の可能性を示し、その分析をさらに一層掘り下げ深めたのである。

4 まとめ

癒しの過程における聞き手つまり加害の主体の成立に代田は紙面を割いて検討してきた²⁹。しかし、語る側つまり被害の主体について戦争体験者だけを取り上げて分析しているが、戦争体験を持たない者を含む被害の主体について言及せず、課題として残した。そうした姿勢は、戦争体験者がだんだんいなくなっていき、戦争体験を持たない者が多数を占める現状を十分考慮したものであるとはいい難いであろう。おそらく、これは中国側の研究者がより真剣に取り組むべき作業でもあろう。

「日中・知の共同体」活動を通じて、戦争の感情記憶は注目される話題となり、日中両国の学界に刺激をもたらした。生き活きとした人間の感情と記憶を如何に学問的に扱うのか、を示した例でもある。代田は個人の感情記憶を癒しの観点から多層化していくことを考えたのに対して、孫歌は集団的感情記憶を活性化して、新たなものとしていくことを考えた。

²⁹ 「聞き手が、尊大な特権を持った主体を拒絶し、聞き取りが共同作業として成り立つこと。それは聞き手が加害者側の共同体の一員であるからではないだろうか」（「語らぬこと・語ること・聞き取ること—加害と被害との間を媒介するための用意について」、『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミック』三重大学出版会 2011年 64頁）と代田は明言している。

おわりに

本論文では、溝口雄三の方法論について、1970年代、1980年代、1990年代を通じて検討することを通して、その方法が構図による分析を有力な手段とするものであることを確認した。具体的には、批判対象、評価した対象および対象に対する活動などを取り上げ、いかなる形で処理されていくかを追求しながら、論証につとめた。また、日中両国での受容され方の違いについても考察した。こうした研究を通じて、日中での溝口の受容の問題点を明らかにした。

以下では、各章の結論を振り返りながら、さらなる展開を試みてみたい。

第1章では、1970年代の溝口の批判意識—主体意識の欠如—の考察を通して、安藤彦太郎と六角恒廣との見解の違いを手がかりに、溝口の批判が外国および外国語に関する図式的な認識に対して行なわれていることを確認した。その図式は二つある。一つは、外国イコール英米独仏、言い換えれば主導権を握っている強国を考えるものである。それに伴って外国語といえ、それらの強国の言語を指す。もう一つは、戦後における中国語の再建に内在する構図、すなわち、戦前の植民地化教育への反省からアジアの新理念を模索するというプロセスである。こうした図式は、それぞれ異なるように見えるが、実は共通点がある。どちらも優位なるもの、もしくは強者の力量に従って、無自覚的に判断していくという傾向がある。溝口の主体意識の欠如とは、そうしたことに対する批判として述べられていることを明らかとした。

第2章では、1980年代の批判意識—新中国と魯迅に関する図式的な言説への批判—を考察した。つまり、新中国を論じる際には、日本の近代の価値とヨーロッパ近代の価値にかかわる意識が問われることとなり、そこで、魯迅を通して、新しいアジア的主体の確定、変革などの言説が近代中国研究の前提として、多くの研究者たちから共有されることとなった。そうした概念モデル操作がなかば機械的に行われていく事態を、溝口は厳しく批判した。その批判は、竹内好が打ち立てた魯迅像がそのコンテクストへの考察なしに、図式的な理解をよって受け入れられていく状況に対して行なわれたのである。

第3章では、中国思想史において「公」思想が前近代から近代まで継承された過程の分析を通して、溝口が中国社会に変革をもたらす原動力を示そうとした点に注目した。そこに中国の独自性があると溝口は考え、近代中国をそうした視点に立って研究

すべきであると強調している。そうしたアプローチを通じて彼は、欧米型の近代化を早く実現したことに優越感を覚えることと、中国革命の成功のうちに欧米型の近代化を超克するような価値を求めることの二点を批判しようとした。しかし、そうした批判意識は受け入れられなかった。受け入れられなかった原因は二つある。一つは、溝口が主張する中国の独自性が、生得性・原初性を重んじる文化本質主義とあたかも同じ性質のもののようにみなされ、中国の独自性イコール親中国的といった図式に回収されたからである。もう一つは、コーエンの『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の出版との関連を手がかりに、西洋中心主義批判的中国研究イコール親中国的といった単純な理解によって、コーエンと同じ性質のもののように受け取られてしまったからである。

第4章では、溝口が行った日本人の戦争の感情記憶の分析と孫歌の提示した中国人の戦争の感情記憶の分析過程をたどり、日常経験に内在する記憶構造の特徴を明らかにした。その構造の固定性、限界性を乗り越えようとする溝口の試みを探求する中で、溝口が相互の文脈を理解することで新たな枠組みを構築していこうとすることが分かった。考察した結果、文脈の理解とは、他者の痛みを理解する共感能力の創出を前提としていることが分かった。被害者的な感情を超えて、共感力という感情記憶の積極的な部分を救出し、膠着した状況を乗り越えようとする溝口の試みを浮き彫りにした。そうした過程を通じて、戦争の感情記憶分析が溝口の研究において占める位置を確定した。

第5章では、溝口の戦争の記憶に関する構図の分析を含め、戦争の感情記憶によって引き起こされた論争について論じ、孫歌と溝口が共有する志向を明らかにした。

第6章では、代田智明との比較分析を通じて、溝口と孫歌による感情記憶と事実記録を対立させた構図の分析によって開かれた地平およびそれが孕む問題点を示した。

以上の流れを踏まえ、明らかになってきたことをこれから述べていくこととする。

溝口は、構図による分析を有効的に使って批判を行なってきた。第1章で示したように、外国を主導権を握っている強国としてとらえるような図式はそうであるし、第2章で述べたように、竹内的な鲁迅理解が支配的になり、その鲁迅像が採用すべき中国的な見方を十分な考慮を伴わずに決定するようになってきたとき、そうした解釈を批判した。構図を明示することで、批判をより説得力のあるものにすることができたとと思われる。その方法は後期においても確認することができる。

晩年の活動「日中・知の共同体」において孫歌によって提起された感情記憶について、溝口は、紙面を割いて詳しく検討した。戦争の感情記憶が被害者の記憶のみによって構成されようとする状況の分析を通じて、そうした構図成立の原因を示す一方で、それを乗り越える方策も提示しようとする。その原因は、欧米の近代を軸とした歴史認識にあるとされる。構図を乗り越えるルートとして、そうした歴史認識に依拠しない方法を模索した。つまり、他者の痛みへの共感能力である。共感能力をもって、異世界の中に入ることを通じて、欧米の近代を基準とした歴史認識から解放しようとする。

上述したことを踏まえれば、構図を乗り越えようとする試みは、溝口の研究において一貫して追求されるものであるということが分かる。感情記憶の分析は、そのような実践として、これまでの溝口の探求と通底している。

このように溝口は構図の分析によって、問題点を的確に認識し、そこから有効的な批判を展開してきた。しかし同時にその構図のために図式化、単純化をも行なってきたのではないだろうか。

溝口が展開した竹内批判にしても、それは竹内本人に向けられたものというよりは、竹内の図式を安易に繰り返す研究者たちに向けられるべきものである。ただそれをあたかも竹内への批判のように作り上げてしまうところに、疑問を抱かざるを得ない。少なくとも、そうした区別を明確にして書こうとしていない姿勢は問題となろう。

尾上評価にしても、その全体をとらえてというよりは、主として自らの批判的な観点を支えるような方向からなされているようなところがある。つまり、批判作業の中で、その批判すべき境界線が同時に作成されている。尾上の文学者としての魯迅に対する読み方は、むしろ竹内好を引き継ぐところが多い。「竹内好氏の読み方と基本的には一致するのではないかと思う」¹と尾上は自らの読解について述懐している。だから尾上を竹内本人と対立させるのは、無理がないわけではない。やはり、魯迅を通して、近代的価値観の検討、転換、自己の意識の変革や、「新」の地場に立つべきアジア的主体の索定などの言説をモデル化する研究者たちとの関係の中で、尾上の『魯迅私論』が取り上げられるべきである。

また溝口は、近代や欧米のなどの語句を厳密な定義付けを施すことなく使っている。考えてみれば、欧米の近代といっても、国によってそれぞれ異なる道筋をたどってき

¹尾上兼英『魯迅私論』汲古書院 1988年 133頁。

たのである。しかし、彼は区別せず、論理を展開している。欧米主義の反転として、安易に中国主導の道が唱えられる事態を批判するのは確かに重要なことである。しかし、その際に批判の対象として「欧米」という均質的な神話的な存在を想定することは問題となるのではないだろうか。このように溝口は批判を明確化するために、その論理の中に戦略的単純化を導入しているかに思えるところがある。

溝口がこうした戦略的論理を駆使しながら、展開を進めていく後期の議論の中で登場してくる大事な概念として「癒し」がある。その位置づけについて確認しておくことが必要であると思われる。

戦争の感情と記憶の問題を分析し解決しようとする視点からすれば、それに関する営為として「癒し」が重要な役割を果たすことになる。確かに、この概念は、明確な形で定義されている訳でもないし、「日中・知の共同体」活動の中で唐突に出現したかに見えるし、その概念の実効性についても確固たる保証はないかのような印象を与えるものである。ただそうした不確定性のもとに退けるには、可能性の期待があまりに大きいように思われる。

第6章で述べたように、代田智明は、小説分析と聞き取り調査を融合させて、被害者の感情を癒すことは可能であることを示した。戦争の被害者と加害側の共同体の一員として一聞き取り調査者一の際に「癒し」の視点を構築しようとした。代田は、個人の位相から被害者一人一人の感情記憶が癒され、新たな主体が立ち上がる過程を示そうとした。それに対して孫歌と溝口は、個人に限定せず、個人を超えた地平から、戦争に関する知の構築の道を模索しようとする。このレベルを異にするふたつの分析は、新たな主体の覚醒を契機として重視する点で通底するところがある。主体の変革にはどちらも少なからぬ貢献をはたすことになる。

ただそうした変革は怠惰な契機から生まれる訳ではない。そうした変化を促すような条件、またそれを阻害するような障害を考察しなければいけない。第4章で述べている通り、孫歌は感情記憶の問題を提起し、溝口はそれを深める中で、問題点を指摘した。戦争の感情記憶が被害者の怒り（日本の場合は被害者の奮闘）から構成されるように、一個の記号に単純化されていることである。さらに、その原因も究明された。感情記憶の記号化の背後には、先進国日本と後進国中国といった二項対立図式的な歴史認識の存在があるとされる。解決口として、研究主体が、自己と異なる世界の中に入る共感能力を高めなければならないとされる。共感能力の高まりとともに、自己も

これまで己を縛ってきた障害を意識化し、それを乗り越えようと努めるようになる。その乗り越えは、個人のレベルを超え、共同体全体のあり方も変える可能性を秘めている。桎梏となっている優越感の克服という大きな目標を、「癒し」という概念を導入することで、微細なレベルでの変革の地平が開かれていくことが期待される。

本論文では、溝口の後期の実践を中心に考察を行った。その実践はこれまで行ってきた溝口の探求と一貫することを確認し、位置づけを確定した。しかし本論文は、後期の活動を中心に展開され、溝口の活動全体を俯瞰したものではなく、彼の方法の全体像を把握したものとは言えない。

「日中・知の共同体」における戦争の感情と記憶の分析を通じて、欧米の近代化という枠を乗り越える方法の可能性を確認した。すなわち、他者の痛みへの共感能力をもって、自己の属するものとは異なる世界の中に入ろうとすることである。それは溝口が強調してきた主体意識の変革につながると思われる。この方法によって、これまで停滞していた異文化間の相互理解は深まるであろう。しかし、その方法が従来の先進国日本と後進国中国といった二項対立図式を乗り越えて、どのような新たな歴史認識へとつながっていくのか、について本論文では十分な形で検討するには至っていない。それは今後の課題として残したい。

中国は、日本および他の東アジア諸国をほとんど意識することなく、発展にむかって突き進み、対話を度外視するという面がある。日中間には不均衡な関係が存在する。そのように対話が阻害されているのは、中国側だけの問題ではない。日本が欧米的な枠組みを無自覚に、なかば機械的にあてはめ、中国に劣等国という位置づけを与えてきたことなども関係している。西欧的な枠組みがすべてを判断する万能の尺度ではないのである。

そうした状況で、本当の意味での対話が可能となるためには、効果のあやしい西欧的な尺度を捨て、あらたな基準をもとめようとする必要があると思われる。そうした試みにおいて、本当の意味での他者認識、文脈の共同ということが可能となり、これまで西欧的尺度でのみ考えられてきた近代化にあらたな考察の可能性が生まれていく。こうした対話作業が目指されるのも、西欧批判が安易な中国覇権主義に陥ることを避けようとするためである。

付録 溝口雄三年譜¹

一九三二年七月 日本国愛知県名古屋市生
一九五六年三月 東京大学文学部中国文学科卒業
一九六七年三月 名古屋大学大学院人文科学研究科修士課程卒業
一九六七年四月—一九六九年三月 東京大学文学部中国文学科助手
一九六九年四月—一九七五年三月 埼玉大学教養部助教授
一九七五年四月—一九七八年三月 同上教授
一九七八年四月—一九八一年三月 一橋大学社会学部教授
一九八一年四月—一九八三年三月 東京大学文学部教授
一九九三年四月—二〇〇三年三月 大東文化大学教授
一九六九年—一九八三年 弘前大学、東北大学、新潟大学、千葉大学、東京女子大学、日本女子大学、和光大学、横浜市立大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、徳島大学、山口大学、九州大学に出講
一九八一年 文学博士学位取得
一九八九年—一九九三年 台湾清華大学客員教授、北京日本学研究中心主任、米国 CALIFORNIA (UCLA) 大学客員教授
一九八一年—二〇〇一年 東京大学中国学会理事長・中国社会文化学会理事・評議員、東方学会評議員・編集委員、日本中国学会評議員・専門委員
一九九一年—一九九五年 文部省学術審議会委員
一九九三年 東京大学名誉教授
一九九四年— 国際儒学連合会副理事長
一九九六年 中国社会科学院（大学院）名誉教授
二〇〇〇年— 成均館大学東亜研究所理事
二〇〇一年—二〇〇二年 米国 HARVARD 大学客員研究員
二〇一〇年七月十三日 永眠（享年七十八歳）

¹年譜は、「溝口雄三教授略年譜」（『大東文化大学漢学会誌』42 2003 年）をもとに、「溝口雄三著作目録」（陳光興・孫歌・劉雅芳編『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社 2010 年）を参考して作成したものである。

【学会誌編集】

- 『亜文』主編一九九六年十一月以降（北京・中国社会科学出版社）
- 『世界漢学』編集委員一九九八年四月以降（北京・世界漢学雑誌社）
- 『中国学術』学術委員二〇〇〇年一月以降（北京・商務印書館）
- 『東亜文化研究』学術委員二〇〇一年十二月以降（北京・東方出版社）
- 『亜細亜公論』顧問一九九八年七月以降（ソウル・栗谷文化院）
- 『East Asian Studies』顧問 二〇〇〇年十一月以降（ソウル・成均館大学東亜研究所）

【著書・編著】（日本語）

- 『佐藤一斎・大塩中斎』（日本思想大系四六） 岩波書店（共著）一九八〇年五月二十三日
- 『中国前近代思想の屈折と展開』 東京大学出版会 一九八〇年六月十五日
- 『李卓吾一正道を歩む異端』 集英社 一九八五年二月
- 『中江兆民全集』（全十八巻）（共編） 岩波書店 一九八三年十一月—一九八六年四月
- 『儒教史』 山川出版社（共著）一九八七年七月三十日
- 『方法としての中国』 東京大学出版会 一九八九年六月三十日
- 『中国の思想』 放送大学教育振興会・日本放送出版協会 一九九一年三月二十日
- 『儒教ルネッサンスを考える』 大修館書店（主編）一九九一年十月
- 『碧巖録』上巻 岩波書店（共著）一九九二年六月十六日
- 『漢字文化圏の歴史と未来』 大修館書店（主編）一九九二年十一月
- 『交錯するアジア』（「アジアから考える」Ⅰ） 東京大学出版会（主編）一九九三年九月十日
- 『地域システム』（「同上」Ⅱ） 同上（主編）一九九三年十一月十日
- 『周縁からの歴史』（「同上」Ⅲ） 同上（主編）一九九四年一月十日
- 『社会と国家』（「同上」Ⅳ） 同上（主編）一九九四年三月二十日
- 『碧巖録』中巻 岩波書店（共著）一九九四年五月十六日
- 『近代化像』（「アジアから考える」Ⅴ） 東京大学出版会（主編）一九九四年六月

二十日

『長期社会変動』（「アジアから考える」VI） 東京大学出版会（主編）一九九四年十月

二十日

『世界像の形成』（「同上」VII）同上（主編）一九九四年十二月二十日

『中国の公と私』 研文出版一九九五年四月二十五日

『中国という視座』（「これからの世界史」） 平凡社（共著）一九九五年六月十日

『碧巖録』 下巻 岩波書店（共著）一九九六年二月十六日

『公私』 <一語の辞典> 三省堂一九九六年十二月十日

『中江兆民全集』（全十八巻・改訂版） 岩波書店（共編）二〇〇〇年十一月一二〇〇

一年七月

『中国思想文化事典』 東京大学出版会（共編）二〇〇一年七月五日

『中国の衝撃』 東京大学出版会二〇〇四年五月

『無根のナショナリズムを超えて:竹内好を再考する』 日本評論社(共著: 鶴見俊輔・

加々美光行氏編) 二〇〇七年七月

『朱子語類』 訳注巻1—3 垣内景子・恩田裕正編汲古書院(監修: 溝口雄三・小島毅)

二〇〇七年七月

『中国思想史』 東京大学出版会（共著: 溝口雄三・池田知久・小島毅氏） 二〇〇七

年九月

『<中国思想>再発見』 左右社（放送大学叢書）二〇一〇年五月

【著書・編著】（中国語）

『中国前近代思想的演变』 国立編訳館出版一九九四年十二月

『中国的思想』 中国社会科学出版社 一九九五年十二月

『日本人視野中的中国学』 中国人民大学出版社 一九九六年九月

『中国前近代思想之屈折与展開』 上海人民出版社 一九九七年八月

『中国前近代思想的演变』 中華書局 一九九八年一月

『新儒学史』 遠方出版社 一九九八年十二月

『做為方法的中国』 国立編訳館出版 一九九九年三月

『中国的思惟世界』 江蘇人民出版社（溝口雄三・小島毅主編 孫歌等訳）二〇〇六年

『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社（共著 陳光興・孫歌・劉雅芳編）二〇一〇年

『溝口雄三著作集』（既に四冊出版されている。さらに四冊出版予定。）

『作為方法的中国』孫軍悦訳 三聯書店 二〇一一年

『中国的衝擊』王瑞根訳 同上

『中国的公与私・公私』鄭静訳 同上

『中国前近代思想之曲折与展開』龔穎訳 同上

【著書】（韓国語）

『中国前近代思想의 屈折과 展開』 一九九九年八月

【著書】（フランス語）

CONFUCIANISME ET SOCIÉTÉS ASIATIQUES （共編） Editions L
Harmattan-Sophia University, 1991.10

【論文】（日本語）

「『呐喊』ノート」(1) 「魯迅研究」31号 pp.2-7 魯迅研究会 一九六三年六月

「『一件小事』をめぐって」呐喊ノート(2)「魯迅研究」32号 pp.1-7 魯迅研究会 一九六三年十月

「『頭髮的故事』をめぐって」呐喊ノート(3) 「魯迅研究」33号 pp.3-5 魯迅研究会 一九六三年十二月

「中国の魯迅研究と日本の魯迅研究」「魯迅研究」34号 pp.1-7 魯迅研究会 一九六五年四月

「魯迅における知識人と民衆」呐喊ノート(4)「魯迅研究」35号 pp.1-7 魯迅研究会 一九六六年五月

「知識人のえがく農民像」小野忍教授還暦退官記念『近代中国の思想と文学』 pp.347-371 大安 一九六七年七月

- 「魯迅」『中国文化叢書』5「文学史」 pp.369－387 大修館書店 一九六八年一月
- 『『明代における個人主義』について「中国の文化と社会」1－8 pp.8－16 東京大学
教養学部中国語研究室 一九六八年六月
- 『『孟子字義疏証』の歴史的考察』東京大学東洋文化研究所紀要第48冊 pp.141－274
一九六九年三月
- 「大学における中国語教育のあり方について(1)」『中国の文化と社会』3－8 pp.1－5
東京大学教養学部中国語研究室 一九七〇年十月
- 「大学における中国語教育のあり方について(2)」『中国の文化と社会』3－9・10 pp.9
－18 東京大学教養学部中国語研究室 一九七〇年十二月
- 「反宋学の道」「実存主義」54号 pp.22－33 以文社 一九七〇年十二月
- 「大学における中国語教育のあり方について(3)」『中国の文化と社会』3－11 pp.1
－9 東京大学教養学部中国語研究室 一九七一年二月
- 「大学における中国語教育のあり方について(4)」『中国の文化と社会』3－12 pp.4－
10 東京大学教養学部中国語研究室 一九七一年五月
- 「中国・道統・世界」「理想」464号 pp.1－17 理想社 一九七二年一月
- 「土着中国に対するこの土着日本」「理想」470号 pp.34－52 理想社 一九七二年七
月
- 「中国思想史研究上のいくつかの問題—岩間一雄氏『中国政治思想史研究』をめぐっ
て」『歴史学研究』400号 pp.36－47 青木書店 一九七三年九月
- 「公安派の道」『入矢・小川教授退休記念中国語学文学論集』 pp.619－634 筑摩書
房 一九七四年十月
- 「中国的理観とその展開」相良亨編『東洋倫理思想史』 pp.36－71 <現代哲学選書>
学文社 一九七七年五月
- 「明末清初思想の屈折と展開」「思想」636号 pp.875－901 岩波書店 一九七七年六
月
- 「いわゆる東林派人士の思想—前近代期における中国思想の展開」『東京大学東洋文
化研究所紀要』第75冊 pp.111－341 一九七八年三月
- 『『明夷待訪録』の歴史的位罫』「一橋論叢」81－3 pp.342－359 一橋大学一橋学会・
日本評論社 一九七九年三月
- 「明末清初思想研究の当面の課題—奥崎裕司『中国郷紳地主の研究』によせて」『歴史

- 学研究」468号 pp.29-35 青木書店 一九七九年五月
- 「中国における公私概念の展開」「思想」669号 pp.19-38 岩波書店 一九八〇年三月
- 「中国前近代における『理』の機能をめぐって」「一橋論叢」83-4 pp.499-518 一橋大学一橋学会・日本評論社 一九八〇年四月
- 「天人合一における中国的独自性」『佐藤一斎・大塩中斎』<日本思想大系>岩波書店 pp.739-753 一九八〇年五月
- 「『中国の近代』をみる視点」(1)「UP」96号 pp.1-5 東京大学出版会 一九八〇年十月
- 「『中国の近代』をみる視点」(2)「UP」97号 pp.6-10 東京大学出版会 一九八〇年十一月
- 「無善無悪の思想史的意義—荒木見悟『仏教と陽明学』『明末宗教思想研究』によせて」『歴史学研究』487号 pp.34-40 青木書店 一九八〇年十二月
- 「『中国の近代』をみる視点」(3)「UP」98号 pp.9-13 東京大学出版会 一九八〇年十二月
- 「『中国の近代』をみる視点」(4)「UP」99号 pp.26-31 東京大学出版会 一九八一年一月
- 「二つの陽明学」「理想」572号 pp.68-80 理想社 一九八一年一月
- 「明末における道と文」「東洋文化」61号 pp.1-17 東京大学東洋文化研究所 一九八一年三月
- 「明清期の人性論」『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』燎原 pp.203-229 一九八二年三月
- 「日本的陽明学をめぐって」「現代思想」10-12(臨時増刊号) pp.342-356 青土社 一九八二年九月
- 「近代中国像は歪んでいないか—洋務と民権および中体西用と儒教」「歴史と社会」2号 pp.103-157 リプロポート 一九八三年五月
- 「兆民の漢語語句—認定作業を振り返って(1)」『中江兆民全集』11 卷月報 8 pp.10-16 岩波書店 一九八四年六月
- 「兆民の漢文世界(上)—認定作業を振り返って(2)」『中江兆民全集』12 卷月報 10 岩波書店 一九八四年九月

- 「兆民の漢文世界（下）―認定作業を振り返って(3)」『中江兆民全集』13 卷月報 12
岩波書店 一九八五年一月
- 「認定の方法論と文章・文体論―認定作業を振り返って(4)」『中江兆民全集』14 卷月
報 14 pp.6-14 岩波書店 一九八五年五月
- 「続・認定の方法論と文章・文体論―認定作業を振り返って(5)」『中江兆民全集』15
卷月報 15 pp.12-16 岩波書店 一九八五年八月
- 「儒教・封建・反君主制思想」「国語通信」278 号 pp.13-18 筑摩書房 一九八五年
九月
- 「ある反『洋務』―劉錫鴻の場合」『伊藤漱平教授退官記念中国学論叢』 pp.235-257
汲古書院 一九八六年三月
- 「天下と国家・生民と国民」「歴史学研究」553 号 pp.48-49 青木書店 一九八六年
四月
- 「光緒初期の議会論」「中国―社会と文化」1 号 pp.92-101 東大中国学会 一九八六
年六月
- 「ふたたび<近代中国像>をめぐって」「史潮」新 19 号 pp.12-41 歴史学会 一九八
六年七月
- 「中国思想の受容について―林羅山を一例に」季刊「日本の美学」9 号 pp.94-110
ぺりかん社 一九八六年十二月
- 「方法としての中国」「UP」171 号 pp.1-5 東京大学出版会 一九八七年一月
- 「中国の『理』」「文学」55-5 pp.53-70 岩波書店 一九八七年五月
- 「中国の『自然』」「文学」55-6 pp.81-98 岩波書店 一九八七年六月
- 「李贄―正統ゆえの異端」日原利国編『中国思想史下』 pp.217-228 ペリかん社 一
九八七年七月
- 「中国の『道』」「文学」55-8 pp.78-94 岩波書店 一九八七年八月
- 「中国の『天』」（上）「文学」55-12 pp.194-208 岩波書店 一九八七年十二月
- 「中国の『天』」（下）「文学」56-2 pp.96-112 岩波書店 一九八八年二月
- 「津田シナ学とこれからの中国学」（上）『津田左右吉全集』第 18 卷月報 岩波書店 一
九八八年二月
- 「津田シナ学とこれからの中国学」（下）『津田左右吉全集』第 19 卷月報 岩波書店 一
九八八年三月

- 「中国の『心』」「文学」56—6 pp.226—245 岩波書店 一九八八年六月
- 「『タダの魯迅』との「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 pp.33—35 中国研究所 一九八八年八月
- 「中国の『公・私』」（上）「文学」56—9 pp.88—102 岩波書店 一九八八年九月
- 「中国の『公・私』」（下）「文学」56—10 pp.73—84 岩波書店 一九八八年十月
- 「思想としての道」東京大学公開講座48『道』 pp.3—30 東京大学出版会 一九八八年十二月
- 「儒教資本主義と儒教社会主義」「UP」195号 pp.8—13 東京大学出版会 一九八九年一月
- 「中国における『封建』と近代」「文明研究」7 pp.1—21 東海大学文明学会 一九八八年三月
- 『読四書大全説』口語語彙考』『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』 pp.1131—1149 汲古書院 一九九〇年三月
- 「中国儒教のアспект」「思想」第792号 pp.5—24 岩波書店 一九九〇年六月
- 「儒教ルネッサンスを考える」『儒教ルネッサンスを考える』 pp.13—38 大修館書店 一九九一年十月
- 「中国の民権思想」<世界史への問い10>『国家と革命』 pp.193—221 岩波書店 一九九一年十月
- 「中国の天一日本との比較から」祖父江孝男編『人間を考える』 pp.177—182 放送大学教育振興会・日本放送出版協会 一九九二年三月
- 「公・私」『中国思想史基礎範疇の体系的研究』（総合研究A 成果報告書） 一九九二年三月
- 「中国思想における近代・前近代・近世」「中国哲学研究」第5号 pp.228—245 東京大学中国哲学研究会 一九九三年三月十九日
- 「天理観の成立について」「東方学」第86輯 pp.1—20 東方学会 一九九三年七月三十一日
- 「中国における理気論の成立」『世界像の形成』（「アジアから考える」） pp.77—130 東京大学出版会 一九九四年十二月二十日
- 『天』と『人民』について』『西順蔵 人と学問』 内山書店 一九九五年四月一日
- 「清代儒教へのアプローチ」「江戸の思想」3 pp.94—107 ペリかん社 一九九六年

二月二十日

「中国社会と公倫理」『愛知大学国際問題研究所紀要』105号 pp.123-156 一九九

六年三月三十日

「日本における中国研究の現段階と21世紀の課題」『二十一世紀の中国と日本』

pp.430-443 北京大学出版社 一九九七年十月

「もう一つの『五・四』」『思想』第870号 pp.53-76 岩波書店 一九九六年十二月

五日

「いま儒教研究に求められているもの」『大東フォーラム』11号 大東文化学園 一九

九八年三月

「天に環流する公共」『比較思想的脈絡から見た公私問題』将来世代国際財団 一九九

八年十一月九日

「礼教と革命中国」『変容するアジアの法と哲学』pp.113-132 有斐閣 一九九九年

二月二十八日

「公共の知」『日韓で初めて語る公私問題』将来世代国際財団 一九九九年五月九日

「歴史を物語るということ」『日本史研究』446号 pp.12-22 日本史研究会 一九九

九年十月二十日

「再考・中国革命」『大航海』31 pp.110-119 新書館 一九九九年十二月五日

「思想文化から見た中国革命」『問題と研究』第29巻5号 pp.42-52 問題と研究出

版 二〇〇〇年二月

「歴史学における共感と科学性と主体」『日本史研究』451号 pp.41-53 日本史研

究会 二〇〇〇年三月

「日中間に知の共同空間を創るために」『世界』679号 pp.127-138 岩波書店 二〇

〇〇年九月一日

「中国思想・思想史研究の視座」『東方学』第100輯 pp.114-126 東方学会 二〇〇

〇年九月三十日

「中国観の問題点は何か」『歴史教科書何が問題か』pp.34-40 岩波書店 二〇〇一

年六月二十五日

「中国思想史における公と私」シリーズ<公共哲学>第一巻『公と私の思想史』pp.35

-58 東京大学出版会 二〇〇一年十一月十六日

「“中国の衝撃”」『国際文化会館会報』13巻1号 pp.1-14 二〇〇二年四月

「方法としての「中国独自の近代」 pp.39－59『中国の新たな発見』（加々美光行編）
愛知大学国際中国学研究センター叢書「現代中国学の構築に向けて」第 1 巻
pp.34－40 日本評論社 二〇〇八年三月
「辛亥革命をもたらした歴史の一潮流—明末の「地方公議」から清末の「地方自治」
へ」『中国の新たな発見』（加々美光行編）愛知大学国際中国学研究センター叢書
「現代中国学の構築に向けて」第 1 巻 pp.169－186 日本評論社 二〇〇八年三
月

【論文】（中国語）

「關於無善無惡論思想史的意義—読荒木見悟先生『仏教和陽明学』『明末宗教思想研究』」
「中国哲学史研究」一九八二—2 天津人民出版社 一九八二年二月
「論明末清初時期在思想史上的歷史意義」『史学評論』12 号 台北華世出版社 一九八
六年七月
「論明末清初時期在思想史上演變的意義」『日本学者論中国哲学史』 pp.427－474 中
華書局 一九八六年十一月
「陽明学与仏教（禅）」『世界宗教研究』一九八八—1 中国社会科学出版 一九八八年一
月
「儒教与資本主義掛鉤？」『当代』34 号 合志文化事業股・有限公司 一九八九年二月
「儒教・近代和現代」『哲学社会科学動態』94 号 山東社会科学院主弁 一九九〇年二
月
「中国民権思想的特質」『近代中国史研究通訊』9 号 一九九〇年三月
「中国民権思想の特色」『中国現代化論文集』台北中央研究院近代史研究所 一九九
一年
「日本人為何研究中国」『新史学』1－2 pp.85－100 台北三民書局 一九九〇年六月
「中国儒教の十箇方面」『孔子研究』一九九一—2 pp.49－61 斎魯書社 一九九一年
六月
「儒教與亜洲社会」『漢学研究通訊』43 期（與張廣達合編）pp.206－208 一九九二
年
「中日『公私』觀之比較」『二十一世紀』94—2（賀躍夫訳）pp.85－97 香港中文大学

- 中国文化研究所 一九九四年二月
- 「礼教与革命中国」「学人」第 10 輯 pp.121-140 江蘇文芸出版社 一九九六年九月
- 「現階段及 21 世紀日本の中国研究課題」『21 世紀中国与日本』 pp.430-443 北京大学出版社 一九九七年十月
- 「日本現階段的中国研究及 21 世紀的課題」『國際儒学研究』第 2 輯 pp.122-134 中国社会科学出版社 一九九六年十月
- 「日本中国学の課題」(上)『文史知識』総 185 期 pp.29-36 中華書局 一九九六年十一月
- 「同上」(下)『文史知識』総 186 期 pp.45-53 中華書局 一九九六年十二月
- 「中国的『調和共存』原理将帶領二十一世紀」「明報月刊」総 378 期 明報雜誌有限公司 一九九七年六月
- 「礼教与革命中国」『En suivant la Voie royale』Ecole Francaise D Extreme-Orient (「学人」より転載) 一九九七年九月
- 「另一個“五四”」「中国文化」第 15・16 期 pp.306-322 中国文化雜誌社 一九九七年十二月
- 「關於「近代」及其與中国的禮治体制問題：溝口雄三教授訪談」(李梁訪問)「中国研究」32 期 一九九七年
- 「中国的「調和共存」原理将帶領二十一世紀：溝口雄三教授訪談錄」(李長莉訪問)「明報月刊」378 期 一九九七年
- 「中国公私概念的發展」「国外社会科学」一九九八年第 1 期 pp.59-70 社会科学文献出版社 一九九八年一月十五日
- 「日中之間“知識共同”の可能性」「讀書」総 227 期 pp.115-123 三聯書店 一九九八年二月
- 「中国思想研究在日本—其改革与課題」「學術思想評論」第 3 輯 pp.399-413 遼寧大学出版社 一九九八年三月
- 「日本の近代化及其伝統因素:与中国比較」『儒家思想在現代東亞』(総論篇) pp.195-216 中央研究院中国文哲研究所 一九九八年十一月
- 「中国“理氣論”の形成」「學術思想評論」第 4 輯 pp.421-457 遼寧大学出版社 一九九八年十一月
- 「「公」の概念在中国和日本の区別」「船山学刊」pp.48-54 一九九九年十二月 湖南

省社会科学界聯合会

「戦争与革命之于日本人」「読書」総 252 期 pp.8-11 三聯書店 二〇〇〇年三月

「儒教与“文明圈の対話”」「『国際儒学研究』第 10 輯 国際儒学連合会 二〇〇〇年
六月

「俯瞰中国近代の新視角」「清史研究」総第 41 期 pp.80-84 中国人民大学清史研究
所 二〇〇一年一月

「創造日中間知識の共同空間」「読書」総 266 期 pp.3-11 三聯書店 二〇〇一年五月

「俯瞰中国近代」「読書」総 270 期 pp.91-98 三聯書店 二〇〇一年九月

「俯瞰中国近代の新視角」「『台大歴史学報』第 28 輯 台湾大学歴史学系 二〇〇一年十
二月

「儒教研究の新期待—以陽明学為中心」『東亜文化研究』第 1 輯 pp.282-302 東方出
版社 二〇〇一年十二月

「中国思想研和思想史研究の視角」「文史哲」pp.5-10 山東大学 二〇〇二年五月

「对中国思想研究視角の探索」『中西政治文化論叢』第 2 輯 pp.3-12 天津人民出版
社 二〇〇二年五月

「論天理觀の形成」「學術思想評論」第 10 輯 pp.99-121 吉林人民出版社 二〇〇三
年一月

「公私」「學術思想評論」第 10 輯 pp. 529-593 吉林人民出版社 二〇〇三年一月

「歴史認識問題是什麼問題」『全球化下的中国与日本』社会科学文献出版社 二〇〇三
年三月

「關於歴史叙述の意図與客観性問題」「學術思想評論」第 11 輯 pp.320-336 吉林人
民出版社 二〇〇四年

「日本中国学研究考察記（二）：訪日本著名中国学家溝口雄三」（何培忠訪問）「国外社
会科学」pp.59-61 二〇〇四年第 3 期

「作為“態度”的中国研究」「読書」二〇〇五年 4 期 pp.27-37 三聯書店 二〇〇五年

「重新思考辛亥革命的歴史定位」孫歌訳劉雅芳・鄭聖勳整理「台湾社会研究」67 二
〇〇七年九月

「辛亥革命新論」「開放時代」二〇〇八年 4 期 pp.5-17 二〇〇八年

【論文】（韓国語）

「中国の公と日本の公（おほやけ）」「大東文化研究」28 輯 成均館大学校大東文化研究院 一九九三年十二月三十日

「日本の経済発展とその伝統要素」『東洋思想社会発展』東亜日報社 一九九六年十月五日

「日本の経済発展とその伝統要素」（「栗谷公論」に轉載）栗谷公論社 一九九七年十二月二十五日

【論文】（英語）

“Confucian Ethics (li-jiao) and Revolutionary China” *Law In A Changing World:Asian Alternative* Franz Steiner Verlag Stuttgart, 1998.10

“A Search for the Perspective on the Studies of East Asia: Centering on Chinese Studies” *Sungkyun journal of East Asian Studies* Vol.1,NO.1
Sungkyun Kwan University: The Academy of East Asian Studies, 2001.9

【論文】（フランス語）

“Confucianism et Sociétés Asiatiques” *Confucianisme et Sociétés Asiatiques*
Edition L Harmatten-Sophia University, 1991.10

【翻訳】

魯迅「明天」尾上兼英他編『魯迅集』中国現代文学選集 2 平凡社 一九六三年

『焚書』抄訳 入矢義高編『近世随筆集』中国古典文学大系 55 平凡社 一九七一年九月

『伝習録』全訳荒木見悟編『朱子・王陽明』世界の名著・続 4 中央公論社 一九七四年三月

巖復「天演論」(1)埼玉大学紀要・外国語学文学篇 12 号 一九七八年十二月

『伝習録』（王陽明）中公クラシックス 中央公論新社 二〇〇五年九月

【書評】

「島田虔次『中国における近代思惟の挫折』」「日本読書新聞」1586号 日本出版協会 一九七一年三月

「荒木見悟『明代思想研究』」「週刊読書人」972号 読書人 一九七三年四月

「社会思想の歩み・その古典をたずねて／王陽明『伝習録』」「学生新聞」598号 一九七五年四月

「一冊の本／津田左右吉『文学に現れたる国民思想の研究』」「鄒其山」19号 内山書店 一九八八年三月

「王家驊『日中儒学の比較』」「週刊文春」 一九八八年七月

「最近の中国学の成果—佐野公治『四書学史の研究』・滋賀秀三『清代中国の法と裁判』」「週刊読書人」1744号 一九八八年八月

「いま・日本と中国を考える一日中比較文化論」「神奈川大学評論」7号 pp.91 神奈川大学広報委員会 一九九〇年二月

「国家を背負わないある政府使節団／阪本英樹『月を曳く船方—清末中国人の米欧回覧』」「中国研究月報」660号 pp.45—46 二〇〇三年二月

「矢崎勝彦著『信頼農園物語』」「公共的良識人」第185号 京都フォーラム 二〇〇七年四月

【雑著】（日本語）

「中国思想史研究」(1) 週刊「東洋経済」3619号 東洋経済新報社 一九七一年九月

「中国思想史研究」(2)週刊「東洋経済」3620号 東洋経済新報社 一九七一年九月

「思想史からみた中国」(1)「中国研究」38号 pp.35—38 日本中国友好協会出版部 一九七三年五月

「『公』と『おおやけ』」「中国研究」44号 pp.40—43 日本中国友好協会出版部 一九七三年十一月

「思想史からみた中国」(2)「中国研究」46号 pp.39—44 日本中国友好協会出版部 一九七四年一月

「袁中道のことなど」「中国語」175号 大修館書店 一九七四年八月

- 「知なき<知>のテーゼ」 「日本読書新聞」1848号 日本読書新聞社 一九七六年三月
- 『研究史上の重要な誤解』について」『歴史学研究』月報 196号 青木書店 一九七六年四月
- 『孤軍』の知己一松陰における李卓吾 藤田省三他編『吉田松陰』日本思想大系 54月報 61 岩波書店 一九七八年十一月
- 「すすめたい書物」「一橋小平学報」79号 pp. 4 一九七九年四月
- 「わが著書を語る」「出版ニュース」1189号 出版ニュース社 一九八〇年八月
- 「わたくしにとって読むとは」「価値ある情報」17—12 pp.25 ダイヤモンド社 一九八〇年十一月
- 「であいの功德というもの」「価値ある情報」17—13 pp.25 ダイヤモンド社 一九八〇年十二月
- 「ヨーロッパの光と影と」「価値ある情報」18—1 pp.25 ダイヤモンド社 一九八一年一月
- 『論語』の勝手読みのすすめ」「価値ある情報」18—2 pp.25 ダイヤモンド社 一九八一年二月
- 「正月有感」「価値ある情報」18—3 pp.25 ダイヤモンド社 一九八一年三月
- 「中国近現代思想の研究の現況」「価値ある情報」18—3 pp.25 ダイヤモンド社 一九八一年四月
- 「中国の『自然』について」「笹」1981—12 pp.6—7 笹発行所 一九八一年十二月
- 「中国の『無』について」「笹」1982—2 pp.9—11 笹発行所 一九八二年二月
- 「ある異端・李卓吾という人」陳舜臣『中国の歴史一明から清へ』研究ノート 11 平凡社 一九八二年九月
- 「清末の『民権』と『官権』」陳舜臣『中国の歴史一清朝二百余年』研究ノート 12 平凡社 一九八二年十二月
- 「共和革命思想と儒教」陳舜臣『中国の歴史一斜陽と黎明』研究ノート 13 平凡社 一九八三年三月
- 「天における『おのずから』と『自然』」『講座日本思想』1『自然』月報 1 東京大学出版会 一九八三年十月
- 「ある『タテマエ』の話」月刊「新時代」27号 自由主義経済推進機構 一九八四年五月

「この『本』を買いたい」「諸君」16—8 pp.182 文芸春秋社 一九八四年八月

「今年私はこれをやりたい—『碧巖録』改訂作業」「中外日報」1月1日 中外日報社 一九八八年一月

「ヨコ糸をもたない儒教」 「読売新聞」10月11日夕刊 一九八八年十月

「儒教とアジア世界」(上) 「中外日報」11月30日 中外日報社 一九八八年十一月

「儒教とアジア世界」(中) 「中外日報」12月1日 中外日報社 一九八八年十二月

「儒教とアジア世界」(下) 「中外日報」12月2日 中外日報社 一九八八年十二月

「舶来とアジア」<思想の言葉>「思想」792 pp.2—4 岩波書店 一九九〇年六月

「儒教と近代」「学人」第1輯 江蘇文芸出版社 一九九一年十一月

『東往西来』「西日本新聞」(50回連載) 西日本新聞社一九九三年五月十五日—七月十四日

「世界感覚」「アジアはいくつ」「ウイグル視点」「アジアと国家」「国家意識の枠」「民主化の胎動」「日本人の心」「アメリカ人の心」「中国人の心」「日本の心情」「アメリカ的親切」「大陸気質」「優越感のすれ違い」「漢文の功罪」「ある陽明学」「古いつきあい」「江南文人」「サイとセイ」「民権と人権」「四億の皇帝」「百年目盛」「おくれ・すすみ」「中華大国」「安楽貧道」「家庭内自立」「内助の功」「女子学生と社会」「区分と分担」「集団資本主義」「おーいお茶」「アジア国際」「姜抗と惺窩」「傷のうずき」「三国提携」「韓国製カメラ」「共通言語」「近代とは」「ポストモダンの波」「土着近代」「タコの頭」「差異と独自性」「三千八百年」「三国嘶」「円の錯覚」「口語のつきあい」「台湾の六・四」「歴史の襲」「歴史の真実」「地球」「漢詩表現」

「アジア自前の視座」「聖教新聞」 聖教新聞社 一九九四年七月十九日

「中国学における二十一世紀」<思想の言葉>「思想」843 pp.1—3 岩波書店 一九九四年九月五日

「外国学としての中国学」「大東文化」大東文化学園広報部 一九九四年十月十五日

「中国大陸の儒教ルネッサンス」「毎日新聞」(夕刊) 毎日新聞社 一九九四年十一月一日

「儒学研究に相対的な視点を」「朝日新聞」(夕刊) 朝日新聞社 一九九五年一月二十日

「Nature と自然」(講演記録)『東西文化と日本—その理解と誤解』 大東大エクステンションセンター 一九九五年二月十五日

- 「わたしのすすめる本・聶莉莉『劉堡』」「日中友好新聞」1707 日中友好協会 一九九五年三月十五日
- 「思想文化史から見た現代中国」（講演記録）＜シリーズ中国領域研究＞第 1 号『中国研究への新しい視座』文部省重点領域研究 113《現代中国の構造変動》 一九九六年八月三十一日
- 「さようなら＜近代＞」『河合おんぱろす』特別号《東アジア史を問い直す》河合文化教育研究所 一九九六年十月二十日
- 「日中文化交流の現場から」「聖教新聞」第 1270 号 聖教新聞社 一九九八年四月二十一日
- 「亜文学術誌発行と人類共通の利益」「亜細亜公論」1 号 栗谷文化院 一九九八年七月七日
- 「わが師・入矢義高先生」「創文」402 号 pp.1-4 創文社 一九九八年九月
- 「『日中・知の共同体』のこれまでとこれから」「東方」213 pp.2-8 東方書店 一九九八年十一月
- 「論語の新しい読み方」『14 歳と 17 歳の Book ガイド』 pp.309 河合塾 一九九九年一月
- 「入矢義高先生を偲ぶ」「東方学」第 97 輯 pp.163-165 東方学会 一九九九年一月
- 「ソウルでの神風特攻談義」『日韓で初めて語る公私問題』将来世代国際財団 一九九九年五月九日
- 「水泳のこと」月刊「健康」月刊健康発行所 一九九九年六月一日
- 「私のすすめる本：佐々木衛編『中国の家庭・郷村・階級』」日中友好新聞 1846 一九九九年七月二十五日
- 「入矢義高先生との出会い」『入矢義高先生追悼文集』 pp.220-224 汲古書院 二〇〇〇年三月
- 「中国の日本読み（講演要旨）」「大東文化大学漢学会誌」42 号 pp.9-18 大東文化大学漢学会 二〇〇〇年三月
- 「生きた『知』について（座談記録）」「大東文化大学中国学論集」20 号 pp.5-27 大東文化大学文学研究科中国学専攻 二〇〇〇年三月
- 「中国人の空間感覚」月刊「健康」月刊健康発行所 二〇〇〇年七月
- 「時の共有」「朝日新聞」夕刊 41113 号 朝日新聞東京本社 二〇〇〇年八月二十九日

「悠久と一時蠅」「同上」夕刊 41114 号 同上 二〇〇〇年八月三十日

「石畳の重奏」「同上」夕刊 41115 号 同上 二〇〇〇年八月三十一日

「山地の兎」「朝日新聞」夕刊 41116 号朝日新聞社 二〇〇〇年九月一日

『公共的企業人』のあり方『盛和塾』36 号 盛和塾 二〇〇〇年十月

「新世紀の第一歩」「しにか」131 号巻頭エッセイ pp.2-5 大修館書店 二〇〇一年
一月一日

『世紀』余話「図書」621 号 pp.25-27 岩波書店 二〇〇一年一月一日

「心の哲学と公共の経営」『盛和塾』39 号 盛和塾 二〇〇一年二月

「新しい日中関係へ—個人レベルで『知の共同空間を』」『東京新聞』夕刊 中日新聞東
京本社 二〇〇一年三月二十七日

「新たな日中関係—食い違いを認め合うことから」『中日新聞』夕刊 中日新聞社 二〇
〇一年四月三日

「西欧中心史観脱却を」『日本経済新聞』朝刊 41412 号 日本経済新聞社 二〇〇一年
四月四日

「子供達に何を教えるべきか」『北京週報』23 号北京週報社 二〇〇一年六月四日

「今、中国とどう向き合うか」『図書新聞』2357 号 (株) 図書新聞 二〇〇一年六月十
六日

『中国思想文化事典』序 東京大学出版会 二〇〇一年七月十五日

「稲盛哲学の核心は、相矛盾するものが調和し合うところにある」『盛和塾』44 号 盛
和塾 二〇〇一年十二月十日

「津田左右吉から学ぶ」『東方学会報』81 東方学会 二〇〇一年十二月二十五日

「明代史研究会と中山八郎先生」『中山八郎先生追憶文集』汲古書院 二〇〇二年一月
二十七日

『生の一宇』と『死の一宇』月刊「健康」月刊健康発行所 二〇〇二年八月

「縦帯と横帯」(思想の言葉)「思想」943 号 pp.2-5 岩波書店 二〇〇二年十一月

「条理としての自然—『自然』科学のあり方を問う」(特集科学技術政策の在り方)「学
術の動向」9(6) pp.59-65 日本学術協力財団 二〇〇四年六月

「否定の造型」としての学問「UP」33(10) pp.1-4 東京大学出版会 二〇〇四年
十月

「反日デモ—どういう歴史の目で見えるか」(特集=<反日>と向きあう)—(日中関係)

「現代思想」33(6) pp.144-151 青土社 二〇〇五年六月

『日本とアジア』(1961) 竹内好 (1910-1977) ー今、どう竹内か (総特集ブックガイド日本の思想) 「現代思想」33(7) pp.206-209 青土社 二〇〇五年六月

「人と学問溝口雄三氏を囲む鼎談開かれた東アジア研究に向けて一文脈と主体」(座談記録: 溝口雄三・孫歌・小島毅) 「中国社会文化学会」20 pp.548-579 二〇〇五年六月

講演要旨 現代中国における儒教と社会主義ー伝統思想から見る現代中国シリーズ(第3回)(含質疑応答) 調研クオターリー(22)読売新聞東京本社調査研究本部 二〇〇六年

「辛亥革命の歴史的個性」 「思想」989号 pp.88-107 岩波書店 二〇〇六年九月

「二十年先の完訳を望んでー『朱子語類』訳注の刊行開始に当たり」 汲古 51 pp.28-30 汲古書院 二〇〇七年六月

「勝己の友」春季特別勉強会講演録「勝己の友」40号 盛和塾<大阪>二〇〇七年十月十五日

「中国の近代を尋ねて」 「名古屋大學中國語學文學論集」21 pp.1-12 名古屋大學中國語學文學會 二〇〇九年

【雑著】(中国語)

「溝口雄三談中国的現代化」 「人民日報(海外版)」 人民日報社 一九九四年七月二十一日

「達己必先達人」 「光明日報」 光明日報社 一九九四年十月七日

「儒学在日本」 「人民日報(海外版)」 人民日報社 一九九四年十月十九日

「将儒学向全世界展示」 「大衆日報」 大衆日報社 一九九四年十月二十六日

「二十一世紀文化:市場原理与共生原理相结合」 「中華文化論壇」第4期 pp.8-9 中華文化論壇雜誌社 一九九四年十二月

「儒学在未来世界文化構成中的位置」 「国外社会科学」一九九五年第一期 pp.7-11 中国社会科学院文献情報中心 一九九五年²

²年譜によれば、「儒学在未来世界文化構成中的位置」の出典は、雑誌『東方』(東方雜誌社 一九九五年三月)であるが、実際は雑誌『国外社会科学』一九九五年第一期であ

「二十一世紀要成為怎樣的亜洲的世紀」「中国研究」95—4 中国研究月刊雜誌社 一九九五年四月

<日本学者談中国>「以“中国”為方法看世界」(探訪記事)「留学生新聞」第96号 亜洲太平洋交流股分公司 一九九五年七月十五日

「日本人認識中国文化五個階段—溝口雄三教授訪談録」《人物專訪張萍》「中国文化」第12期 pp.262—266 中国文化雜誌社 一九九五年十二月

「小日本与二十一世紀」「中国研究」96—1 中国研究月刊雜誌社 一九九六年一月

「寫于《亜文》發刊之際」「亜文」第一号 中国社会科学出版社 一九九六年十一月

【雜著】(韓国語)

「中国の近世と近代에 대하여」(講演抄録)「明清史研究会会報」2 明清史研究会 一九九三年十二月

【監修】

『朱子語類』訳注」(1) 「汲古」12号 汲古書院 一九八七年十二月

「同上」(2) 同上13号 同上 一九八八年六月

「同上」(3) 同上14号 同上 一九八八年十二月

「同上」(4) 同上15号 同上 一九八九年六月

「同上」(5) 同上16号 同上 一九九〇年二月

「同上」(6) 同上17号 同上 一九九〇年六月

「同上」(7) 同上18号 同上 一九九〇年十二月

「同上」(8) 同上19号 同上 一九九一年六月

「同上」(9) 同上20号 同上 一九九一年十二月

「同上」(10) 同上21号 同上 一九九二年六月

「同上」(11) 同上22号 同上 一九九二年十一月

「同上」(12) 同上23号 同上 一九九三年七月

「同上」(13) 同上24号 同上 一九九三年十一月

る。

「同上」(14) 同上 25 号 同上 一九九四年六月
 「同上」(15) 同上 26 号 同上 一九九四年十一月
 「同上」(16) 同上 27 号 同上 一九九五年六月
 『朱子語類』卷一訳注(一) 同上 28 号 同上 一九九五年十一月
 「同上」(二) 同上 29 号 同上 一九九六年七月
 「同上」(三) 同上 30 号 同上 一九九六年十一月
 「同上」(四) 同上 31 号 同上 一九九七年七月
 「同上」(五) 同上 32 号 同上 一九九八年一月
 『朱子語類』卷二訳注(一) 同上 33 号 同上 一九九八年六月
 「同上」(二)「汲古」34 号 汲古書院 一九九九年一月
 「同上」(三) 同上 35 号 同上 一九九九年六月
 「同上」(四) 同上 36 号 同上 一九九九年十二月
 「同上」(五) 同上 37 号 同上 二〇〇〇年六月
 「同上」(六) 同上 38 号 同上 二〇〇〇年十二月
 「同上」(七) 同上 39 号 同上 二〇〇一年五月
 「同上」(八) 同上 40 号 同上 二〇〇一年十二月
 「同上」(九) 同上 41 号 同上 二〇〇二年六月
 『朱子語類』卷九十三訳注(一) 同上 42 号 同上 二〇〇二年十二月

【辞典・事典】(項目執筆)

『哲学辞典』「宋学・陽明学・理気説・本然の性・氣質の性などの項目」青木書店 一九七一年十二月

GENRE JAPONICA 『萬有百科大事典Ⅰ文学』「李贄」小学館 一九七三年八月

『世界伝記大事典』日本・中国・朝鮮篇「王守仁・李贄・王夫之」ほるぷ出版 一九七八年七月

『日本大百科全書』「顧憲成・東林党、六論・六論衍義」小学館 一九八四年十一月—一九八九年三月

『広辞苑』第三版「中国儒学関係の項目の改訂・増補」岩波書店 一九八三年十二月

『中国思想辞典』「李贄」研文出版 一九八四年四月

『朝日百科・世界の歴史』8317 世紀の世界 2・人物「王船山」朝日新聞社 一九九〇年七月

『[現代日本] 朝日人物事典』「入矢義高・島田虔次・西順蔵」朝日新聞社 一九九〇年十二月

『岩波哲学・思想辞典』「天」 岩波書店 一九九八年三月

『中国思想文化事典』「自然・物・仁・災異・井田・公私・陽明学」東京大学出版会 二〇〇一年七月

【対談・座談】（日本語）

<鼎談>「朱子・王陽明をめぐって」（尾藤正英・荒木見悟氏）荒木見悟編『朱子王陽明』（世界の名著・続4）付録 中央公論社 一九七四年六月

<鼎談>「中江兆民の漢学」（1）（入矢義高・島田虔次氏）『中江兆民全集』3・月報 11 pp.1-16 岩波書店 一九八四年十一月

<鼎談>「中江兆民の漢学」（2）（入矢義高・島田虔次氏）『中江兆民全集』6・月報 13 pp.1-12 岩波書店 一九八五年三月

<座談>「中世におけるイエ」（佐々木潤之介・武田幸男・水林彪・峰岸純夫・三好洋子・山崎利夫氏）『中世史講座』4「中世の法と権力」 学生社 一九八五年四月

<対談>「異と同一の瀬踏み—日本・中国の概念比較」相良亨氏「文学」55-1 pp.6-20 岩波書店 一九八七年一月

<鼎談>「道と日本人」（樺山紘一・山田宗睦氏）COMMUNICATION 27 NTT出版 一九九〇年九月

<対談>「いまリーダーの条件を問う」（稲盛和夫氏）「致知」8月号 致知出版社 二〇〇一年七月一日

<座談>「先学を語る—入矢義高先生」（興膳宏・衣川賢次・松尾良樹氏）「東方学」第102号 pp.127-152 東方学会 二〇〇一年七月三十一日

<対談>「中国の『天』と西洋の『神』」（川出良枝氏）「UP」351号 pp.1-20 東京大学出版会 二〇〇二年一月五日

<対談>『歴史に入る』方法—知の共同空間を求めて（孫歌氏）『アジアを語ることのジレンマ』 岩波書店 二〇〇二年六月二十五日

<溝口雄三訪談録> (村田雄二郎、伊藤貴之、川尻文彦、大澤肇氏) 於東京大学駒場校
区 二〇〇七年四月二十八日

【対談・座談】(中国語)

<対談>「中国現代化離不開前近代時期的文化遺産—与日本教授溝口雄三談中国現代化
問題」(張謙氏)「北京青年報」二月六日 一九九二年二月

<対談>「關於“科学・道德・政治”的對話」(汪暉氏)「学人」第 2 輯 江蘇文芸出
版社 一九九二年二月

<対談>「没有中国的中国学」(汪暉氏)「讀書」総第 181 期 pp.82—87 三聯書店 一
九九四年四月

<鼎談>「日本与韓国儒学研究的共同課題」(李佑成・黒住眞氏)「学人」第 8 輯 pp.281
—310 江蘇文芸出版社 一九九五年十一月

<対談>「關於日中知識共同体」(孫歌氏)『學術思想評論』第 5 輯 pp.225—239 遼寧
大学出版社 一九九九年十月

<対談>「關於“知識共同体”」(孫歌氏)「開放時代」総第 155 期 pp.5—22 開放時
代雜誌社 二〇〇一年十一月

【講演・報告・研究発表】(一九九四年一月以降)

研究発表『9—10 世紀中国における天観の転換』国際朱子学会議 福建社会科学院・中
山大学共催於福建社会科学院 (中国福建省福州市) 一九九四年二月二日—三日

研究発表『族譜に見られる儒教倫理』国際徽学会議 国際徽学会主催 於安徽社会科学
院 (中国安徽省黄安市) 一九九五年八月二日—四日

基調報告『現段階及 21 世紀日本の中国研究課題』国際会議《21 世紀・中国与日本》

北京大学主催 於北京友誼賓館 (中国北京市) 一九九六年三月二十八日—九日

報告『日本の経済発展とその伝統要素』国際会議《東洋思想と社会発展》東亜日報・
人民日報共催 於ヒルトンホテル (韓国ソウル市) 一九九六年八月二十六日—七
日

主報告『礼教と革命中国』アジア法哲学シンポジウム 国際法哲学学会主催 於同志社

大学（日本国京都市） 一九九六年十月十一日一二日

研究発表『日本の近代化及其伝統因素』国際研究会《当代儒学主題計画》中央研究院
主催於中央研究院文哲研究所（台湾台北市） 一九九六年十二月十八日

講演『日中近代化の二条路』於中国社会科学院近代史研究所（中国北京市） 一九九
七年七月十一日

基調報告『日本の中国思想史研究之改革与課題』東アジア儒学思想文化国際会議東ア
ジア思想文化会議主催 於北京大学（中国北京市） 一九九七年八月一日一二日

基調報告『今、儒教研究に期待されていること—陽明学を中心に』国際陽明学京都会
議将来世代総合研究所主催 於国立京都国際会館（日本国京都市） 一九九七年
八月十一日一三日

講演『日中公私的比較』於中国社会科学院研究生院（中国北京市） 一九九七年十一
月十九日

講演『中国的歴史像』於三聯書店（中国北京市） 一九九七年十二月十二日

公開座談会『亜州近代化与近代性』（汪暉・黄平氏）於国際交流基金北京事務所ホール
（中国北京市） 一九九九年十二月十八日

講演『日本中国学の課題』 於上海師範大学（中国上海市） 一九九七年十二月二十三
日

講演『日中<知識共同体>の可能性』 於復旦大学（中国上海市） 一九九七年十二月
二十四日

講演『中国近代化の独自性』於上海社会科学院歴史研究所（中国上海市） 一九九七
年十二月二十五日

講演『<封建与近代> 在中国』於中国社会科学院歴史研究所（中国北京市） 一九九
七年十二月三十日

基調報告『中国思想史の脈絡から見た公私の問題』 第一回公共哲学共同研究会将来
世代総合研究所主催於リーガロイヤルホテル京都（日本国京都市） 一九九八年
四月二十五日

講演『三つの近代』神奈川大学人文学研究所主催記念講演会 於神奈川大学（日本国
横浜市） 一九九八年七月十六日

講演『東アジアにおける儒教文化と近代化』（日韓知識人会議）於 HANBEK 財団会
議室（韓国ソウル市） 一九九八年九月五日

- 講演 『湖南の拓いた中国史像』 内藤湖南先生顕彰会主催記念講演会 於鹿角市文化会館（日本国秋田県鹿角市） 一九九八年十月十七日
- 報告 『二つの近代化』 アジア問題懇話会主催国際シンポジウム《近代と儒教》於国際文化会館（日本国東京都） 一九九八年十一月七日
- 講演 『中華文明と 21 世紀』 中国・新疆フォーラム 於石河子大学（中国新疆省石河子市） 一九九八年十一月十四日
- 報告 『21 世紀をどのように伐り拓くか』 日中<砂漠緑化と奉仕理念>フォーラム 於石河子大学（中国新疆省石河子市） 一九九八年十一月十五日
- 講演 『中国という歴史物語』 奈良女子大学歴史学会大会記念講演 於奈良女子大学（日本国奈良市） 一九九八年十一月二十三日
- 報告 『公共の知』 日韓公私問題共同研究会・ソウル会議 於ソウル大学校文化会館国際会議室（韓国ソウル市） 一九九九年二月二十日
- 講演 『16—7 世紀中国の変動』 於西江大学校（韓国ソウル市） 一九九九年二月二十一日
- 講演 『東アジアにおける二つの近代化の道』 International Center for Dialogue Among Civilization 於《文明間の対話》国際センターホール（イラン共和国テヘラン市） 一九九九年九月九日
- 講演 『東アジアにどのように公共空間を創るか』 International Center for Dialogue Among Civilization 於《文明間の対話》国際センターホール（イラン共和国テヘラン市） 一九九九年九月十日
- 基調報告 『儒教と《文明間の対話》』 記念孔子誕辰 250 周年・国際儒学聯合会第二屆大会 於人民大会堂常務委員会會議室（中国北京市） 一九九九年十月七日
- 講演 『歴史を物語るということ』 日本史研究会 10 月例会 於機関紙会館ホール（日本国京都市） 一九九九年十月十六日
- 報告 『Generating Intellectual Public Space in East Asia』 Forward Studies Unit, European Commission 於 The EC—Conference Centre Borschette（ベルギー国ブリュッセル市） 一九九九年十月二十日
- 講演 『中国革命の文脈を考える』 <岩波市民セミナー>『問い直す中国革命』 於岩波市民セミナールーム（日本国東京都） 一九九九年十一月四日
- 講演 『思想文化から見た中国革命』 アジア問題懇話会第 40 回例会 於学習院大学（日

本国東京都) 一九九九年十一月十六日
 講演 『歴史学における共感と科学性と主体』 日本史研究会一九九九年度大会 於同志
 社大学今出川校地 (日本国京都市) 一九九九年十一月二十日
 公開座談『問い直す中国革命』(板垣雄三・濱下武志・和田春樹氏) <岩波市民セミナー>『問い直す中国革命』於岩波市民セミナールーム (日本国東京都) 一九九
 九年十二月二日
 基調報告『日本人にとっての戦争と革命』《日中・知の共同体》第三回シンポジウム『戦
 争と革命』於奥林匹克飯店 (中国北京市) 二〇〇〇年一月五日
 報告 『中国における公共的知識人としての儒者』第 21 回公共哲学共同研究会 於リ
 ーガロイヤルホテル京都 (日本国京都市) 二〇〇〇年四月二十八日
 講演 《A New Perspective on Modern China》Harvard Yenching Institute (米国ケ
 ンブリッジ市ハーバード大学) 二〇〇〇年九月十八日
 大会発言『俯瞰中国近代的新視角』經濟全球化与中華文化走向国際學術研討会 於市政
 協礼堂 (中国北京市) 二〇〇〇年十月二十五日
 基調講演『東アジア研究の視座についての模索—中国研究を例として』〈東亜細亜学国
 際學術會議〉於成均館大学校成均館大学校東アジア学院開院記念(韓国ソウ
 ル市) 二〇〇〇年十一月二十三日—二十五日
 講演 『禅と陽明学に学ぶ』盛和塾開西合同・中国古典勉強会 於天津プリンスホテル
 (日本国大津市) 二〇〇〇年十一月二十八日
 問題提起『日中間における報道ギャップ』<日中・知の共同体> 東京會議 於NHK
 エンタープライズ會議室 (日本国東京都) 二〇〇〇年十二月五日
 公開対談『東亜近代的新視野・比較的觀點』(子安宣邦氏) <東亜近世儒学中的經典詮
 釈伝統第六次研討會議>於台湾大学 (台湾台北市) 二〇〇一年五月十二日
 問題提起『「日中知の共同」の現在点』〈日中・知の共同体〉於岩波書店階會議室 (日
 本国東京都) 二〇〇一年九月九日
 問題提起『津田左右吉から学ぶ』東方学会第 51 回全国會員總會 於日本教育會館 (日
 本国東京都) 二〇〇一年十一月九日
 特別講演『中国の“衝撃”』中国社会科学研究会主催 於国際文化會館(日本国東京都)
 二〇〇一年十二月二十一日
 報告『歴史叙述に関する諸問題』北米シンポジウム<日本人の価値観・規範意識とヒ

- トリオグラフィ>「認知と叙述のスタイルから見た歴史教育」於国際日本文化研究センター（日本国京都市） 二〇〇二年一月十八日
- 報告『歴史認識問題は何が問題か』<日中・知の共同体>東アジア会議 於国際交流基金国際会議場（日本国東京都） 二〇〇二年八月三十日
- 「連続講演アジア理解講座<中国の心を知るために> 於国際交流基金アジアセンターレクチャールーム 二〇〇二年十月三日―十一月二十一日
- 第一回「中国の天と理」
- 第二回「中国の道と自然」
- 第三回「中国の公私」
- 第四回「中国近世の社会倫理」
- 第五回「中国における土地公有化のプロセス」
- 第六回「中国における地方分権化のプロセス」
- 第七回「中国は資本主義か社会主義か」
- 第八回「中国の近代は西欧型近代とどう異なるか」
- 基調報告第 21 回将来世代留学生フォーラム「我々の世代は過去世代から何を継承し、将来世代に継承させるために何を生成すべきなのか」京都フォーラム主催 於大覚寺（日本国京都市） 二〇〇三年十一月二十三日―二十四日
- 講演『正統を歩む異端李卓吾の思想に学ぶ』 第 9 回盛和塾<大阪> <長野> <中海>合宿研修会 盛和塾<大阪> <長野> <中海>於広島ウインズコートホテル（日本国広島県） 二〇〇四年六月十九日
- 講演『企業経営における本来的自己のあり方』「勝己の友」二〇〇七年春季特別勉強会 盛和塾<大阪>於リーガロイヤル NCB（日本国大阪市） 二〇〇七年四月二十一日
- 講演『企業経営における本来的自己のあり方信頼農園物語』「勝己の友」特別勉強会 盛和塾<大阪>於リーガロイヤル NCB（日本国大阪市） 二〇〇七年五月二十日
- 報告『深いところでふれあう和』第 78 回公共哲学京都フォーラム「通底の価値としての和と和解と共福」公共哲学共働研究所主催於国立京都国際会館（日本国京都市） 二〇〇七年十一月五日―六日
- 報告『中国における「私・欲」の共同性』第 87 回公共哲学京都フォーラム「義理と人情を語り直す:公共性の二つの倫理の源泉」公共哲学共働研究所主催於神戸ポ

ートピアホテル(日本国神戸市) 二〇〇八年十二月二十一日―二十三日
論語講座「ともに実心、ともに実学、ともに実践への道―経世済民の実学としての論
語」金曜講座「致良知への道」事務局於盛和塾<大阪>会議室 (日本国大阪市)
二〇〇八年四月二十五日―二〇〇九年四月二十四日

参考文献

- 1、著者名、書名の順に記載し、年代順に配列した。
- 2、分かりやすいように全集など、対談・インタビューなど、史料、単行本、論文の5つの項目に分けて示した。

【全集など】

- 『竹内好評論集』第一巻 1966年 筑摩書房
『竹内好評論集』第二巻 1966年 筑摩書房
『竹内好評論集』第三巻 1966年 筑摩書房
『竹内好全集』第八巻 1980年 筑摩書房
『竹内好全集』第十一巻 1981年 筑摩書房
『竹内好全集』第十四巻 1981年 筑摩書房
『溝口雄三 中国思想のエッセンスⅠ 異と同のあいだ』岩波書店 2011年
『溝口雄三 中国思想のエッセンスⅡ 東西往来』 岩波書店 2011年

【対談・インタビューなど】

日本語

- 汪暉・柄谷行人対談「マルクスの視点からグローバリズムを考える—東アジア共同体の可能性—」『世界』660 pp.183-200 1999年 岩波書店
孫歌・坂本ひろ子「想像力の貧困と思想の手続き」『現代思想』29(4) pp.42-55 2001年 青土社
溝口雄三・孫歌対談「歴史に入る方法—知の共同空間を求めて」孫歌著『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002年
溝口雄三・孫歌・小島毅「開かれた東アジア研究に向けて—文脈と主体—」『中国—社会と文化—』20 pp.548-579 2005年
溝口雄三・丸川哲史「日本人にとって中国研究とは何だったのか？」『ポスト〈東アジア〉』孫歌・白永瑞・陳光興編 作品社 2006年

孫歌・丸川哲史「歴史を見るまなざし(特集「東アジア」の歴史の脈動)」『季刊軍縮地球市民』9 pp.14-32 2007年 明治大学軍縮平和研究所

孫歌氏に聞く・聞き手丸川哲史「東アジア 越境する知—孫歌著『アジアを語ることのジレンマ』の刊行を機に」『週刊読書人』2451号 2002年8月30日号

溝口雄三／聞き手：村田雄二郎・伊東貴之 インタビュー「主体への問い—「方法としての中国」をめぐる」平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜編『インタビュー—戦後日本の中国研究』平凡社 2011年

中国語

溝口雄三・汪暉 「没有中国的中国学」『読書』1994年第4期 pp.82-87 三聯書店

溝口雄三／孫歌「關於“知識共同体”」『學術思想評論』第5輯 pp.225-239 1999年10月 遼寧大学出版社

溝口雄三・孫歌対談「關於“知識共同体”」『開放時代』2001年11月号 pp.5-22 広州市社会科学院

陳光興訪談・陳祐禎整理「文化「間」実践的可能性：與孫歌對話」『臺灣社會研究』第49期 pp.201-235 2003年 台湾社会研究雜誌社

溝口雄三・陳光興・孫歌 專題訪問「面对歷史的敬畏之念—溝口雄三教授東京訪談」陳光興・孫歌・劉雅芳篇『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社 2010年

【史料】

東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史部局史（一）』東京大学出版会 1986年

【単行本】

日本語

丸山真男『日本政治思想史』東京大学出版会 1952年

丁玲著・岡崎俊夫譯『丁玲篇』河出書房 1955年

竹内好『魯迅』1961年 未来社

E・H・カー著／清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書 1962年

- 丸山昇『魯迅』平凡社 1965 年
- 島田虔次『中国における近代思惟の挫折』筑摩書房 1978 年
- 安藤彦太郎『日本人の中国観』勁草書房 1971 年
- B・I・シュウォルツ／平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—嚴復と西洋』東京大学出版会 1978 年
- 奥崎祐司『中國郷紳地主の研究』汲古書院 1978 年
- 野村浩一『近代日本の中国認識—アジアへの航跡—』研文出版 1981 年
- 六角恒広『近代日本の中国語教育』淡路書房 1984 年
- 佐和隆光・新藤宗幸・杉山光信『八〇年代論：世紀末の政治・経済・思想』新曜社 1987 年
- 東史郎『わが南京プラトーン：一召集兵の体験した南京大虐殺』青木書店 1987 年
- P・A・コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988 年
- 尾上兼英『魯迅私論』汲古書院 1988 年
- 長崎暢子 山内昌之編『現代アジア論の名著』中央公論社 1992 年
- 小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店 1993 年
- 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996 年
- チャールズ・テイラー [ほか] 著／佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳『マルチカルチュラルリズム』岩波書店 1996 年
- 国分良成編『日本・アメリカ・中国—協調へのシナリオ』ティビーエス・ブリタニカ 1997 年
- 加藤典洋『敗戦後論』講談社 1997 年
- 足立啓二『専制国家史論—中国史から世界史へ』柏書房 1998 年
- 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社 1998 年
- 小林よしのり『新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論』幻冬舎 1998 年
- 佐藤慎一編『近代中国の思索者たち』大修館書店 1998 年
- 高橋哲哉『戦後責任論』講談社 1999 年
- 小島晋治等編著『20 世紀の中国研究—その遺産をどう生かすか』研文出版 2001 年
- 孫歌『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』岩波書店 2002 年
- 川勝平太編『グローバル・ヒストリーに向けて』藤原書店 2002 年

- 高橋哲哉『＜歴史認識＞論争』作品社 2002 年
- 笠原十九司『南京事件と日本人：戦争の記憶をめぐるナショナリズムとグローバリズム』柏書房 2002 年
- 渡辺利夫等編『大中華圏—その実像と虚像』岩波書店 2004 年
- 菊池理夫『現代のコミュニタリアニズムと「第三の道」』風行社 2004 年
- 蓐勇造『歴史意識の芽生えと歴史記述の始まり』山川出版社 2004 年
- 坂元ひろ子『中国民族主義の神話 人種・身体・ジェンダー』岩波書店 2004 年
- 孫歌『竹内好という問い』岩波書店 2005 年
- 宇野木洋『克服・拮抗・模索—文革後中国の文学理論領域—』世界思想社 2006 年
- 劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識—日中対話の試み』東京大学出版会 2006 年
- 加々美光行『鏡の中の日本と中国—中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座』日本評論社 2007 年
- 鶴見俊輔・加々美光行編『無根のナショナリズムを超えて—竹内好を再考する』日本評論社 2007 年
- 中野剛充『テイラーのコミュニタリアニズム：自己・共同体・近代』勁草書房 2007 年
- 名和田是彦編『社会国家・中間団体・市民権』法政大学出版局 2007 年
- 笠原十九司『南京事件論争史：日本人は史実をどう認識してきたか』平凡社 2007 年
- 家近亮子等『岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索—』晃洋書房 2007 年
- 子安宣邦『「近代の超克」とは何か』青土社 2008 年
- 加々美光行編〈叢書 現代中国学の構築に向けて〉『中国の新たな発見』日本評論社 2008 年
- 孫歌『歴史の交差点に立って』日本経済評論社 2008 年
- 高原明生等編著『越境』現代アジア研究 1 慶応義塾大学出版会 2008 年
- 川島真等編『1945 年の歴史認識—＜終戦＞をめぐる日中対話の試み』東京大学出版会 2009 年
- 平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜編『インタビュー—戦後日本の中国研究』

平凡社 2011 年

代田智明『現代中国とモダニティ：蝙蝠のボレミーク』三重大学出版会 2011 年

子安宣邦『日本人は中国をどう語ってきたか』2012 年 青土社

中国語

黄宗智『中国研究の規範認識危機：論社会經濟史中的悖論現象』1994 年 牛津大学出版社（香港）

孫歌『亞洲意味著什麼—文化間的「日本」』巨流圖書（台北） 2001 年

葛兆光『域外中国学十論』復旦大学出版社 2002 年

汪暉『現代中国思想の興起』三聯書店 2004 年

柯文著／雷頤等訳『在伝統与現代性之間—王韬与晚清』江蘇人民出版社 2006 年

愛德華・W・薩義德『東方学』三聯書店 2007 年

曾倚萃『溝口雄三の中國方法—超克亞洲的知識脈絡』國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心 2008 年

貢德・弗蘭克『白銀資本—重視經濟全球化中的東方』中央編訳出版社 2008 年

嚴紹璽<列国漢学史書系>『日本中国学史稿』学苑出版社 2009 年

石之瑜・黃佳甯〈中国学の知識社群研究系列 17〉『不是東方：日本中国認識中的自我與歐洲性』 國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心 2009 年

陳光興・孫歌・劉雅芳編『重新思考中国革命：溝口雄三的思想方法』台湾社会研究雜誌社 2010 年

島田虔次著 甘万萍訳『中国近代思惟の挫折』江蘇人民出版社 2010 年

孫歌『我們為什麼要談東亞—狀況中的政治与歷史』三聯書店 2011 年

英語

P・A・Cohen, *Discovering History in China : American historical writing on the recent Chinese past*, Columbia University Press, 2010

【論文】

日本語

- 目加田誠「文人の藝術」『中国文学月報』57 pp.109－112 1939年 中国文学研究会 復刻版
- 竹内好「目加田さんの文章」『中国文学月報』59 pp.151－154 1940年 中国文学研究会 復刻版
- 倉石武四郎「支那語教育について」『中国文学』71 pp.12－19 1941年 中国文学研究会 復刻版
- 竹内好・吉川幸次郎「翻訳論の問題」『中国文学』72 pp.84－92 1941年 中国文学研究会 復刻版
- 竹内照夫「漢文・支那語教育と支那学との現実—倉石主義の感想—」『中国文学』73 pp.107－110 1941年 中国文学研究会 復刻版
- 魚返善雄「記号の問題」『中国文学』73 pp.115－121 1941年 中国文学研究会 復刻版
- 竹内好「支那学の世界」『中国文学』73 pp.111－114 1941年 中国文学研究会 復刻版
- 竹内好「支那を書くということ」『中国文学』80 pp.501－506 1942年 中国文学研究会 復刻版
- 野沢豊「中国研究への反省」『アジア経済旬報』238－239 pp.20－24 1955年 中国研究所
- 戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点—近代アカデミズムの成立と中国研究の“系譜”（二）—」『理想』397 pp.8－25 1966年 理想社
- 幼方直吉「中国研究における否定と継承の問題—仁井田陞『中国の法と社会と歴史によせて—』」『思想』523 pp.179－189 1968年 岩波書店
- 野原四郎・藤井満洲男・小島晋治「欧米人の革命史ルポと日本の中国研究」『中国研究月報』250 pp.1－16 1968年 中国研究所
- 六角恒広「中国語教育史の諸問題」『早稻田商學』144 pp.199－227 1960年 早稻田商学同友会
- 六角恒広「中国語教育の歴史的意義」『早稻田商學』219 pp.253－283 1970年 早稻田商学同友会
- 六角恒広「戦後の中国語教育」『早稻田商學』229 pp.133－159 1972年 早稻田商

学同攷会

六角恒広「中国語教育の現実と理念」『早稲田商學』237 pp.133-160 1973年 早稲田商学同攷会

河田悌一「アメリカの中国研究」『創文』1981年9月号 pp.15-18 創文社

河田悌一「アメリカの中国研究」『創文』1981年10月号 pp.18-22 創文社

六角恒広「実用中国語学教学の建設について」『中国研究月報』400 pp.3-8 1981年 中国研究所

佐藤慎一「アメリカの中国研究」『創文』223号 pp.5-8 1982年 創文社

奥崎祐司「溝口雄三「中国前近代思想の屈折と展開」『歴史学研究』504 pp.22-27 1982年 青木書店

三浦秀一「溝口雄三著『中国前近代思想の屈折と展開』『集刊東洋學』48 pp.85-92 1982年 東北大学中国文史哲研究会

久保田文次「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」『史潮』新16 pp.68-94 1985年 弘文堂

松本三之介「戦後思想と竹内好」『世界』486 pp.225-237 1986年 岩波書店

佐藤慎一「模倣と反発—近代中国思想史における「西洋モデル」について」『法学』51(6) pp.1110-1157 1988年 東北大学法学会

杉山文彦「近代中国像の「歪み」をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」『文明研究』6号 pp.11-19 1988年 東海大学文明学会

尾上兼英教授略歴・主要著作目録『東洋文化研究所紀要』106 pp.3-10 1988年 東京大学東洋文化研究所

井尻秀憲「「知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像」P.コ・エン著 佐藤慎一訳」『国際問題』345 pp.68-71 1988年 日本国際問題研究所

並木頼寿「『知の帝国主義』を読んで」『中国研究月報』485 pp.34 1988年 中国研究所

張士陽「ポール・A・コーエン著/佐藤慎一訳『知の帝国主義』『史學雑誌』97 pp.1903-1904 1988年 史学会

佐藤一樹「近代中国研究と「西洋」:ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」『中国文化:研究と教育:漢文学会会報』47 pp.66-75 1989年

今沢紀子「「知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像」P.A.コ・エン著 佐藤慎一訳」

- 『歴史学研究』595 pp.49-55 1989年 歴史学研究会
- 河田悌一「書評『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『思想』1989年6月号 pp.158-163 岩波書店
- 臼井佐知子「溝口雄三著『方法としての中国』」『史學雑誌』98(9) pp.1572-1573 1989年 史学会
- 子安宣邦「思想の言葉 方法としての中国」『思想』783 pp.1-4 1989年 岩波書店
- 佐藤慎一「天演論以前の進化論」『思想』792 pp.241-254 1990年 岩波書店
- 馬淵昌也「明清時代における人性論の展開と許諾」『中国哲学研究』1 pp.34-57 1990年 東京大学中国哲学研究会
- 代田智明「『溝口方法論』をめぐって—一統・近代論の構図(上)—」『野草』46 pp.1-15 1990年 中国文芸研究会
- 本野英一「中国の現状を歴史学はどう説明するか—日米の近刊二書を中心に—」『東方』107号 pp.21-26 1990年 東方書店
- 六角恒広「中国語教育の二つの道」『中国研究月報』45(2) pp.1-11 1991年 中国研究所
- 伊東貴之「『挫折』論の克服と『近代』への問い—戦後日本の中国思想史研究と溝口雄三氏の位置—」『中国哲学研究』5 pp.152-204 1993年 東京大学中国哲学研究会
- 川島真「溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『交錯するアジア』(アジアから考える1)」『史学雑誌』103(8) pp.1534-1536 1994年 史学会
- 上田信「脱近代・脱欧脱亜・脱日本」『現代思想』22(14) pp.294-311 1994年 青土社
- 岸本美緒「アジアからの諸視角—「交錯」と「対話」(批判と反省)」『歴史学研究』676 pp.36-47 1995年 歴史学研究会 青木書店
- 佐藤慎一「進化と文明—近代中国における東西文明比較の問題について」『東洋文化』75 pp.123-165 1995年 東京大学東洋文化研究所
- チャールズ・テイラー「多文化主義・承認・ヘーゲル」『思想』865 pp.4-27 1996年 岩波書店
- 安藤彦太郎・斎藤秋男・小島晋治・太田勝洪・並木頼寿「中研50年の歩み」『中国研

- 究月報』50(5) pp.1-17 1996年 中国研究所
- 安藤彦太郎「戦時期日本の中国研究について」『中国研究月報』52 pp.33-52 1998年 中国研究所
- 楊大慶・小沢弘明訳「歴史家への挑戦—「南京アトロシティ」研究をめぐる—」『思想』1998年8月号 pp.83-109 岩波書店
- 金スノグ「丁玲《新的信念》試論 —「語り」はいかにして生まれたか—」『中國文學研究』24 pp.83-93 1998年 早稲田大學中國文學會
- 馬場公彦「日中で「知の共同体」はいかにして可能か？」『世界』1999年2月号 pp.220-221 岩波書店
- 山内小夜子「“南京裁判”をめぐる内外の危険な動き」『世界』1999年4月号 pp.220-221 岩波書店
- 水谷尚子「私はなぜ東史郎に異議を唱えるか」『世界』1999年8月号 pp.219-225 岩波書店
- 中北龍太郎・丹羽雅雄・空野佳弘「『東裁判』の真実を訴える—八月号水谷尚子論文批判—」『世界』1999年10月号 pp.275-281 岩波書店
- 吉田俊「南京大虐殺はどう語られてきたか」『戦争責任研究』24 pp.28-37 1999年 日本の戦争責任資料センター
- 代田智明「近代論の行方—新たに「方法としてのアジア」を—」『野草』63 pp.1-21 1999年 中国文芸研究会
- 代田智明「「日中・知の共同体」シンポジウムに参加して」『中国研究月報』53 pp.50-51 1999年 中国研究所
- 尾上兼英等「座談会 わが戦後中国学事始め—中国語学科退休教授三人談」『人文研究』135 pp.1-33 1999年
- 酒井直樹・高橋哲哉・孫歌・戴錦華＜座談会＞「戦争の感情記憶の壁どう乗り越えるか」『世界』54 pp.190-205 2000年 岩波書店
- 代田智明「感情としての「加害の記憶」」『中国研究月報』54 pp.54-57 2000年 中国研究所
- 野村浩一「中国研究・中国認識—戦前と戦後をつなぐもの・断ち切るもの—ミクロの視角から—」『中国研究月報』54 pp.37-53 2000年 中国研究所
- 伊東貴之「明かしえぬ共同体、異交通の現場—日中・知の共同体」『図書新聞』2513

- 2514 号 2000 年 12 月 9 日号・16 日号
- 国分良成「日本の中国研究—改善すべき四つの矛盾—」『世界』685 pp.117-121
- 2001 年 岩波書店
- 古厩忠夫「「感情記憶」と「事実記録」を対立させてはならない—溝口雄三論文への反論として」『世界』692 pp.136-146 2001 年 岩波書店
- 李曉東「制度としての民本思想—梁啓超の立憲政治観を中心に—」『思想』2001 年 12 月号 pp.123-141 岩波書店
- 孫歌「近代史に向き合う倫理的責任が問われている—溝口論文への返答として—」『世界』689 pp.102-109 2001 年 岩波書店
- 伊東貴之「「他者の来歴」、「現象」としての中国—状況論的、文脈的、そして、原理的に—」『現代思想』29 (4) pp.130-141 2001 年 青土社
- 孫歌「これからの知の共同体とは」『アジアセンターニュース』22 pp.20-21 2002 年 国際交流基金アジアセンター
- 代田智明「日本における近代批判と魯迅」『中国研究月報』56 pp.55-62 2002 年 中国研究所
- 代田智明「「アジア」は無意味か」『中国研究月報』56 pp.39-43 2002 年 中国研究所
- 汪鴻祥「相互理解と共同創造の日中新時代を—日中国交正常化 30 周年を記念に—」『創大平和研究』24 pp.3-13 2002 年 創価大学平和問題研究所
- 石田米子「中国における日本軍性暴力被害の調査・記録に取りくんで—被害女性たちの「出口気」(心にわだかまるものを吐き出す)の意味を考える」『中国女性史研究』11 pp.17-36 2002 年
- 水谷尚子「日中両国民があゝの戦争の歴史を共有するために—孫歌の「東史郎裁判」と「歴史認識」をめぐる論考に答えて」『現代中国研究』12 pp.36-50 2003 年
- 古厩忠夫「日中戦争史叙述の視角」『環日本海研究年報』10 pp.64-71 2003 年 新潟大学大学院現代社会文化研究科環日本海研究室
- 小森陽一「21 世紀の中・日関係を築くために—「日中・知の共同体」の六年間」『日本近代文学』68 pp.145-151 2003 年 日本近代文学会 三省堂
- 下出宣子「孫歌「魯迅が脱いだ服」評—『アジアを語ることのジレンマ』2002 年 6 月 岩波書店 所収」『日本中国当代文学研究会会報』17 pp.78-81 2003 年

日本中国当代文学研究会

伊東貴之「『歴史』と相渉る、開かれた主体形成の倫理—孫歌『アジアを語ることのジレンマ—知の共同空間を求めて』を読む」『政治思想学会年報』18 pp.2-8

2004 年

小林敏明「ナショナリズムにおける感情の問題—孫歌『アジアを語ることのジレンマ』との対話の試み」『情況』3-5-3 pp.12-23 2004 年 情況出版

岩崎稔「孫歌報告へのコメント（シンポジウム 世界システムの変容と「地域研究」の再定義）—（「文化」概念の脱構築）」『史資料ハブ地域文化研究』3 pp.82-85

2004 年 東京外国語大学大学院地域文化研究科

代田智明「溝口雄三著『中国の衝撃』」『中国研究月報』59 pp.45-48 2005 年 中国研究所

西野可奈「溝口雄三『中国の衝撃』」『北東アジア研究』8 pp.95-100 2005 年 島根県立大学

佐藤美奈子「『アジア』を語るということ—1980 年代以降の竹内好論—」『社会科学研究』58(1) pp.47-68 2006 年 東京大学

秋吉收「『中国文学（月報）』と中国語：竹内好らの活動を軸として」『中国文学論集』35 pp.58-72 2006 年

津田道夫「感情記憶としての三十万—南京大虐殺（中国侵略・南京大虐殺 70 周年）」『人権と教育』47 pp.108-115 2007 障害者の教育権を実現する会

穂山新「中国を語る作法と「近代」」『社会学ジャーナル』32 pp.77-93 2007 年 筑波大学社会学研究室

岩間一雄「中国はどこへいくのか—魯迅から汪暉まで—」『岡山大学法学会雑誌』59(3・4) pp.349-379 2010 年

加々美光行「知の共同体形成に情熱—溝口雄三さんをしのんで」『朝日新聞』2010 年 7 月 29 日

戸川芳郎「溝口雄三君を悼む」『東方学』121 pp.196-199 2011 年 東方学会

小島毅「溝口雄三教授追悼文」『東方学』121 pp.195-196 2011 年 東方学会

朱琳「溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』」『国家学会雑誌』124 (3-4) pp.372-375 2011 年 国家学会事務所

李曉東「公共性から考える中国の「社区」の「自治」」『総合政策論叢』23 pp.123-

138 2012 年 島根県立大学 総合政策学会

代田智明「癒しの文学としての鲁迅」『中国研究月報』66 pp.35-40 2012 年 中国
研究所

子安宣邦「現代中国の歴史的な弁証論—溝口雄三『方法としての中国』『中国の衝
撃』を読む」『現代思想』40 (14) pp.38-55 2012 年 青土社

中国語

李甦平「溝口雄三(日)教授談研究中国哲学」『哲学動態』1991 年第 3 期 pp.18-20
中国社会科学院哲学研究所

李甦平「構築儒学の新框架—読溝口雄三の『作為方法的中国—』」『国外社会科学』1991
年第 7 期 pp.76-78 中国社会科学院文献情報中心

葉坦「日本中国学家溝口雄三」『国外社会科学』1992 年第 6 期 pp.58-62 中国社
会科学院文献情報中心

汪暉「伝統与現代性」『学術月刊』1994 年 6 期 pp.9-11 上海市社会科学界聯合会

孫歌「作為方法の日本」『読書』1995 年第 3 期 pp.101-107 三聯書店

孫歌「在歴史中寻找什麼—再読『在亜洲思考』」『読書』1996 年第 7 期 pp.93-100
三聯書店

孫歌「“漢学”の臨界点—日本漢学引發的思考」『世界漢学』1998 年第 1 期 pp.46-
63 中国文化研究所

許紀霖「以中国為方法，以世界為目的」『国外社会科学』1998 年第 1 期 pp.54-58
中国社会科学院文献情報中心

李長莉「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三の中国思想研究—」『国外社会科学』
1998 年第 1 期 pp.49-53 中国社会科学院文献情報中心

孫歌「《世界》：直面日本の負面遺産」『読書』1998 年第 5 期 pp.42-45 三聯書店

汪暉「当代中国の思想状況与現代性問題」『文芸争鳴』1998 第 6 期 pp.7-22 吉林
文学芸術界聯合会

陳来「簡論東亜各国儒学の歴史文化特色」『北京大学学報（哲学社会科学版）』1999
年第 1 期 pp.105-108

白永瑞「世紀之交再思東亜」『読書』1999 年第 8 期 pp.3-8 三聯書店

孫歌「亜洲論述与我们的兩難境地」『読書』2000 年第 2 期 pp.52-59 三聯書店

- 孫歌「実話如何実説」『読書』2000年第3期 pp.12-21 三聯書店
- 小島潔「思考的前提」『読書』2000年第3期 pp.3-7 三聯書店
- 吳曉東「記憶的神話」『読書』2000年第5期 pp.142-148 三聯書店
- 武藤一羊「近代日本和中国革命」『読書』2000年第6期 pp.20-27 三聯書店
- 吳曉東「記憶的暗殺者」『読書』2000年第7期 pp.16-20 三聯書店
- 範晨陽「感情記憶不可靠」『読書』2000年第7期 pp.122 三聯書店
- 孫歌「全球化与文化差異：对于跨文化知識狀況的思考」『東方文化』2001年第2期
pp.78-89 廣東中華民族文化促進會;華南師範大學
- 劉超「“感情記憶”与“事实”缺席」『読書』2001年第9期 pp.157-158 三聯書店
- 孫歌「感情記憶：面对相互纏繞的歷史」『開放時代』2002年第3期 pp.134-139 廣州市社會科學院
- 顧乃忠「論文化的普遍性和特殊性—兼評孔漢思的『普遍理論』和溝口雄三的『作為方法的中国學』—」(上)『浙江社會科學』2002年第5期 pp.122-131 浙江社會科學界聯合會
- 顧乃忠「論文化的普遍性和特殊性—兼評孔漢思的『普遍理論』和溝口雄三的『作為方法的中国學』—」(下)『浙江社會科學』2002年第5期 pp.103-117 浙江社會科學界聯合會
- 蔡慶「溝口雄三的中国學方法研究」『武漢大學學報(人文科學版)』56(2) pp.170-184 2003年
- 方旭東「Modern 之後思想史研究範式的轉移」『哲學研究』2003年第4期 pp.59-64
中國社會科學院哲學研究所
- 張仲民「一個思考：由柯文“中国中心觀”談起」『人文雜誌』2003年第5期 pp.110-114 陝西省社會科學院
- 韓東育「日本近代化論在“時空”定位上的兩難」『日本學刊』2003年第6期 pp.136-148 中國社會科學院日本研究所;中華日本學會
- 張崑將「關於東亞的思考「方法」—以竹內好、溝口雄三與子安宣邦為中心」『台灣東亞文明研究學刊』1(2) pp.259-288 2004年 國立台灣大學東亞文明研究中心
- 韓東育「中国伝統“平衡論”的前提假設与反假設」『社會科學戰線』2004年第1期
pp.113-125 吉林省社會科學院
- 何培忠「日本中国學考察記(二)—訪著名日本中国學家溝口雄三—」『國外社會科學』

- 2004 年第 3 期 pp.59—61 中国社会科学院文献情報中心
- 楊芳燕「明清之際思想轉向的近代意涵—研究現狀与方法的省察」『開放時代』 2004 年第 4 期 pp.52—66 廣州市社会科学院
- 高寿仙「轉型的內在理路：晚明思潮的反思」『新視野』2004 年第 3 期 pp.70—72 北京市委党校;北京行政学院
- 白永瑞·陳光興·孫歌「關於東亞論述的可能性」『書城』2004 年第 12 期 pp.35—45 上海三聯書店
- 許紀霖「現代中国的民族国家認同」『世界經濟与政治論壇』2005 年第 6 期 pp.92—94 江蘇省社会科学院世界經濟研究
- 許紀霖「啓蒙思想的內在岐路—对 90 年代中国思想的若干思考」『書城』2005 年第 7 期 pp.58—62 上海三聯書店
- 子安宣邦·趙京華訳「竹内好問題試論—“文学之根本的政治性”—」『書城』2005 年第 10 期 pp.28—31 上海三聯書店
- 子安宣邦·趙京華訳「日本近代史上的兩個六十年与日中關係」『讀書』2005 年第 10 期 pp.60—66 三聯書店
- 陳光興「「亞洲」做為方法」『臺灣社會研究』57 pp.139—218 2005 年 台灣社会研究雜誌社
- 子安宣邦、汪暉、王志松、崔之元、劉小曹衛東、權基永、江上幸子、董炳 「如何看待二十世纪」『讀書』2006 年第 2 期 pp.133—144 三聯書店
- 石之瑜·李圭之·曾倚萃「日本近代中国学：知識可否解放身份」『中国社会科学』2007 年第 1 期 pp.168—178 中国社会科学院
- 孫歌「跨文化視野的形成—回顧知識共同体的思想課題」『中国図書評論』2008 年第 1 期 pp.71—76 中国版協図書評論学会
- 鐘月岑「立場与方法学的映照」『開放時代』2008 年第 4 期 pp.28—31 廣州市社会科学院
- 史艷玲、張如意「日本中国学研究的新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」『河北大学学报（哲学社会科学版）』2008 年第 5 期 pp.32—36
- 孫歌「在中国的歷史脈動中求真—溝口雄三的學術世界—」『開發時代』2010 年第 11 期 pp.35—63 廣州市社会科学院
- 朱濤「“範式危機”凸顯的認識誤区—对柯文式“中国中心觀”的实践性反思」『社会科

- 学研究』2011年第4期 pp.133—145 四川省社会科学院
- 石之瑜・徐耿胤「亚洲国家視野下的中国歴史基体—兼論日本、韓国和越南發展研究視角的可能性」『世界經濟与政治』2011年第5期 pp.58—76 中国社会科学院世界經濟与政治
- 孫歌「民衆視角與民衆的連帶」『台湾社会研究季刊』81 pp.395—410 2011年 台湾社会研究雜誌社
- 張永堂「做為「方法」的溝口雄三教授」『台湾社會研究季刊』81 pp.411—434 2011年 台湾社会研究雜誌社
- 葛兆光「重新理解溝口雄三」『思想』20 pp.1—44 2012年 聯經出版

英語

- Kuang-ming Wu, Chun-chieh Huang, "Book Review Mizoguchi, Yūzō(溝口雄三), Hōhō Toshite No Chūgoku(方法としての中国)", *Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, New Series Vol.20 No.2, pp.379—389, 1990.
- Rowe・William, "The Problem of 'civil society' in Late Imperial China", *modern china*, 19(2), pp.139—157, 1993.
- Takeshi Hamashita, "Professor Yuzo Mizoguchi: personal remembrance", *Inter-Asia Cultural Studies*, Vol12 No1, pp.3—12, 2011.